
正義の味方と武士娘

赤い外套

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方と武士娘

【Nコード】

N7404L

【作者名】

赤い外套

【あらすじ】

遠坂凜のおかげで自分の為に生きてみたいと思った衛宮士郎。

死に際に凜は士郎にもう一度チャンスを与え、平行世界へと送る。

・ 新たな世界で士郎は、かけがえのない仲間達と出会ったのであった。

くプロローグ 正義の味方の旅立ち

パチ パチ パチ

ここは、とある戦争の跡地

焼き果てた荒野に広がるのは死体の山と元は民家だったであろう炭の山

そんな悲しい世界の中心に少女と青年、二つの人影がある

「ぐすつ……ごめんなさい……ありがとう……ごめんなさい」

「大丈夫さ……心配ない」

泣きながら感謝と謝罪を述べる少女に

重傷を負っている青年は少女に心配をかけない為

少女の頭を撫でながら、とてもやさしい声で言った

「さあ、一緒に人のいる所まで行こう」

青年はどこからともなくコートを取り出し一枚を少女に着せ
もう一枚を、自らの傷を少女に隠すように羽織る

「ぐすつ……うん」

しばらく歩くと小さな村に着く

青年は身寄りのなくなつた少女をその村に預け、すぐに村を発つた

「ありがとう、お兄ちゃん」

そんな青年を見送る少女に、笑顔で手を振りながら

「ぐっ！・・・はあはあ」

村から出て数時間、重傷だった青年はついに倒れる

「そろそろ限界か・・・」

青年の名は衛宮士郎

フリーランスの魔術使いとして世界を回り

隠匿すべき魔術を人々を救う為に使いすぎて、封印指定を受ける

彼は協会の執行者に追われながらも戦地を転々と渡り、人々を救い続けた

「最後に、凜の顔が見たかったな・・・トレース 投影、オン 開始」

士郎の手に現れたのは捻じれた剣

グラデーション・エア

これこそ衛宮士郎が得意とする投影と呼ばれる魔術

イメージ

術者の創造理念によって真作を再現する特殊な魔術で

魔力によってオリジナルの鏡像を物質化する

しかし、士郎の場合投影はある魔術から零れ落ちたもので

宝具と呼ばれる神秘までも再現する事ができ

原形を留められないほど破損するか

士郎が壊れると思わない限りいつまでも存在し続ける

士郎は封印指定されている自らの魔術が人の手に渡らぬ為

ブロックン・ファンタズム

内包された魔力を爆発させる壊れた幻想によって

自らの体を消滅させようとしていた

「待ちなさい」

その時、声をかけられそちらを向くと
会いたいと思った人物が立っていた

「凜・・・か？」

「久しぶりね士郎」

それは紛れもなく元恋人である遠坂凜だった

聖杯戦争後も士郎の理想を手助けしてくれた大切なパートナー
封印指定にされた時に迷惑をかけない為、士郎自ら離れたのだ

「ああ、久しぶり」

「ずいぶん無茶したみたいね。その格好まるでアーチャーみたいじゃない」

士郎の今の姿は白い髪に浅黒い肌、かつての彼女の相棒と瓜二つである

「俺とあいつは違うよ。世界と契約なんて馬鹿げた事はしないし、
この結末に後悔もしてない」

「・・・」

凜の表情は何かを見極めようとしているような真剣な顔

「それにさ、自分の命を蔑ろにはしてないつもりだ。残されるもの

の悲しみとか、色々考えるようになったから・・・これは凜のおかげだな」

凜との生活で士郎は変わった

昔のように、すぐに自分の命を捨てるような行動はしなくなった
ただ、今回は運が悪かった

戦地から難民を救うだけの予定だったのだが
敵の中に魔術師が混ざっていたのだ

その魔術師は、戦争の中の混乱を利用して士郎を狙っていたのだ
その為に、予想外の怪我を負い今に至る

「そう。で、今のアンタは後悔してないからこのまま死んでもいい
ってわけ？」

「そうだな。後悔はしていないけど・・・」

「けど？」

「凜と過ごした日々は楽しかったし、少し未練はあるかな・・・も
う少し自分の為にも生きればよかったなって」

士郎のその言葉を聞いたとたん、凜は笑顔になる

「そっか。私はアンタを変えられたんだ」

「凜？」

そんな凜の様子に士郎は首をかしげる

「じゃあ、もう一回チャンスをあげる。この世界にアンタの居場所

はないけど、どこか別の世界で楽しく暮らさない」

凜は自らの赤いペンダントを士郎の首にかけ呪文を唱え、傷を塞ぐそして手に持っていた宝石剣が輝きだす

「そのペンダントはあげるわ。その代わり、私は貴方の持ってた方を貰うから」

いつの間に取りつたのか、懐に入りたいはずのペンダントは凜の手に握られていた

今俺が首にかけているのは、英霊エミヤが生涯持ち続け凜に返したペンダント

そして、凜が持っているのは俺の命を救う為に、凜が使用したペンダント

「まで、凜！俺を他の世界に逃がしたなんて知れたら・・・！！」

言葉の途中でまるで「それ以上言わせない」というように、凜はキスをして口を塞いできた

「自分の肉体を消そうとしたヤツがよく言うわよ。・・・安心なさい、ちゃんと対策はしてあるから」

そうついた凜の目には僅かだが涙が浮かんでいた

「新しい世界では、私の事はいいから恋人でも見つけて幸せに暮らさない」

宝石剣はさらに輝きだし、空間に歪みができる

「凜!!」

「ありがとう。私の大好きな士郎」

光に包まれる中、最後に見たのはどこか少女の面影を残す
とても美しい凜の笑顔だった

新たな世界に旅立つ正義の味方

彼はそこでかけがえのない仲間達と出会う

くプロローグ 正義の味方の旅立ちく（後書き）

F a t eと真剣で私に恋しなさいのクロスオーバーです。

これはU B W後の士郎です。凜のおかげで結構まともになっています。

なので、原作通りの破綻した衛宮士郎が好きな方はひきかえしてください。

基本的にはもう一つの執筆作品である「正義の味方とやさしい少女」の方中心で書いているので、こちらは更新が遅いかもかもしれません。

それではまた次回！！

風間ファミリー

強烈な台風が関東に上陸した今日、直江大和の下へキャップこと風間翔一から招集がかかった

理由は、先日知った『センチリー・プラント』別名『リュウゼツラン竜舌蘭』を台風から守る為だ

「花がちゃんと咲けるよう保護するぞ!!」

キャップはそう言うが、近年稀に見る大型台風

小学生の俺達では簡単に吹き飛ばされて、場合によっては死ぬ可能性もあるだろう

「なあ、竜舌蘭は普通に栽培されてるらしいぜ？今回ダメでも、また今度どっかで見ればよくね？」

「ダメだ！あの花は、あの花だけなんだ！代わりなんてねえ!!空き地で咲いてるあの花をみんなで見たいんだ」

「あたしも!」

キャップの意見に、我らが風間ファミリーのマスコットの存在である一子、通称ワン子も賛同する

俺だって諦めたいわけじゃない。でも・・・

「危険すぎるって言ってんだ。だから、姉さん、よろしく頼みます」

「ああ、任せろ。私が必ずみんなを守る」

俺の言葉に力強く頷いてくれたのは、ここ川神市で有名な武道寺

『川神院』の一人娘、川神百代

俺達の一つ先輩で、一言で言えば『強い』

どんな事が起きても姉さんがいれば何とかなる気がする

ちなみに残りのメンバーは、力自慢の島津ガクトにコンピューター

等の機械関係に強い師岡卓也、通称モロ

力の弱いモロやワン子は姉さんと縄で繋ぎ、俺達は全員で竜舌蘭を
目指す

たまに飛んでくる木材等は全て姉さんが弾いてくれる

「・・・あ」

「！！、椎名、椎名か！」

空き地へ着くとすでに椎名京がいた

椎名は学校で虐められていて、最近俺達を眺めている事が多い

「こんな時になに散歩してやがる！？」

「み、みんな・・・この花咲くの楽しみだって、言ってたから・・・」

「

どうやら、竜舌蘭を守ろうとしてくれていたらしい

このまま1人で帰しても危ないので一緒に作業をする事にした

花弁が吹き飛ばされない様、ビニールで覆っていく

が、その時！

ブチッ！

ビュオッ！

近くの工事現場の木材を縛ってあった紐が千切れ、木材が大量に飛んできた

「みんな！私の後ろに固まれ！！」（まずいな。いくら私でもこの量は・・・）

大量の木材が百代達を襲う瞬間

ズガガガガガガガガガガガガガ！！！！

全ての木材は突然振ってきた剣の群れによって地面に縫い付けられた・・・

フッ

突如訪れる浮遊感

目を開けると写ったのは・・・木？

「なんでさっ！？」

叫んでる間にも木は近づいてくる・・・近づいてるのは、落ちている俺自身だが

士郎は体に強化を施し衝撃に耐える

バキ バキ バキ バキ ドスン！

「いてて」

落下の衝撃で凜に塞いで貰ったばかりの傷口が開いてしまった
とりあえず、傷意外に体に異常がないか確かめる

「トレース オン同調、開始」

身体年齢、 11歳、身長体重それに伴い低下

身体能力、 年齢相応の身体能力

魔術回路、 27本正常稼動

魔力量、 変化なし

固有結界、 アンリミテッド・ブレイド・ワークス “無限の剣製” 発動自体は可能

しかし、 11歳の年齢では肉体に負荷がかかり過ぎる

アウアロン 全て遠き理想郷、 正常に稼動中

凜とのライン、切断

ちなみにアヴァロンは聖杯戦争後、凜が俺の体を調べた時に発見
現在は俺の魔力でも若干ながら起動させる事ができる

「・・・肉体年齢11歳？」

信じられなくて手足を動かし確認する

服がだぼだぼ・・・縮んでる

「なんでさー！ー！ー！！げほっげほっ！いてっ！」

叫んだせいで傷口に痛みが走り我に返る

いや、まで、落ち着け衛宮士郎

戦場では冷静さを欠いた者から脱落していく

「・・・ふう」

落ち着いた所で考えてみる

何故体が縮んだ？どうかの組織に薬でも飲まされたか？

いや、それはない。気づいた時は木の上だったのだから

だとすると考えられるのは・・・平行世界への移動による反動か？

でも、たしか凜の手伝いで、何度か遠坂の大師父であるゼルレッチ

の爺さんに会ったけど

いつも爺さんだったよな？

「・・・」

色々疑問に思う事はあるのだが

その反面、何故があつさりと納得している自分がいる
ああ、また凜の「うっかり」か、と

「さて、とりあえず人を探してここがどこなのか確認しなきゃいけないんだけど」

ビュオオオオオオオ

今まで木の陰にいたからあまり気にならなかったが
もの凄い風である
これでは人が出歩いているかも怪しい

「どうするかな・・・ん？」

「・・・！！」

「・・・！！」

風の中で聞き取りにくいが人の声がする
これは子供の声か？こんな風の中危ないな

ガサ ガサ

そう思つて注意しようと空き地へでた瞬間

ブチッ！

ビュオッ！

近くの工事現場の木材を縛つてあつた紐が千切れ、木材が大量に子

供達めがけて飛んでいく

「まずい!!」

俺はすぐに駆け出し魔術回路に魔力を通す

「トレス、オン 投影、開始！」

ズガガガガガガガガガガガガガガガ!!

全ての木材は30もの剣群によって地面に縫い付けられた

「な、なんだ!？」

「かつちょえー!! 剣がいつぱい降ってきた!!」

「お前達こんな所でなにやってるんだ!!」

剣に驚く子供達に怒鳴る

「今の・・・お前がやったのか？」

「スゲーな、おい！」

先頭に立っていた女の子とバンダナをした男の子が
興味津々といった感じで聞いてくる

「うっ！」

まずいな、強化して走ったりしたから傷口が完璧に開いた

痛みで意識が薄れる

「?おいどうし・・・これは!」

様子がおかしい士郎に百代が気づく

ドサッ

「これはまずいな・・・私はこいつを家へ連れて行く。ガクトはワ
ン子とモロ口を送ってやれ!大和とキャップは2人で椎名を送って
やれ!大丈夫だな?」

「任せろ!行くぞモロ、ワン子」

「フッ、俺の知力があれば問題ないよ姉さん」(ちょっとニヒル
な感じ)

「俺と大和なら余裕だぜ!」

「よし、ではみんな気をつけろよ!」

バッ

最後にそう言つと百代は士郎を担いで風の中をもの凄い速度で走つ
ていった

「・・・ん？」

目が覚めて目に写ったのは見知らぬ天井
俺どうしたんだっけ？

「あ、起きたな！」

ふと見ると女の子が横に座っていた
女の子を見て昨日の事を思い出す

「君は昨日の・・・」

「じじいー起きたぞー」

私が話す前に少女は誰かを呼びに言ってしまった
自分の姿を確認すると服が着替えさせられている

「大丈夫かの？」

しばらくしてやってきたのは、白くて長い髭を生やした老人
士郎は一目見て思う

（この人、かなり強いな）

「そう、身構えんでもよいぞ」

士郎の体に力が入ったのを悟ったのか
笑顔で老人は言う

「若いのにやるの、お主。わしの強さを感知するとは」

老人の様子を見て安心した士郎は体の力を抜いた

「まずは自己紹介といこうか。わしの名は川神鉄心。ここ、川神院の長で川神学園の学長もやっておる」

「衛宮士郎です」

どこまで話したらいいものか迷った末、名前だけを告げる

「士郎君でいいかの？」

「構いません。それと、わざわざ手当てをして頂きありがとうございます」

「気にする事はない。それで、その傷の事は聞かせてくれるのかの？」

「・・・はい」

助けてもらって何も話さないわけにもいかない

ましてや、こんな子供が大怪我をしていて身よりもないとすれば大騒ぎにされかねない

士郎はあたり障りのないよう嘘を交えて説明した

自分は父と世界を回っていたのだが父が他界

その為に日本へ戻ってきたのだが、台風により飛ばされその時世界を回っていた時についた傷が開いてしまったと

「ふーむなるほどのう」

鉄心さんは髭をいじりながら唸る

「嘘じゃな」

「は？」

「モモから聞いておるぞ、お主が大量の剣を出して子供達を守ったと」

モモ？口ぶりからしてさっきの女の子だろうか？
しかし参ったな投影の事がばれていたのか

「・・・」

「気を物質化するような、何か特殊な術であろう」

「！！」

どうごまかそうかと考えていた士郎は驚いた

魔力という言葉こそ出なかったが、老人の言う事はほぼ正解である

「武術に長く関わっておるとな、それこそ信じられんような技や術を使う者もある。わしもオーラで毘沙門天とか出せるしの」

どこかお茶目に言う爺さん
っていうか毘沙門天って

「悪いようにはせん。行く当ても無い様じゃし、君に力を貸してやろう。だからどうじゃ？ 全て話してみんか？」

「・・・わかりました」

凜との約束である自分の為に生きるには、味方が必要だろう
幸いこの老人は信用できそうだ

士郎は意を決して全て話す事にした

魔術の事や本来の自分の姿の事、平行世界から来た事も話した

「ほうほう、そりゃすごいう。じゃが、安心せい。絶対とは言えんが、長く生きてる間に魔術という言葉は絵本でくらいしか聞いた事はない」

それならば、ひとまずは安心だろう
しばらくして落ち着いたら、一応世界を回って確認してみるかな

「ふっふっふっ、きいゝたぞ」

「なっ!？」

「こりゃモモ！お主気配を消しておったな!!」

スーッと障子が開くと先程の女の子が立っていた
にしてもなんだ、ぜんぜん気づかなかったぞ

「お前面白そうなヤツだな、みんなに紹介してやる。ついてこい！」

「え？」

女の子は俺の腕を掴むと走り出す

「ちゃんと、夕方には帰ってくるんじゃないぞ」

じいさんは慣れてるのか平凡な声で言った

「おーいみんなー」

連れて来られたのは昨日の空き地

そこには昨日見た子供達が集まっていた

「あ！元気になったんだ。よかったね」

ギュッ

髪の毛を左サイドで短く結んだ女の子が抱きついてきた

なんというか・・・癒されるような可愛さがあるな

はっ！俺はロリコンではないぞ！！

「おーワン子が懐いてる。悪いやつじゃなさそうだな」

「そうだね」

みんなそれで納得してしまっている

いいのか!?

「昨日の剣出すやつカッコイイな!俺に教えてくれ!」

「いや、あれは・・・」

バンダナをした元気な少年がそう言うてくるが教える事ができるわけない

どうしたものか?

「まずは、自己紹介だろキャップ?」

頭の良さそうな男の子が提案すると、みんな自己紹介してくれた

みんなのリーダーでキャップと呼ばれている風間翔一

頭がよくていつもみんなに策を出す軍師 直江大和

俺を運んでくれた、川神院の一人娘 川神百代 みんなからはモモ

先輩と呼ばれているらしい

マスコットキャラクター的存在の岡本一子 あだ名はワン子らしい

力自慢の自称ナイスガイ 島津ガクト

ゲームやパソコンに強い師岡卓也 あだ名はモロ

昨日は、今日咲くであろう竜舌蘭を守る為に台風の中集まったらしい

「ん?もう1人いなかったか?」

「あーあいつは・・・お!あんな所にいる。大和呼んで来い!」

草陰の向こうに隠れるように女の子がいた

「何で俺が?」

「椎名はお前を怖がっている節がある。これはリーダー命令だ」

「わかったよ」

渋々ながらも大和は椎名を呼びに行った

大和が椎名を連れて戻ってきたあたりで百代が

「みんな驚くなよ。こいつは・・・異世界の魔法使いなんだ！」

と、俺の秘密をばらしてしまった

「な、なんだってーーーーー!!」

声をそろえて驚く6人

百代のおかげで彼らに俺の事が全てばれてしまったが

子供ゆえなのか、まるでヒーローでも見るかのような目で見られた

「そうだ、お前も写真に写ってけよ!一緒に花守ったんだからさ」

「いいのか？」

「おう!今日からお前も風間ファミリーだ!」

風間ファミリー・・・なんかマフィアみたいだ

その後やってきたガクトの母親がカメラを準備する

「お?今日は新顔が2人いるね。はい、チーズ!」

カシャ!

これが、衛宮士郎が風間ファミリーに入った瞬間である

風間ファミリー（後書き）

今回は一気に年が進み高校編になります。

それではまた次回！！

川神学園

黒い肌に白い髪、よれよれのコートに大きなトランク
そんな変わった風貌の男が立っていた

「ふう・・・やっぱりこの世界に魔術はない様だな」

男の名は衛宮士郎。この世界に来た当初は肌の色は普通で、赤い髪
だった

しかし、時が経つにつれて髪は白く染まり、肌も黒くなっていった
理由は多分、時間だ経つにつれ元の自分に戻ってきた、平行世界へ
の移動の副作用？が消えてきたからだろう

身長も、今の歳は１７歳くらいだが、自分が高校生だった頃に比べ
高くなっている

士郎が今いるのは倫敦

元の世界で時計塔があった場所だ

倫敦を諸点に、様々な国を巡ったが魔術の痕跡は見られなかった

その代わりに目に付いたのは、俺の世界ではありえないほど強い武
闘家達

多分この世界は武術が発展している世界なのだろう

アフガン辺りを旅していた時には、素手でも無茶苦茶強いのに

手から光線を出す軍人のオッサンや二刀小太刀と忍術を駆使して戦
う女性軍人

ドイツを旅した時にはトンファ―を手に１小隊を殲滅した女性軍人
もいた

日本国内を回った時だって、額に傷のある女の子や執事服を着た眼

帯の女性

風紀委員の腕章をつけた女学生等、見た目からは想像もできないような強者が大勢いた

そつえば前に川神院にいたオジサンが今は日本の総理大臣だった気がする

風間ファミリーに入り、竜舌蘭の前で写真を撮ったあの日から約6年もかかってしまったが

ようやく日本で暮らす事ができるだろう

その旨をじいさん（土郎は川神鉄心の事をそう呼ぶ）に伝えたと川神学院への編入手続きをしてくれるとのことだ

じいさんは学費などは持つてくれると言ったが

さすがにそこまで世話になるわけにはいかないので

旅費を稼ぐ為にやった仕事の貯金を使う事にした

土郎は万端で裏表含め様々な仕事をした為、結構お金を持っているのだ（どれくらいかというと、家一軒買ってもしばらく生活できるくらい）

「日本か・・・最期に帰ったのはキャンプ達が中学を卒業した時だから1年ぶりくらいか？」

ファミリーのみんなに会えることを楽しみに日本へ向かうのであった

ざわ ざわ

問題児揃いの2-Fクラスは朝から騒がしい

「ようモロ。昨日のアニメ見た？今期の滋賀アニは当たりだよな」

「おはようスグル。見た見た、僕的にはあのベースの子が・・・」

趣味の話をする者

「もぐもぐ。あゝ美味しい」

「クマちゃん。何食べてるの？」

「駅前のパン屋さんの限定蒸しパン。はい、ワン子ちゃんにも一個あげるね」

「わーい。ありがとうー」

食べ物を食べるもの

「昨日街で見かけたねーちゃんの胸が、かなりエロくってよ。思わずトイレに駆け込んだじまつたぜ」

「マジかよ！ヨンパチ、てめえ何故俺様を呼ばない！」

女の話をする者

「でさー。2-Sの冬馬くんが・・・」

「ちょマジ！？チカリンやばくね？それ」

「よかったですねー千花ちゃん」

男の話をする者

「zzz・よっしゃ・伝説の剣ゲツ・ト・zzz」

「・・・」

寝ている者

ペラ

「大和この本面白いよ。今度貸そうか？愛してる」

ペラ

「じゃあ読み終わったら貸してくれ。お友達で」

本を読む者

大和達のクラス2・FではHRが始まるまで皆思い思いの事をして過ごす

「みんなー鬼小島が来たぞー」

「やば、急いで席に着け！」

「寝てるやつ起こせ！」

バタバタ

しかし、担任の先生が来るとその態度は一変
皆急いで席に戻る

ガラッ

「委員長号令を」

「起立、礼」

「諸君、おはよう」

「「おはようございます」「」

教室に入ってきたキリッとした女性が我が2・Fクラスの担任
小島 梅先生

担当教科は歴史で弓道部の顧問

生徒指導に厳しい先生で、彼女の前で問題を起こすと

「教育的指導」という名の愛の鞭（本物の鞭）が飛んでくる
28歳独身、恋人無し

「いきなりだが、今日はこのクラスに新しい仲間が増える」

「「ええ!?!」「」

いきなりの事にクラスはざわめく

確かに転校生が来るとは聞いていたが

それは今週の金曜日のはずだ

「女ですか？美人ですか？胸ありますか？」

「男ですか？イケメンですか？お金持ちですか？」

女好きのガクトと、イケメン好きの小笠原さんがすぐに食いつくというか、あんたら昨日も転校生の話聞いた時それ言っただろ

「静まれ！！」

ピシッ！！

梅先生がムチを振るうと教室が静かになる

「質問がある者は、挙手して行うように」

「はい。梅先生」

聞きたい事があつたので俺は手を上げる

「直江大和、発言を許可する」

「転校生は金曜日ではないのですか？」

「ああ、転校生がくるのは金曜日だ」

「へ？では今日は？」

梅先生の答えに思わず変な声を出してしまう

「今日来るのは転校生ではなく編入生だ」

編入とは、その学校に在籍していなかった人が途中から入学して、そのまま学ぶことである

「編入・・・ですか？」

「そうだ。しかもこのクラスの何人かは会った事があるだろう。おい、入ってきていいぞ」

ガラッ

梅先生がそう言うと、教室のドアが開いて人が入ってきた
その人物とは・・・

「制服なんて着るの久しぶりだからちょっと恥ずかしいな」

士郎は今1人学園内を職員室に向かって歩いている

「おお！士郎ではないか！」

もう登校時間は過ぎていたので生徒はいないと思っていたのだが
どうやら遅刻したやつがいたらしい
それにこの暑苦しい声は・・・

「英雄か、久しぶりだな。でも遅刻はよくないぞ」

「フツ、我は多忙ゆえ仕方ないのだ」

彼の名は九鬼英雄

某国でテロが起きた時、たまたまそこに居合わせた俺が救助した
それが縁で、たまに会うとこうして声をかけてくれる

最初の頃は、なんか雰囲気ギルガメッシュに似てて好きになれな
かったんだが

話しているうちに、いいやつだと言う事がわかり友達になった
わかりやすく言えば、民のことを考え、他人を認められるようなギ
ルガメッシュ

「お久しぶりでつす 士郎くん」

英雄の横にいるメイドは忍足あずみ

九鬼家もメイド長で英雄の専属メイドである

彼女とは英雄と出会う前にも会った事がある

一度目はアフガンの戦地

二度目はテロの現場で英雄の救助を手伝ってくれた

英雄の前では猫を被っているが、実際はもっと凶悪である

「今日は何用で川神学園に来たのだ？」

「ああ、世界を回るといふ目的が果たせたからな。今日からここに
通う事になったんだ」

「おお！そうであったか。して、クラスは？」

「2 - Fらしいけど」

「何？」

俺の発言で英雄の頭の上に？が浮かぶ

「お前なら2 - Sに入る事もできるだろう。何故2 - Fになど」

「俺はあまり競争とかしないでのんびり学園生活を過ごしたいからな。知り合いもいるし2 - Fが丁度いい」

「ふむ。まあ、それも一つの道か・・・ではさらば！我は授業を受けに行く！！」

英雄は足早に教室へ向かう

急いでいても廊下は走らないのだから流石だ

「久しぶりじゃないか、衛宮士郎」

英雄がいなくなった事により本性を現したメイド

「はあ、ほんと英雄のいる時とはぜんぜん違うよな。あずみ」

「あたりまえさ、アタイは英雄様のメイド。主人の前では純情で完璧なメイドであり続けるのさ」

純情？いや、なんかバカっぽいけど？

とは思っても口には出さない

「あずみー！何をしている、早く来い！！」

そこに英雄のお呼びがかかる

「おっと英雄様がお呼びだ、じゃあな士郎」

「ああ、また」

「今行きます！英雄様あああああああ！！！！」

「・・・・・・」

ホントあの2人が来ると、まるで嵐が来たみたいだ

余計な時間を使ったが何とか職員室へ着く

コンコンッ

「失礼します」

「ん？君は今日編入予定の」

「はい、衛宮士郎です」

俺が職員室に入ると1人の先生がこちらに向かってやってきた

「そうか。私が君が入るクラス2 - Fの担任の小島梅だよろしくな」

「はい。よろしくお願いします」

このキリツとした女性教諭が俺の担任らしい

「よっ、士郎。久しぶりだな」

「おゝ士郎。よく来たネー」

他にも顔見知りの2人が声をかけてくれた

「お久しぶりです宇佐美さん、ルー師範代」

この2人は宇佐美巨人さんとルー・イーさん

宇佐美さんは、宇佐美代行センターという代行業をしていて俺が日本に帰ってきた時にいつも仕事を紹介してくれていた2・Sの担任で人間学を教えているらしい

ルー師範代は、モモ先輩の両親を倒し

川神院の師範代となった人で、かなり強い

学園では担当クラスを持つていなく、体育の教師らしい

「今日からここ通うんだろ？仕事が欲しくなったら言いな。お前器用だから、いい仕事紹介するぜ」

「ありがとうございます」

「宇佐美先生、そろそろホームルームですので」

宇佐美さん・・・宇佐美先生と話していたが

梅先生が止めに入る

「あ、小島先生。そうですね、ははは、時間は守らなくちゃ」

「わかってもらえれば結構です。さ、いくぞ衛宮」

「はい」

梅先生に連れられ廊下を歩く

しばらくすると2・Fの前に着いた

「しばらくしたら呼ぶから待っている」

「はい」

梅先生は教室に入り、1人廊下に残される

（みんな、驚くだろうな）

士郎は川神学園に通う事を誰にも言っていない

じいさんにもみんなに洩らさないように言っている

みんなの驚いた顔が楽しみだ

待つ事数分

「入ってきていいぞ」

梅先生の声がかかり教室に入る

ガラッ

「はじめまして。今日からこのクラスに入る衛宮士郎です。みんなよろしく」

「わお、カッコイイ」

「ヤベツ！超イケメンじゃね？」

「チツクショー男かよー」

騒ぐクラスをよそに

ファミリーのメンバーは皆驚きの表情で固まる

「久しぶりだな。みんな」

「「士郎おおおおお！……！」」

俺の声で正気に戻ったみんなは大声で叫ぶ

「わーい 士郎だー」

ギュッ

クラスの目も気にせずワン子が抱きついてくる
相変わらずだなワン子は

「ずるいぞうワン子っ！俺も抱きつくー！」

ギュッ

するとキャップまで抱きついてきた
って、なんでさっ!!

「いつ帰ってきたの？」

「今日の朝帰ってきて、そのまま学園に来た。これからは島津寮に住む」

ワン子とキャップを引っ付けたまま
目の前の席にいたモロに答える
すると、大和が近づいてきて小声で話しかけてきた

「もう世界は回らなくていいのか？」

「目的は果たしたからな」

「じゃあ。^{アレ}魔術は・・・」

「ああ、^{アレ}魔術はこの世界には存在していなかった」
そう言う大和は ほっ と息を吐き

「よかったな。それと、おかえり」

と言った

「ああ、ただいま」

「こら、お前達。今はまだHR中だぞ、個人的な話は後にしろ！」

「はい」

騒ぎすぎて梅先生に怒られてしまった
ワン子とキャップも渋々俺から離れる

「まずは各自、自己紹介だ。時間がないから手短にな」

というわけで、クラスみんなの自己紹介が始まった

まずは、おなじみ風間ファミリーをはじめ（まあ、こいつらの事は知っているんだが）

小笠原千花

川神院に通じる仲見世通りに軒を構える和菓子屋の娘で

いかにも女子高生と言う感じの子で、美人で男子達に人気がある（
見た目的な意味で）

一部の男子にスイーツと呼ばれている

甘粕 真与

背が小さいが同じ高校2年生

2-Fの委員長で、小笠原さんと仲がいい

羽黒 黒子

小笠原さんとは違った意味で女子高生らしいガングロの女の子？

父親がプロレスラーらしくプロレス技が使えるらしい

福本 育郎

写真屋の息子で、いつもカメラを持ち歩いているエロカメラマン

四十八手をすべて言えたことから、ガクトに『ヨンパチ』という渾
名をつけられ

本人も気に入っているらしく、みんな（男子限定）からそう呼ばれている

熊飼 満

体が大きく、いつも何かを食べている

グルメで自分で料理をする事もあるらしい

そのほのぼのとした性格と見た目からクラスでも愛され「クマちゃん」の愛称で呼ばれている

大串 スグル

一言で言えばオタク

ネットやゲームに詳しく、モロと仲がいい

源 忠勝

彼は宇佐美先生の息子（養子）なので

宇佐美先生のところで働いた時に何度か会った事がある

趣味が悉く被るので、最初はお互いケンカすることが多かったが
今では良き友人である

渾名は「ゲンさん」（源だから）

その他生徒

他にも生徒はいたがあまり印象に残らなかった

その他生徒「おいーーーー！！」

「よし、自己紹介は終わったな。衛宮の席は・・・川神、直江お前達の間にに入れてやれ。後ろの者は一つずつずれるように」

知り合いが近い方が馴染みやすいだろうという梅先生の好意で

ワン子の後ろ、大和の前の席になった

「悪いな、忠勝」

「気にすんな」

列の最後尾の忠勝に声をかけると
そっけない返事が帰ってきた

「む、そろそろ一限目が始まってしまふな。皆、衛宮に質問などがあるだろうが、授業は真面目に受けるように。以上」

そう言うとき梅先生は教室を出て入れ替わりに他の先生が入ってきた
授業が終わり休み時間になる度、士郎は質問攻めに会う

こうして士郎の学園生活がスタートするのであった……

川神学園（後書き）

士郎はいろんな人と会ってますね。

ちなみに、島津寮は原作では男子部屋は満室の為、この話では一部屋多い4部屋になっています。

それではまた次回！！

歓迎パーティー

キンコーンカーンコーン

チャイムの音が今日の授業終了を告げる

「つかれた」

俺は授業終了と同時に机に突っ伏した

疲れたといっても授業が大変だったわけじゃない

これでも高校は一度卒業してるから、どちらかといえば楽な方だ（まあ、日本史の内容がほぼ平安時代のみというのは納得いかなかったが）

では、何故疲れているのかというと

休み時間になるたびに、質問攻めにあっていたからだ

おかげで昼ごはんも落ち着いて食べられなかった

「大変だったな、士郎」

「お疲れ様」

声をかけてきたのは大和と京だった

「そう思うんなら助けてくれよ、軍師」

「まあいいじゃないか。それよりも帰ろうぜ、島津寮なんだろう？」

「ああ、じいさんの紹介でな」

言いながら立ち上がり、学校を出る

大和達と多馬の河原沿いを島津寮へ向けて歩く

「そういえば、他のみんなは？」

他のメンバーが見あたらないので聞いてみる

たしか、大和と京が声をかけてきた時にはもういなかったよな？

「みななどお前の歓迎パーティーやろうって話になってさ、一旦家に帰ってから寮に集合する事になったんだ。ちなみに、キャップは材料調達。ワン子には姉さんと呼ぶように言っている」

「なんか悪いな」

「気にしない気にしない。仲間が帰ってきたんだからとーぜん」

大和の代わりに京が答えてくれた

にしても、京も随分と元気になったな

メンバーに入った頃は・・・なんというか、じめじめした感じだったのに

「うおおおおおおお！！材料集めてきたぜえ！！」

そこへ、両手いっぱい袋を抱えたキャップが走ってきた

・・・よくその量の荷物で走れるな

「凄い量だな、どうしたんだそんなにいっぱい」

「いや、なんか士郎が帰ってきたって言うたら、商店街の人たちが持ってきて」

「え？なんでだ？」

商店街の人たちとは仲が悪いわけではないが
日本に帰ってきた時、たまに会うくらいだ
そんな歓迎される理由が思い浮かばないんだが

「そりゃなあ？」

「ねえ？」

「？」

大和と京は2人で納得したような顔をしている

それもそのはず

士郎が日本へ帰ってきて商店街に買い物に行くと
たいてい、お年寄りの荷物を持ってあげたり、迷子の親を捜してあ
げたり

時にはレジなどの機器を修理までしていたのだ
そのおかげで、本人は気づいていないが商店街の人からとてもよく
思われている

「まあ、何でもいいじゃん。早く帰って準備しようぜ？」

「まあ、いいか」

キャップに促され、再び歩き始める

「そういえばさ。ワン子もお前が来るの知らなかったってことは、

姉さんも知らないのか？」

大和の言う姉さんとはモモ先輩（百代）の事だ
大和はモモ先輩の舎弟のため、彼女を姉と呼び
モモ先輩は大和を弟と呼ぶ事が多い

「あー、たぶん知らないと思うぞ。じいさんにはみんなを驚かせた
いから黙っておくよう頼んだし」

「気をつけるよ？ 姉さんお前と戦いたがってたから」

「ああ、そんなこと言ってたね」

「なんでさっ！？」

いや、確かにこの世界にはない魔術チカラを使えるから
戦ってみたいと言われたことはあるけどさ

「ほら、前にお前、姉さんのこと倒しちゃっただろ？ だからリベン
ジしたいんだと」

「いや、それかなり昔の事だし、魔力で身体能力強化してたからな
あ・・・」

昔、小学生の頃一度だけモモ先輩と戦った事がある
モモ先輩が卒業式だったので、何か欲しいものはないか？と聞いたたら
「勝負しろ！」と言われたのだ
モモ先輩が強いのは知っていたが、まあ子供だし大丈夫だろうと軽
く見たのが間違いだった

結果的に、魔力で体を強化してモモ先輩を押さえ込み俺の勝利とな

つたが

魔術を使わなければ勝てなかっただろう

あれからモモ先輩はかなり強くなったみたいで、外国にいた時もたまに噂を聞いた

正直、今は勝てる気がしない

「まあ、姉さんも本気じゃないとは思うが……いや、本気っぽそうだから真剣^{マジ}で気をつけろ」

「あの人なら確かに。わかった気をつけ……!!」

ドンッ!!

その瞬間感じたもの凄い闘気

俺は大和達を突き飛ばし、体に強化をかける

ヒュッ

「トレース、^{オン}投影、開始!」

ガイイン

現れた人影から放たれる高速の拳

素手では止めきれないと判断し、干将・莫耶で受け止めるが

ザアアアアア

受け止めきれずに、数メートル後ろまで押されてしまう

「まったく、いきなり攻撃とは随分な挨拶だな……」

俺は土煙で姿の見えない相手に声をかける

姿は見えずとも、こんなことする人物は1人しかいない

「・・・モモ先輩」

「はっはっはー、よく私の拳を止めたな。さすが士郎」

やっぱりモモ先輩かよ

「まってーお姉さまー」

後方からはワン子もやってきている・・・タイヤを引きながらこんな時ぐらいタイヤはずせよ

「いててて、京、キャップ大丈夫か？」

「大和、胸が苦しい。さすって」

「ふい、食材は無事だぜ」

大和は砂を払いながら起き上がり

京はいつも通り変態だ

キャップも自分より食材を気にしてる

・・・大丈夫そうだな

「いきなり何すんだよ、モモ先輩」

「ん？スキンシップだよ。久々に帰ってきた仲間へのな」

そんなスキンシップはご遠慮願いたい
っーか死にます

「それより、一勝負どうだ？なぁ士郎」

まだそんなこと言いやがりますか、こんちきしょうめ
日本に帰ってきたばかりなのに勝負を挑むのはやめてほしい
いや、帰ってきたばかりじゃなくてもやだけどさ

「俺は風間ファミリーの仲間と戦う気はないよ。まあ、何か特別な
事情があるなら別だけど」

「えー。やだやだ戦う。美少女がお願いしてるんだから聞けよー」

まるで駄々をこねる子供のように
じたばたと足を動かしながら騒ぐ先輩

「美少女はそんなことしません。あーもう、大和、何とかしてくれ」
俺では手がつけられないので、我らが軍師に任せる

「ほら姉さん、そんな事してる場合じゃないだろ？今日は歓迎パー
ティーやるんだから早く寮に行こつぜ。しかも今日の料理は士郎が
作ってくれるそうだ」

「何っ!？」

大和の言葉を聞いたモモ先輩は
駄々をこねるのをやめ跳ね起きる

「それを早く言えよ弟。さっさと行くぞ！」

モモ先輩はスタスタと先に行ってしまった

「悪い、お前の歓迎パーティーなのに料理させる事になっちまった」

「構わないさ。もともと料理は好きだし、それでモモ先輩の機嫌が直るならな」

俺達は再び歩き出す

モモ先輩が先に行ってしまったので、ワン子も一緒に

「土郎の料理楽しみ。土郎の料理は美味しいし、栄養のバランスもばっちりだから大好きよ」

「ありがとな、ワン子」

なでなで

「おおー・・・んん」

頭をなでてやると、目を細めながら擦り寄ってきた
本当に犬みたいだ

そうこうしているうちに島津寮へ到着する

「「ただいまー」」

「お帰り土郎ちゃん、久しぶりだねえ。荷物は部屋に運んであるから」

迎えてくれたのは、島津寮の寮母さんでガクトの母親の麗子さん

「ありがとうございます、麗子さん。相変わらずお美しいですね」

もちろん社交辞令だ

だが、そんな事は口が裂けても言わない

「うんうん、士郎ちゃんはいいい子だね。みんなもう来てるから早く行っておやり」

麗子さんに促され台所へ向かうと

パン

「「お帰り士郎ー！ー！」」

クラッカーと共に、歓迎された

中にいたガクト、モロ、モモ先輩だけでなく

いつの間にか後ろにいた大和達までクラッカーを持っている

だが一番驚いたのは、その中に忠勝がいたことだ

「ま、たまには祝ってやるさ。だがカン違いすんじゃないぞ？後で文句言われてもウゼーから祝ってやるだけだからな」

全く素直じゃない

大和曰く「ああ、ゲンさんはツンデレだから」らしい

「ありがとうみんな。お礼としてはなんだが、俺も腕によりをかけて料理を作ろう」

「「おおー！」」

俺はキャップから食材を預かると、エプロンをしてキッチンに立つ

「俺も手伝う」

そう言いながら、エプロンをして俺の横に並ぶ忠勝

「お！悪いな」

「ま、料理は嫌いじゃねえし、主賓に全部任せるわけにもいかねえからな」

やっぱり忠勝はいいやつだな
さて、何を作ろうか？

「あ、士郎。じーちゃんがこれ持ってけて」

ワン子が渡してきたのは、いかにも高級そうな肉
ふむ。キャップが商店街で貰ってきた魚や野菜も大量にあることだし

「鍋にするか」

「じゃ、野菜を水で洗って切って・・・あと軽くなにか作るか」

「そうだな」

僅かな会話で意思疎通を済ませ、テキパキと料理を勧めていく
士郎が洗った野菜を忠勝が切り、その間に士郎は鍋を2つ準備

そこへすかさず忠勝が野菜を入れ、野菜が茹でられた頃に1つの鍋に土郎が肉を入れ

もう1つの鍋に忠勝が魚を入れる

お互い相手の考えている事が分かるかの如く、流れるような速さで料理ができあがる

料理に関して土郎と忠勝のペアに勝てるものは、そうはいないだろう

「よし」

「できあがりだ」

「おーうまそー！いただきま ドゴツ！ あいたあっ！？」

鍋をテーブルに置いた瞬間、はしを伸ばしたガクトをモモ先輩が殴る

「おいガクト、今日の主役は土郎なんだからちょっと待て。ほらキヤップ音頭をとれ」

「おう、まかせろ！みんなコップを持って」

ジュースの入ったコップを持って立ち上がるキヤップ

「えー、みんなあー！今日はめでたく我らが風間ファミリーの仲間が帰ってきた！それを祝しまして・・・あーなんだ・・・もう何でもいいや、お帰り土郎！乾杯！！」

「乾杯！！」

みんなでコップをカチンと鳴らしあう

音頭は、なんとキヤップらしい適当な感じだったが

だからこそ、仲間達の所へ帰ってきたという感じがする
その後、モモ先輩が川神水をだし、それを飲んだワン子が寝てしま
ったり

酔ってるのか、わざとなのかはからないが、京が大和に変態じみた
行為をするなど大変だった

「むにゃゝ・・・zzz」

「あーあー、気持ち良さそうに寝ちゃって」

モモ先輩に背負われ眠るワン子を見て言う
本当に幸せそうである

「夜も遅いし、俺がワン子担いで川神院まで送ろうか？」

「いやいいさ、お前まだ部屋片付けてないんだろ？」

そういえば、学園から帰ってそのまま宴会みたいになっちゃったから
まだ荷物開けてもないや

「じゃ、また明日な」

「じゃあなゝ」

「じゃあね、また明日」

「おう、また明日」

キヤップは寝てしまい、大和は酔った？京の相手をしているので
俺がモモ先輩達を玄関まで見送った

台所へ戻ると、忠勝１人で後片づけをしていた

「悪いなお前１人に任せちゃって」

急いで片付けを手伝う

「気にすんな。このままじゃ明日の朝、俺が困るからやっただけだ」

「そうか」

「ああ、そうだ」

それ以上は何も言わない

前に、それでも礼を言い続けたら逆にケンカになったことがある
だから、それ以来俺は多くは言わないことにしている

「おい、士郎。もうここはいいから自分の部屋片付けに行け」

「いや、でもまだ残ってるし」

「テメーが夜中にうるさくしたら、俺が寝られねえんだよ」

む、確かに夜うるさくした方が迷惑か

「じゃあ、任せる」

「おう」

悪いとは思いつつ、部屋へ戻り荷物を解き始める
といっても、ふんと服以外たいした荷物はない

あるのは元の世界で着ていた赤い外套と、黒いボディアーマー
それから、こちらの世界に来てから集めた刀剣が数本だ
片付け始める事30分、全て片付け終わってしまった

ピリリッ

「ん？」

その時、携帯が鳴る

俺に電話してくるなんて誰だろう？

携帯のディスプレイに名前を確認する

あの女性ひとが電話してくるなんて珍しいな

「はい」

「夜分遅くにすまない。私だ」

電話に出たのは中年男性の声

あれ？これあの女性ひとからだよな？

ディスプレイを確認すると、やはりあの女性ひとの番号で間違いない

「あー、これってマル・・・」

「ああ、すまない。彼女の電話を借りて掛けたんだ。私は君の番号
を知らなかったものでね」

「・・・」

俺の事を知っていて、マルギツあの一とテの携帯を借りられる地位の人物？
・・・ま、まさか！？

「えーと、もしかしくても中将殿・・・ですよネ？」

「ああそうか、名乗るのが遅れたな。私はフランク・フリードリヒだ」

ええええええええ！？なんでさっ！？

なんでドイツ軍の中将が俺に電話掛けてくんのさ！？
と、とりあえず落ち着いて相手の用件を聞かないと

「あ、あの、今日はどのようなご用件で？」

「そんなにかしこまらなくても構わんよ。今回は私の娘の件でね」

「娘さん・・・ですか？」

何か軍の方で問題があったのかと思ったが、どうやら違うらしい
そういえば、中将殿には俺と同じ年の娘さんがいるって言ってたな
会った事はないが写真を見せてもらった事がある
たしか名前は、クリスティーアーネ・フリードリヒだったか？

「近日、娘を連れて日本に行く事になってね。一年ほど滞在する予定なので、その間娘を川神学園に入学させる事になっている」

「はあ」

へー川神学園に来るのか

でも、だからどうしたというのだろう？

「そうしたら君も川神学園に入学したと、学園長から連絡がきてね。」

娘の事を頼みたいと思って電話したのだよ」

「話はわかりましたけど、具体的に俺はどうすれば？」

「うむ、簡単に言えば娘の友達になってやってくれないか、という事だ。なれない日本で娘も色々大変だろう。だから、助けてやってほしい」

なるほど、娘が心配だから知り合いの俺に頼もうと

にしても、わざわざ俺に電話するなんて大げさ過ぎだろこの人

「わかりました。できる限り娘さんの力になれるよう頑張ります」

「おお！やってくれるか。やはり君は頼りになる。では任せたよ」

ピッ

ツーツー

ふう、入学して早々大変そうだなこりゃ

コンコンッ

その時部屋がノックされる

「俺だけど入っていいかー？」

「ああ、どうぞ」

訪ねてきたのは大和だった

こんな夜遅くに何の用だろう？

「どうした？」

「ちょっと、儲け話をね」

大和の話によると、金曜日に来る転校生が男か女かで賭けようと考
えているらしい
で、同じ時期に編入してきた俺が、じいさんや他の先生方から何か
聞いていないか聞きにきたそうだ

「じいさん達教職員からは、何も聞いていないな」

「その言い方だと他の誰かからは聞いたのか？（ニヤリ）」

大和は不敵な笑みを見せる
さすが軍師、俺の言葉には引っかからないか

「ご名答。転校してくる子の親から聞いた。転校生は女だ」

「ふむふむ、女か。って何で転校生の親からお前に電話が来るんだ
よ？」

もつともな疑問だ

だが、中將の事をそう簡単に話すわけにもいくまい

「まあ、ちょっと転校生の親御さんの部下と知り合いでな」

マルギッテと俺は知り合いだし

マルギッテは中將殿の部下だから、嘘はついてないぞ

「ふうん。まあいいや、サンキュー士郎。売り上げはお前にも回すよ」

「おう」

昔の士郎なら賭け事なんてしなかっただろう。いや、むしろ止めていたかもしれない
だが、風間ファミリーのみんなでいろんな事をしているうちに
人を貶めたり、不幸にしたりするような事じゃなければ
大抵の事は、一緒に楽しもうと考えるようになったのだ

「ふあゝあ、そろそろ寝るか」

時計を見ると0時を回っていたので寝ることにした
明日も楽しみだ

時は少し巻き戻り、風間ファミリー＋忠勝が士郎の歓迎パーティー
をしている時

島津寮2階の1室

「わー・・・なんか楽しそうな声がしますよ松風」

「そだなー、盛り上がってんなー」

松風という名の黒い駿馬の携帯ストラップに話しかける少女 黛由紀江

2人？は寂しく部屋で語り合って？（腹話術なので実際は独り言である）いた

「あんさー、何でもゆっちは、せつかくの風間BOYの誘い断っちまったわけ？」

「だだだだだっで、いきなりのお誘いで混乱してましたし、大切なお友達の歓迎会に私なんかが参加していいものかと思ってしまいました」

そう、本当はキャップが一度誘いに來たのだ（その時、土郎は料理を作っていた）

だが、突然の事にテンパった由紀江は断ってしまった

「そんなだから、まゆっちは友達^{グチ}ができないんだぜ」

「はうつ！？」

自分で言っで自分で傷つき、涙を流す由紀江

「ま、オラが一緒にいてやつからよー、今日も2人で反省会しようぜ」

「うう・・・はい。明日こそは・・・明日こそは友達を!!」

こうして2人?の夜は更けていく

頑張れまゆっち!君の未来は輝いている!・・・はず

歓迎パーティー（後書き）

まゆっち、後数話で風間ファミリーに入れるからそれまで頑張れ！！
ってなわけで、次回はクリスが登場すると思います。

それではまた次回！！

剣聖の娘は恥ずかしがりや

ピピピピッ！

カチッ

「朝か」

時刻は4時、目覚ましを止め布団から出る
布団を畳んでからジャージに着替え
まだ、誰も起きていない島津寮の廊下を静かに通り
士郎はランニングへ向かう

「はっ、はっ、はっ」

「おい、士郎〜！」

「！」

多馬川の川沿いを走っていると俺を呼ぶ声
振り向くと、タイヤをつけたワン子が走ってきた

「おはよう、ワン子」

「おはよー！」

タイヤを引いて走っているというのに
今日も、ワン子は元気いっぱいだ

「早いな、ワン子」

「アタシ、新聞配達バイトやってるからね。でも、そう言う土郎も早くない？」

「まあ、朝この時間に鍛錬するのは日課だからな。あんまり気にした事ないな」

「おゝ同志よ、同志がいたわ」

目をキラキラと輝かせ、見つめられた

「もう配達は終わったのか？」

「うん！だから、今日はそのまま七浜まで行って来ようかと思って。あ！土郎も行く？」

いや、遠いだろ

期待に満ちた目で見るワン子には申し訳ないが

そんな事をしては、学校に行くのがギリギリになってしまう

「いや、遠慮するよ。ていうか遠いだろ、学校遅刻したらどうするんだ」

「大丈夫よ。前にアタシ隣の県まで走ったけど、学校間に合ったし」
普通ありえないから、それ

「他の鍛錬もあるし、俺はいいよ。ワン子も程々にしとけよ」

「うん！じゃーねー！」

ワン子は手を振りながら、ダッダッダッ　と物凄い勢いで走っていった

俺は島津寮へ戻ると、軽く筋トレをした後、短めの木刀2本を持って庭に出る

腕はだらりと下げ、目の前に架空の敵をイメージする

俺は敵の刃を右の木刀でいなし、そのまま回転するように左の木刀を的の脇腹に叩き込む

それを剣で防いだ敵からの反撃の一撃を、一歩半下がる事により紙一重でかわし

無防備になった頭へ、右の木刀を叩き込む

「わー、綺麗ですねー松風」

「まるで、ダンスを踊ってるみたいだなー、まゆっちー」

頭への一撃を、体を強引に捻って避けた敵は・・・ん？今なんか聞こえた様な？

「？」

「はうあー！？」

声がした方に顔を向け、俺と視線が合うと馬のストラップを持った女の子が、ビクッ　と体を硬直させたここにいてるって事は、この寮に住んでるんだよね？
それにしても、何者だこの子。気配が全く感じられないぞ

「えーと、おはよう？ 昨日からここに住む事になった、衛宮士郎です」

「は、はい！ま、ま、ま、まま黛由紀江と申します！あの、すいません！こつそり覗くような事をしてしまつて！で、ですがですね！鍛錬の邪魔をしては悪いなーとか思つたり。後、舞を舞つてゐるかの様で綺麗だなーとか思つたり・・・って、私は何を言つてゐるのでしょう！？」

あー、早口すぎていまいちよくわからんが
俺の邪魔をしないようにしようとした、いい娘だって事だけは、な
んとなくわかったぞ

たぶん、その為にわざわざ気配を消してきたんだろう。今はちゃんと気配を感じるし

「そんなに慌てなくても。それと、同じ寮に住んでる“家族”みたいなもんなんだから、そんなに気を使わなくてもいいぞ」

「
・
・
・
“
家族
”
」

「おう、家族だ」

落ちて着かせる為に、黛さんの頭に手を乗せて笑顔で言う

「はうっ！？し、失礼します！！」

すると、黛さんは、もうダッシュで居間へと行ってしまった
 ……俺、何か変な事したかな？

シャワーを浴びて汗を流し、居間へ行くと
みんな、もう起きていた（キャップを除く）

「おはようございます、麗子さん」

「はい。おはよう、士郎ちゃん。もうご飯できるから座ってな」

麗子さんに挨拶を済ませ、席に着く

この寮は、平日は麗子さんがご飯を作ってくれて
休日は、各自自炊をする仕組みだ

「みんな、おはよう」

「おはよう、士郎」

「おはよう」

「おう」

「お、おはようございます！」

みんなにも挨拶

ちなみに、順番は大和、京、忠勝、黛さんである
っていうか、黛さんはさっき挨拶したよな？

「ふあゝ眠いぜ。もっと優しく起こしてくれよな、クッキー」

そこへ、眠そうなキャップと
キャップを引きずるロボがやってくる

「何言ってるんだよ、僕はマイスターの事を思ってたってるんだぞ！そんなこと言うなら・・・」

ガチャン キューーン プシュー

機械音と共に、卵型から人が多へと変形するロボ

「この私が全力で矯正してやる。そこへ直れえっ！」

彼の名はクツキー^{ロボ}

七浜に住む天才が作り上げた、自立型ロボット対抗して
九鬼財閥が作り上げた人工頭脳を備えたロボ

英雄が一子にプレゼントしたものらしいが

一子が「いない」と大和に誕生日プレゼントとして送りつけ
以後はクツキーのことが気に入ったキャップをマイスターとし、主
にキャップの部屋にいる

用途に合わせて3段階に変形することが出来るらしいが

俺は、卵型の第1形態と、人型の第2形態しか見たことがない

「落ち着けよクツキー。もう、ご飯もできるしさ」

「む？士郎か、おはよう。昨日の歓迎会は出席できなくてすまなかつた。充電中でなければ、私も参加したんだが・・・」

「気にするなよ。その気持ちだけで十分だって」

「すまない。・・・代わりといっってはなんだが、私の力が必要な時はいつでも言ってくれ。全力で力になるう」

「ああ、サンキュー」

その後ご飯を食べ、寮を出る

最初は寮のメンバー+ガクトだったが、途中でモロが合流
川神院の2人以外全員集合である

「にしても、何か変な感じだよなー」

「・・・zzz・・・zzz」

川沿いを歩いていると、ガクトが呟いた
キャップは寝ながら歩いている

「何がだよ、ガクト」

「ほら、今まで士郎はたまにしかいなかったのに、同じ制服着て、
一緒に登校してるだろ？」

「あー、それは僕もわかる気がする。何か新鮮だよな、士郎の制服
姿って」

ガクトに同意するモロ

そうだな。確かに、今までみんなと会う時は、動きやすい服ばかり
だったからな

わー わー

そんな話をしていると、河川敷辺が騒がしい声が聞こえてきた

「あれ、モロ先輩じゃないか？」

「あ、ほんとだ」

眼の良い俺と京は、騒ぎの中心の人物であるモモ先輩とそれに群がる不良達、少しはなれた所で見物している学生達を視認する

「あー、またか。姉さんに挑むなんて、不良達も馬鹿だな」

見る見るうちに不良達は空へ舞う

俺達がモモ先輩の所に着く頃には、不良の山が完成していた

「おー、お前ら。揃ってる、なっ」

ドン

俺たちに気づくと、モモ先輩は不良の山を蹴り飛ばし

こちらへ向かって手を振ってきた

「ははは、朝から制服姿の土郎を見るとは、何か変な感じだな」

モモ先輩は、からかうような笑みで言ってくる

それ、ガクトにも言われたし。まあ口には出さないけど

「姉さん、それガクトも言ってた」

「ガクトと同レベル」

って、何で言うかな？頭脳派2人

「な・ん・だ・と？この土郎！」

大和と京につっこまれ、こちらに向かって走ってくるモモ先輩
何で俺っ!?

「ちよっ!?!何で俺の方来るんだよ!?!」

魔術で足を強化しダッシュ

「全部お前が、制服着てるのが悪いんだ!」

なんでさ!?!?

強化して走る俺の足に、ついて来るモモ先輩
追いつかれるたら、何をされるかわからない
イメージするモノは、常に最速の自分だ!

「理不尽だああああああああ!?!?!?!」

「ゼーハー、ゼーハー」

今俺は、昨日の放課後とは違う理由で机に突っ伏している
昨日は質問攻めによる精神的な疲れだったが
今日は、全速力で登校という肉体的な疲れである

「大丈夫? えみちゃん?」

「大丈夫ですか？衛宮ちゃん？」

心配して声をかけてくれたのは、小笠原さんと委員長だ
ちなみに、「えみゃん」とは昨日小笠原さんにつけられた渾名で
ちゃん付けなのは、委員長曰く「私は、みんなのお姉さんですから」
らしい（見た目は、どちらかといえば妹なんだが）

「おはよう」

「あ、ナオっち。おはよー」

そこへ、遅れて大和達がやってきた

「俺、姉さんから逃げ切った人、はじめてみたよ」

「同じく」

「私もよ」

「俺様も」

「僕も」

「この俺でも、逃げ切れなかったもんなー」

大和、京、途中で合流したと思われるワン子、ガクト、モロ、キャ
ップが

俺の周りを囲むように集まってきた

そりゃそうさ、俺はただ一度の敗走もなく、だからな
今のは戦略的撤退であって敗走ではない

まあ、ただの一度の勝利もなし、なんだけどな

「くっ、大和と京が余計な事言わなければ……こうなるのわかってただろ？」

「いや、だってあのままだと、俺が姉さんにかまれてたし」

「私は、大和の為」

このやろ。自分の保身の為に俺を使つたな

京は……いつもの事が

「恨むぞ大和、京も」

「悪かったよ。一つ借りにしとく」

「ククッ、ではお詫びに、私のお弁当をあげよう」

京は、七味やらタバスコやら唐辛子やら

辛いものを大量に使った弁当を差し出してきた

「わかった、それで手を打つよ。京の方は結構です。そんな、赤い色のお弁当ありません」

その後、梅先生が来たので教室は静かになり、授業が始まる
なんら変哲もない、数学、現国、世界史の授業

平安時代に偏った日本史の授業終え、昼休みになる
すると、キャップが袋を抱えて、教室の前へと移動した

「みんな聞いてくれ。明日、転校生が来るのは知ってるな？それで、

どうせなら転校生が男か女か賭けないか？賭け札作ってきたんだ」

お弁当を食べようとしていた生徒や、友達と喋っていた生徒

食堂へ行こうとした生徒まで立ち止まり、キャップに注目する

というか、賭け札作ってたせいで、朝から寝てたのかキャップは

「こらこら、賭け事はいけません！お金のありがたみというものを・
・・」

2・Fの良心である委員長が止めに入るが・・

「どいてな委員長」

「わわわあ！？」

ガクトに担がれて連れて行かれてしまった
キャップの周りに、みんなが集まる

「お、いいねえ。風間が胴元になるってか」

「おうよ！手数料なんざとらねえ。男か女1つに賭けるってことで」

手数料なしなら、結構食いつくだろうな

「値段と配当はどうなってるんだよ？」

「札は1枚千円。配当はどっちも2倍。公平だろ？」

確かに、それならば勝率は確実に二分の一
軽い気持ちで賭ける人も増えるだろう

「アタシ、男子に3枚」

「アタイは男子に5枚」

このクラスの殆どが、キャップがたくさんバイトをしてる事を知っている

なので、大勝ちしても必ず支払われるだろうと、安心して買っていく

「ちなみに、上限は1万までだぞー」

女子達の間では、転校生は男という噂が流れているらしい
スグルも、一回100円で転校生の予想をして

クラスの男女比から見て、転校生は男だといっている

そして、事情を知っている大和は動かない

ま、編入生の俺は別として

キャップと仲のいい軍師大和が動いたとなれば、みんなが警戒する
かもしれないからな

・・・にしても、転校生が男だという噂が不自然に流れすぎている
気がするな

（大和、何か仕込んだだろ？）

気になったので、大和に聞いてみると

（自然に転校生は男だと広まるように、手を回しておいた）

流石は軍師大和

完璧な計画である

「皆さんを、止める事ができませんでした。お姉さんは悲しいです」
みんなを止められなかった事に責任を感じ、委員長が落ち込んでしまっている

「まー、バクチくらいはね。大目に見てやって」

「でも、直江ちゃんと衛宮ちゃんは参加しなかったですね。えらいえらいです」

褒められてしまった
ちよっと、罪悪感

「ガクトは、何で女に賭けたの？」

「そつちのが夢があるだろ？むしろ女でいて欲しい」

なんとこの本能

まさか、欲望で当たりくじを引くとは

キーン コーン カーン コーン

「じゃ、締め切りは放課後までだからな」

昼休みが終わり、5時間目の授業（内容は大きく覚えてない）と川神学園特有の宇佐美さんが担当する「人間学」の授業を終え、放課後となる

まあ、その時に、金を渡してまで宇佐美さんから転校生の情報を買う生徒がいた事には驚いた
さすが、2 - F

帰り道、俺と大和、キャップ、京は家路についていた

「やっぱ、男に賭けたやつ多いな」

「大和の流言作戦がバッチリはまったな。本当は昨日士郎から聞いて、転校生は女だって事が確定してっからな」

キャップは愉快そうに言う

「そんな情報握ってんなら、儲けるチャンスさ」

「何をやったの？」

京が不思議そうに聞いてくる

内容がわからなくとも、大和達が何か仕組んでるのを察知して自分は賭けに参加しないのだから、抜け目ないよな

「朝のうちに、転校生は男って噂を流したのさ。それに、クラスの男女比率からいっても、男に賭けるやつが多いだろうしね」

「ハズれるやつが多ければ、胴元が儲かる」

「流石軍師って感じだな」

「まあ、それも士郎からの情報のおかげだけだな。それに、俺自身は怪しまれないよう賭けには参加していない」

知略面で言えば、大和は凜より上かもな。あいつは「うっかり」があるし

軍師直江VS諸葛凜 ウィナー軍師直江って感じかな

やはり、日本の知将と中国の知将は日本の勝ちで幕を閉じるのであった

なんてな。まあ、凜は中国人じゃないし

実際の直江兼続と諸葛亮が競い合ったらどうなるかわからんけど

「京。こんな男だぜ、大和は。それでもいいのか？」

キャップは大和を指差して言うが・・・

「セコかつこいいい（ぽっ）」

こんな感じである

セコかつこいいってなんだよ？

恋は盲目って言うけど、本当なんだな

「士郎、恋じゃなくて私のは愛だよ」

「ああ、悪い・・・って、人の心を読むなよ！？」

「ククッ、愛を知る乙女は何でもできるのだ」

その後、儲けを見越して、4人で仲見世通りになんか食べに行くことになった

仲見世通りに着くと、モモ先輩が女の子達とデートをしていたんだが俺達を見つけると、女の子と別れこちらにやってきた

「よー。なんだとつかでお茶か？私も入れるー」

「つーか、姉さんお金ないんじゃないの？」

「そこはー大和が奢ってくれるんだろ？ほーら、腕を組んでやる、恋人気分だろー舎弟」

大和にぴったりとくつつくモモ先輩

「あ、ちよつと嬉しそう。私もくつつく」

ジェラシーを感じた京も、負けじとくつつく
大和は両手に花どころか、両手に大輪だ
うらやましくなんてないぞ、畜生！

「ほーら弟」

「大和」

・・・すいません。正直うらやましいです

「あ、なんだかずるいぞう。良く分からないけど俺も!!」

いや、それはおかしいだろキャップ

大和にくつつこうとするキャップを・・・

「割り込み禁止だ。そーらっ（片手投げ）」

モモ先輩が放り投げ、キャップは遠くへ飛ばされた

「うわぁぁぁぁぁー!!!」

俺は落下地点に先回りして、キャップをキャッチ・・・ギャグじゃないぞ？

「まったく無茶するぜ、モモ先輩は。いいもーんだ。俺は士郎に抱きつくから」

「やめてくれっ!」

抱きつくこうとするキャップを、強引に引き剥がす

「・・・多分・・・出来てる・・・あの2人（ヒソヒソ）」

「・・・いつも・・・士郎が帰ってくると・・・抱きついてるよね？（ヒソヒソ）」

すると、モモ先輩と京がBOYSでLOVEな話をしてるじゃないか

「こらその2人！危ない発言すんじゃないー!!」

・・・

そんなこんなで、今日も騒がしい放課後なのであった

その夜、島津寮

食事も風呂も終わり、部屋でくつろいでいると
誰かが部屋をノックしてきた

「?、どうぞ」

「あ、あのっ!!!」

部屋を訪ねてきたのは、2階の黛さんだった
にしても鋭い目つき、気合入ってるな

「どうした?」

「これ、実家から送られてきた、つまらない物なんですけど・・・」
ズズイと風呂敷が差し出された

「あ!つまらないものなんていつては失礼ですよね!そうじゃなくて・・・あの・・・そのっ!」

「落ちつけまゆっち!まゆっちならいける!クマだつて倒せる!物理的に1000匹イケル!」

馬のストラップが喋って・・・いや、腹話術だよな?
確か今朝もやってたけど、趣味なのかな?

「とりあえず落ち着け。推測するに、黛さんはその風呂敷を差し入れしに来てくれたつてことでOK?」

「あ、は、はい！そうです！」

「すげーや、えみゃん。ナイスフォローだ＼＼。オラもまゆっちも感謝だよ」

また馬が喋った、というか「えみゃん」って

まあ、差し入れはありがたいし、いい子なんだろうな
ちよつと変わってるけど・・・ん？

その時、黛さんの持っていた刀袋が眼に入り
咄嗟に解析をしてしまった

（・・・銘はない。けど、使い込まれてるいい刀だな。それから・・・）

脳裏に浮かんだのは、神速とも呼べる斬撃の光景
あれ程の剣の腕で姓が黛・・・
旅をしている時に聞いたことがある

日本最強の剣士、剣聖と呼ばれてる人の名前がたしか黛だったな

「黛さんって、もしかして黛十一段の娘さん？」

「へっ？父をご存知なんですか？」

いきなりの事に、びっくりする黛さん
やっぱりそうか

「いや、噂を聞いたことがあるだけで会った事は」

「そっなんですか・・・」

遠い眼をして、なんだかさびしそうな表情をしている
なんか不味かったかな？
話題を変えなきゃ・・・

「あー・・・そうだ！今朝俺が鍛錬してたの見てたよな？もし良かったら相手して欲しいんだけど」

「ふええ！？わ、私がですかっ！？」

「ああ、頼むよ。やっぱり、1人だと限界があるからな。相手してくれると嬉しい」

相手がいた方が、実践的な練習になるだろう
それに、黛さんは刀見た感じ、俺より剣技が上だしな

「あ、あうあう」

黛さんは混乱してしまっているようだ

「嫌なら別に無理しなくてもいいけど・・・」

「いえ！嫌だなんてそんなっ！是非に！」

うおっ！ものすごい目つきだな

まあ、何はともあれ相手をしてくれるのは感謝だ

「じゃあ、明日の6時くらいに庭でいいかな？」

「は、はいっ！それでは、おやすみなさいっ！」

「ああ、おやすみ」

こうして、島津寮2日目の夜は更けていく

明日は黛さんとの鍛錬に、中将殿の娘が転校してくる

「楽しみだな」

その頃、島津寮2階の1室

由紀江と松風は、静かに盛り上がっていた

「やりましたよ松風！差し入れだけでなく、明日の鍛錬の約束までしてしまいました！」

「スゲーよまゆっち。待ち合わせなんてもう友達通り越して、デートじゃねえかよ！」

うるさくしない様、あくまで小声で盛り上がる

「で、デートなんて恐れ多い！でも、これで少し自信がもてました！ありがとうございます、衛宮先輩！」

祈るようなポーズで涙を流す由紀江

そんな由紀江を、温かな眼で松風は見守る（まあ、実際は松風は置いてあるだけだが）

「よっしゃー！この調子で次は、風間BOYたちのグループに突撃だー」

「えいつ、えいつ、おーーー」

剣聖の娘は恥ずかしがりや（後書き）

あれ？今回クリスが出てくる予定だったのになー・・・まあいいか。
おめでとうまゆっち！原作ではもう少し先のはずが、土郎のおかげ
で1人目の友達ゲット！

次回こそは、クリスが出ます！本当です！

それではまた次回！！

まゆつちと鍛錬（前書き）

更新が遅れてすいません。「正義の味方とやさしい少女」の方でも書きましたが、最近忙しいもので。

落ち着くまで、しばらくはこのくらいのペースになると思います。

まゆっちと鍛錬

「じゃあ、また後でねー土郎」

「おう、遅刻するなよワン子」

日課のジョギング中に会ったワン子に別れを告げ、島津寮へと戻る。部屋で軽く筋トレをした後、短めの木刀2本と普通の木刀を1本持って庭へ出ると、既に彼女が待っていた。

「おはよう。 薫さん」

「お、おはようございますっ、衛宮先輩！」

俺に気づくと、慌てて頭を下げる薫さん。

そんなにかしこまる事ないんだけどな。

・・・それにしても、「衛宮先輩」か。

そう呼ばれるのは、どれくらいぶりだろう。

「先輩」という懐かしい響きに、土郎は自分を慕ってくれていた後輩である桜の事を思い出した。

「ど、どうしたんでしょうか？松風、私何か粗相を・・・」

「大丈夫だって、まゆっち。まゆっちはなんも悪くねえ。自信を持てよ！」

つと、昔を懐かしんでいるうちに、黛さんがまた馬のストラップと話し始めてしまっている。

いかんいかん。せっかく鍛錬に付き合ってくれてるのに、ほったらかしにしてしまった。

「ごめんごめん。武器なんだけど、木刀^{コレ}でいいかな？一応昨日見た黛さんの刀と同じくらいの長さの物にしたんだけど」

「あ、はい大丈夫です・・・って！わ、わざわざすみません！本来ならば、後輩である私が準備しなければならないものを！」

黛さんは、俺から受け取った木刀を掲げ、ペコペコと頭を下げる。
・・・いや、木刀を拝み上げられても困るんだが。

「いや、黛さん。そんな気にしないでい「こらあああー」うおう！？」

その時、馬のストラップが体当たりをしてきた。
いや、正確には黛さんに投げ飛ばされてきた。

「おうおう、えみゃんよー？さつきから聞いてりゃ、黛さん黛さんで。ちょっと他人行儀なんじゃねーかなーとかオラ思ったりするよ？まゆっちゃんには、まゆっちゃんプリーティーな渾名があんだからよ！もっとフレンドリーにいきましょう？」

また腹話術か。一体なんなんだろう。

「・・・あの。黛さ「まゆっちゃんだっつってんだろー！」、まゆっちゃん

コレでは話が進まないの、とりあえずまゆっちゃんと呼ぶ事にする。

「は、はい。なんででしょう?」

ちらちらと、上目遣いでこちらを見るまゆっち。ちょっと可愛い。今の彼女と馬のストラップが同一人物だとは思えない。

「えーと。昨日も気になったんだけど、コレ何かな?」

馬のストラップを持ちながら言う。

「それは、父上からいただいた馬のストラップ、松風です」

へー松風っていうのか。

松風といえば、日本の武将「前田慶次」の愛馬だったな。

・・・じゃなくて。

「いつも腹話術してるよな? 趣味なのか?」

「いえ。松風には付喪神が憑いているんです」

付喪神?

付喪神といえは、長い年月を経て古くなったりした道具や生き物、自然の物に、神や靈魂などが宿ったモノの総称だったよな?

でも、世界を回ったけど。そういう霊的なモノも見つからなかったはずなんだが・・・

「松風、何か喋ってみてくれ」

「おう! オラ何でも喋るよー。出っ歯の司会ばりに喋るよー」

スッ

松風が喋りだすと同時に、まゆっちの口を手で押さえる。

「!？」

すると松風は、

「~~~~~！」

何か喋ろうとして入るみたいだが、呻き声しか聞こえない。
やっぱり松風は付喪神ではなく、まゆっちの腹話術のようだ。
まゆっちの口から手をどける。

「やっぱり腹話術だよな？」

「いえ。付喪神です」

「.....」

何が何でも付喪神で通すらしい。

まあ、時間もあまりないし。深くは考えないようにしよう。

「まあいいや。じゃあ、始めようか」

「はい。衛宮先輩」

む、衛宮先輩か。そう呼ばれるのは別に嫌じゃないが、俺がまゆっちと呼んでいるのに少し堅くないだろうか？

「その前に、まゆっち俺のこと衛宮先輩って呼ぶの禁止な」

「ふええっ！？な、何故でしょう！？やはり何か粗相を！？」

見るからに慌てだすまゆっち。

・・・別に、ちよつと面白いなんて思ってたないぞ。

「いや、まゆっちが悪いとかじゃなくてさ。俺がまゆっちって呼んでるのに、衛宮先輩ってのはちよつと堅いかな？と思ってるさ。もつと普通に士郎とかでいいぞ」

「えっ？で、でもそんな・・・いいんでしょうか？」

「前にも言つたろ？俺たちは同じ寮に住む“家族”みたいなもんだつて。だからもつと肩の力を抜いていい」

俺がそう言つと、まゆっちはしばらく考え込んで、

「で、では！士郎さん・・・と、お呼びしてもいいでしょうか！！」

もの凄い気合を入れて言うまゆっち。

士郎さんか。まあ、年上の俺を呼び捨てにはできなかったんだろう。それに、まゆっちの敬語は先輩だからっていうより、家柄的に普段から使ってるものなんだと思う。

「おう！よし、それじゃあ始めようか」

俺はだらりと腕を下げ、思考を切り替える。

「はい！」

対するまゆっちも、剣を正眼に構える。
途端、まゆっちの雰囲気ガラリと変わった。
まるで針のように鋭く洗礼された闘気。
その清らかな空気は、セイバーを思い出させる。

「いきます。・・・はあっ！！」

「！！」

一速で放たれたのは、ほぼ同時の2本の斬撃。
俺は2本の木刀でそれぞれを受け流し、右の木刀で切り返す。
まゆっちは、体を半歩下げる事により俺の木刀をかわしつつ、近づいた俺にカウンター気味の突きを放ってくる。

「くっ！」

前のめりになっている体を強引に戻して足に力をいれ、後ろに飛びながら左の木刀で突きを受け止め、一度まゆっちと距離をとる。

「今のを止められるとは・・・驚きました」

今の決められると思ったまゆっちは、素直に感嘆を洩らす。
士郎も驚いていた。強いとは思ったがまさかこれほどとは。
昨日まゆっちの刀から経験を見ていなければ、今の一撃でやられていたかもしれない。

（鍛錬だと思って少し油断してたな。俺もまだまだ未熟だ）

「俺も本気でいかなきゃな」

士郎の雰囲気が変わる。

思考を戦闘時のモノに切り替える。

そして、先程のまゆっちの一撃で、眠っていた元の世界での戦闘の感覚が徐々に蘇ってきた。

「では、こちらでもスピードを上げさせていただきます。はっ！」

士郎の変化を感じ取ったのか、新たにまゆっちから放たれた斬撃は最初よりも早く、多い3本。

斬撃はそれぞれ、首と左右の脇腹を狙う。

先程と同様、俺は首と右脇腹を狙う2本の斬撃を木刀で受け止めるが、一本足りない。

俺はあえてそのまま前へ進み、まゆっちが握る木刀の柄に部分が脇腹に当たる。

柄の部分では上手く決まらず、ダメージを最小限に抑える事ができた。

「ふっ！」

近づいた状態から、まゆっちの後ろに回り込み無防備な背中を狙ったのだが・・・

「何っ!？」

まゆっちが消えた。

いや、消えたのではない。

正確には、体を低くしながら一瞬にして移動したのだ。

視界の端に、僅かだが彼女の髪が見える。

「はあっ！」

先程とは逆に、無防備になった士郎の背中を、まゆっちの一撃が襲う。

ガキンッ

「なっ!？」

今度はまゆっちが驚いた。

あるう事か士郎は、後ろ手に木刀を交差させまゆっちの一撃を防いだのだ。

そのまま、体を捻るような動きで士郎に木刀を弾かれ、一時2人も静止する。

「・・・」

「・・・」

士郎は相変わらず腕をだらりと下げている。

このままでは埒が明かないので、まゆっちは先程よりもさらに速く木刀を振るう。

ガキン ガキン ガキン

おかしい。

士郎に攻撃を仕掛けているまゆっちは、違和感を抱いていた。まゆっちは斬撃を防がれることに、斬撃の速度を上げている。

しかも、全て士郎の隙を突くように攻撃しているのだ。
にもかかわらず、士郎はその悉くを防いでいる。
まるで、そこに来るのが判っているかのよう……

（まさか！？）

攻撃を止め、まゆつちが距離をとる。

「士郎さん。貴方……わざと隙を作っていますね？」

「！！、……驚いたな。気づかれないように、自然にできた隙に見せかけてただけだ」

やつぱり。士郎さんは自ら隙を作り出すことによって、相手の攻撃を誘導していたんだ。

まゆつちは、驚く以上に恐怖を感じた。

本来ならば、なるべく出さないようにする隙をあえて出す戦い方。確かに有効ではあるが、一歩間違えれば大怪我、最悪死ぬ可能性だつてある行為だ。

そんなことを平然と、しかも完璧に防ぎきる士郎が、まゆつちは信じられなかった。

「朝っぱらから何やってんだ？ テメエらは」

その時、第三者の声により戦いがさえぎられた。

「忠勝、どうしたんだ？ まだ飯の時間じゃないだろうっ？」

縁側に置いておいた時計を見ると、まだ6時45分。

朝ごはんはいつも7時20分くらいからだから、起きていること自

体はおかしくないが、

鍛錬を途中で止めるよう事はしないはずだ。

「ああ。悪りいとは思ってたんだけどよ、さっきからテメエの部屋で携帯が鳴ってたから、持ってきてやったぜ。おらよっ」

そう言っで携帯を放り投げる忠勝。

受け取った携帯のディスプレイにはマルギツテの文字。

うわゝ、何かもの凄く嫌な予感。

「じゃ、俺はもう行くぜ。テメエら汗かいてんだから、飯の前に風呂でシャワーでも浴びてこい」

「悪いな、携帯わざわざ持ってきてもらって」

「勘違いするんじゃないねえ。お前の部屋で携帯が鳴っていると、隣の俺がうるさくて迷惑だから持ってきてやっただけだ」

忠勝は、居間へ向かう。

どうでもいいけど、言葉の最初に「勘違いするんじゃないねえ」って着けるのは忠勝の癖なのか？

きよろきよろ

どうしたらいいかわからず、キョロキョロしているまゆっち。

「ああ、ごめんな。とりあえず今日はこのくらいで、続きはまた明日にしよう」

「は、はい。ありがとございました！では、私はお風呂に・・・」

そう言つて、まゆっちは女湯へ向かう。

俺も風呂に入つて、はやくこの汗を流したいが・・・

ピリリ

ほら、かかつてきた。

着信 マルギツテ

かかつてきてしまったものはしょうがない。

せめて、でるのがマルギツテ本人であることを祈ろう。

「もしもし？」

「マルギツテです。久しぶりですね、エミヤ」

よかった、今日は中将殿じゃないようだ。

「久しぶりだな、マルギツテ。で、どうしたんだ？」

「今日は頼みがあつて電話しました。学園の方には中将殿が連絡を入れておくそうなので、今から指示する場所に来なさい」

軍人だからなのか、マルギツテは相変わらず命令口調だな。

「なんでさ？」

「それを今から説明します。静に聞きなさい」

マルギツテの話を聞くと、現在滞在中のホテルから中将殿の娘であるクリスティアーネを学園まで連れてきて欲しいとの事だ。

中将殿は先に学園の方に行くらしく、マルギツテも軍の任務がある為、信用できる俺に頼みたいらしい。

「なんで娘さんは中将殿と一緒に行かないんだ？」

「お嬢様は、ご自分の愛用しているモノに乗って登校したいと言っています」

愛用しているモノ？

バイクにでも乗ってくるのだろうか？

「あゝまあ、了解。とりあえずホテルに行けばいいんだな？」

「ええ。貴方が来るまでは私もホテルで待機しています」

「わかった。準備したら向かう」

やれやれ。思った通り、大変なことになりそうだ。

その後、士郎は風呂で汗を流し、麗子さんと大和に事情を説明してホテルへ向かう。

朝食は仕方なく、ホテルに向かう途中のコンビニでおにぎりを買って食べた。

ちくしょう、みそ汁が食べたいぞ。

ホテルに着くと、外でマルギツテが待っていた。

「待たせたな」

「いえ。無理を言ったのはこちらの方です、感謝します。疲れただろう？これで糖分を取りなさい」

出されたのはチョップチャップス。

マルギッテは、以外に可愛いところがあるな。

「で、娘さんは？」

飴を舐めながら聞く。

「クリスお嬢様なら、今、愛馬を連れてくる最中です。少し待ちなさい」

「へー愛馬か」

・・・ん？

愛馬？愛車じゃなくて？馬？

「はあっ」

ヒヒーン

まごう事なき馬の泣き声。

「来たようです」

「へ？」

マルギッテの指差す方向を見ると、金髪の女の子が白馬に乗ってやってくる。

白馬といえば金髪の王子様だろ？
って、ツッコミどころが違うか。

「なあ、マルギツテ。何故彼女は馬に？」

「クリスお嬢様は、日本文化に大変感心を持っておられる。日本は今でも交通手段に馬を使っているのだろう？」

いつの時代だよそれ。

あー・・・つまりあれか？よくいる、日本を勘違いしちゃってる外人さんか？

「我が名はクリステイアーネ・フリードリヒ。問うぞ、お前がエミヤシロウか？」

馬の上から高々という金髪の少女。

それはとても絵になる光景で、とても美しかった。

そう、それはセイバーとの出会いを思わせるような・・・って、んなわけねーだろ！

セイバーと出会いはもっとこう、神秘的な感じだった。

もし違う形で出会っていれば、多少神秘的な感じはしたかもしれない。

だが、高級ホテルがすぐ横に建っていて、ホテルの敷地から出れば普通に車が走っている。

そんな中、馬に乗った金髪が現れれば、雰囲気などぶち壊した。むしろギャグに見える。

まあ、多少の違和感はあれど、それでも絵になっているのだから、

それは彼女が綺麗だからなのだろう。

「はじめまして。俺が衛宮士郎だよ」

こうして、衛宮士郎はクリスティーアーネ・フリードリヒと出会った。

まゆっちと鍛錬（後書き）

まゆっちとの鍛錬が思ったより長くなり、今回はクリスが登場した所で終わってしまいました。しかも、クリスより先にマルさん出てるし。

次回も多少戦闘があると思います。

それではまた次回！！

リユーベックからの転入生（前書き）

最近、正義の味方とやさしい少女の方ばかりで、こちらの方が更新できていませんでした。てなわけで、2ヶ月ぶりの投稿です！
楽しんでいただけると幸いです。
それではどうぞ。

リユーベックからの転入生

「我が名はクリスティアーネ・フリードリヒ。問うぞ、お前がエミヤシロウか？」

「はじめまして。俺が衛宮士郎だよ」

馬に乗る金髪の少女に、俺は答える。

「貴方の事は、父様とマルさんから聞いている。正義の心を持ったサムライだと」

・・・中将殿もマルギツテも、俺の事をどんな風に紹介したんだ？確かに、何度か力を貸した事はあったけど。

サムライって・・・

「それにしても、エミヤ殿は和服ではないんだな。日本人の友人に借りたDVDでは、皆和服を着ていたのだが」

和服？

そりゃ着てる人もいるだろうけど、大体は洋服だよな？

この娘は俺以外の人を見ていないのか？皆洋服だぞ。

「ちなみに、そのDVDって何？」

「ああ。大和丸夢日記だ」

少女は満面の笑顔で言う。

つて、時代劇かよ!?

そりゃ、皆和服を着てるに決まっている。

「あゝ今の日本はな、和服より洋服の人の方が多いんだ。もちろん、和服の人もあるけどな」

2 - Sの不死川とかな。

「むむむ、そうか。残念だな・・・」

あからさまにがっかりする少女。
そこまでか?

「・・・(チラ)」

時計を確認すると、もう8時だ。

そろそろ行かないと、ホームルームに間に合わない。

「じゃあ。そろそろ行こうか?」

「ああ、わかった。マルさん、行ってきます」

「はい。いつてらっしゃいませ、クリスお嬢様」

手を振るマルギツテを後に、士郎とクリスティアーネは走り出した。
もちろん俺は自分の足、クリスティアーネは馬だが。

「エミヤ殿、少しいだらうか?」

走り始めて数分、クリスティアーネが話しかけてきた。

「なんだ？それと、士郎でいいぞ」

「了解した。では、自分のこともクリスと」

「ん、了解。で、何？」

正直、走りながら喋るのは体力の消耗が激しいが、無視するわけにもいかない。

「いや、時間の方は大丈夫なのだろうか？。よければ、シロウも浜千鳥に乗せてもいいが？」

浜千鳥・・・流れるに、馬の名前なんだろう。

本当にクリスは日本が好きなんだな。

「んゝそうだな・・・（チラ）」

もう一度、時計確認。

8時15分・・・

「確かに、このペースじゃまずいかな？」

「では、早く後ろに・・・」

クリスは馬のスピードを緩めようとするが、

「いや、いいよ」

俺はそれを止める。

そして、

「^{トレース}強化、^{オン}開始」

クリスに聞こえないよう小声で呟き、脚を魔力で強化する。
その瞬間、俺の走る速度は上がり、クリスも慌ててついてくる。

「すごいな！シロウは。こんなに早く走れるとは、随分鍛錬したんだろう？」

「・・・まあ、な」

キラキラと、関心の眼差しで見るクリスの視線が痛い。
確かに、鍛錬は欠かさずやっているが、魔力で強化してるとは言えない。

そんな話をしながらも、しばらくすると、川神学園の門が見えてきた。

「あれが川神学園・・・自分の通う事になる寺子屋だな」

「・・・ああ」

寺子屋・・・

まあ、間違いじゃないからいいか。

俺たちは、そのまま門をくぐった。

ざわ ざわ ざわ ざわ

その頃2・Fでは、現れたオジサン・・・もとい、フランク・フリードリヒにざわめきが起こっていた。

「皆勘違いしないように。この方は、転入生の保護者だ」

梅先生の一言で、皆安心する。

楽しみにしていた転入生が、こんなオジサンではたまったものではない。

「あー、そうなんだ、びっくりしたな。もぐもぐ」

「こら熊谷！HR中だぞ！ピザを食うな！」

走る梅先生の鞭。

クマちゃんに制裁が与えられる。

「罰は百叩き。これも、日本の伝統ですな」

梅先生の行為を見て、フランクはそんなことを口にした。

「あの、ご息女は？」

「ご安心を。時間には正確な娘です。間もなく駆けて参るでしょう」
フランクが指を指した先、窓に視線が集中する。

「グラウンドを見てみるといい」

パカラッ　パカラッ　パカラッ

校庭から響く馬の蹄の音。

「・・・？・・・げえっ!？」

「どうした大和、何が見えるんだ？」

大和が変な声を上げたので、ガクト興味深げに聞く。

「女の子が乗り込んで来た。しかも、士郎と一緒に」

「なんじゃそりゃ!？」

驚いたガクトはすぐに窓際へと移動する。

梅先生も、窓の外を見る許可を出したので、たちまち窓際は生徒でいっぱいになる。

「うん、確かに乗り込んできたね・・・馬で」

モロも、呆れた感じで言っている。

「クリステイアーネ・フリードリヒ！ドイツ リューベックより推参！！今日よりこの寺子屋で世話になる」

校庭の中心に着くなり、大声で名乗りを上げるクリス。そんなクリスを、2・Fの皆は窓から眺めていた。そこには、大和達もいる。

「ここが、今日から自分の学び舎か・・・自分の他に、馬登校はないのだろうか？」

クリスがキョロキョロト周りを眺めていると、ドタドタと何かが全力で走ってくるような音がする。

「まさか・・・」

これは非常にまずい。

やっとクリスが、自分が馬という事に違和感を持ち始めたというのに、

アイツらが来ては、また、いらぬ誤解をしてしまう。

ドタドタドタドタドタドタ！！

「フハハハハ！転入生が朝から馬で登校とは、やるな！」

「おはようございまっす」

「おお！それは・・・ジンリキシヤ！」

はじめて見る生人力車に、クリスは感動する。

「うむ。そして我はヒーロー、九鬼英雄である！」

「自分はクリス。馬上にて御免」

「我が名は九鬼英雄！いずれ世界を統べる者だ！この栄光の印、その目に焼き付けるがいい！！」

まるで戦隊モノのヒーローの様にポーズをとり、背中の龍の絵を見せる英雄。

「おおー！まるで、遠山」

そんな英雄の行動にも、クリスは喜んでしまう。

あー・・・来ちゃったよ。

と、思った瞬間首に冷たい感触。

「あらあら？士郎君、今私たちを見て「あー・・・来ちゃったよ」とか思いませんでした？」

いつの間にかあずみは、俺の首筋に小太刀の刃をあてていた。何でわかるんだよ？

「メイドの嗜みです」

いや、だから人の心を読むなよ！？

「こらあ！あずみ！我が親友に刃を向けるとは何事かあつ！！」

「も、申し訳ありません英雄様！」

英雄の一喝で、あずみはその場に土下座する。
たすかった。

その後、英雄達が去った後、クリスの浜千鳥を自転車置き場の方へ
繋いでおき、教室へ向かった。

カッ カッ カッ

黒板に、クリスの名前が書かれていく。
ちなみに、俺は教室に着いたので、自分の席に戻っている。

「クリスティアーネだ、改めてよろしく！」

凜とした声と立ち振る舞いに、クラスの男達は見惚れていた。

「日本語にまったく違和感がないな。たいしたものだ」

クリスの流麗な日本語に、梅先生は感心している。

「リユーベックには、日本人の友達が大勢いました。彼女たちと接
している間に覚えたのです」

間違った日本文化も一緒にな。

「うむ、円滑なコミュニケーションが望めるな。よし、何か質問が
あれば挙手していけ」

「はいはい！」

即効でガクトが手を上げた。

「では島津。品位を持つてな」

「オッスオッス！えーと、くりすていあーね？」

わざとらしく、英語っぽい発音でクリスの名前を呼ぼつとするガクト。

なんかバカっぽいぞ？

「自分としては、クリスと呼ばれる事を希望する」

「じゃあ、クリス。彼氏はいたりすんのかな？」

「そんなものいないに決まっているだろうガツ！」

しゅん

・・・え？

ガクトの質問に、中将殿が物凄い剣幕で答えたせいで、みんなが軽く引いている。

さっきまで騒がしかったクラスが、一瞬で静まり返ってしまった。

「父様のおっしゃる通りだ」

「そ、そーすか」

予想外の出来事に、流石のガクトも涙目である。

にしても、中将殿がこれほどまでバカ親・・・もとい、親バカとは。

「クリスにちょっかいを出すものは、軍が殲滅する」

そんな事で、軍使うなよ!?

貴方は、仮にも中将でしょう!

「父様は、任務に私情を持ち込まない軍人だ」

いや。今めちやくちや私情持ち込んでたからね?

「~~~~」

日本に来れたのがよほど嬉しいのか、クリスは先ほどから上機嫌だ。鼻歌まで歌っている。

その後の質問でも、時代劇が好きなさや、京都に行ったこと、日本の武士道精神が好きだなど、早くもクラスに溶け込み始めていた。

そして、一通り質問が終わると、中将殿は教室を出て行った。思ったら、戻ってきた。

「クリス。何かあれば、戦闘機でかけつけるからな」

そしてまた、教室を出る。

忙しい人だな。

「もう質問はないか?それじゃあ・・・」

「はい!質問。何か武道はやってるのかしら?」

梅先生が質問を締め切ろうとした時、ワン子が手を上げた。

了承という事なのか、梅先生は何も言わない。

「フェンシングを小さい頃よりずっと」

「YES！！梅先生、提案！」

クリスがフェンシングをやっていることを知ると、ワン子は握りこぶしを作る。

まさかとは思うが・・・

「転入生を“歓迎”してあげたいと思いますーす」

はぁ・・・やっぱりか。

本当にワン子は・・・なんというか、いい意味で決闘が好きだな。

「ふふつ、血気盛んだな川神。だがそれは面白い。クリス、そのポニーテールが、お前の腕前を見たいそうだ」

「！！ なるほど。新入の歓迎、か」

言葉の意図を察したクリスにも笑みが浮かぶ。

何故俺の周りには、こうも血の気の多い女の子が多いんだろう？

それから、ワン子が川神学園の“決闘”について説明する。

決闘の意思を伝え、自分のワッペンを置く。

相手がそのワッペンの上に、自分のワッペンを重ねると受理した事になる。

なお、決闘内容が肉体を行使するものの場合、職員室での許可が必要となる。

「ほっほ。話は聞かせてもらったぞい。いいよ、ワシの特権で了承する。今すぐやんなさい」

いきなり現れた学園長が、許可を出した。
「つか、タイミング良すぎだろ、じいさん。」

決闘が決まったので、ワン子とクリスはそれぞれ、教室に飾ってある薙刀とレイピアのレプリカを手にも外へ向かう。
クラスのみんなも、決闘を見る為にグラウンドへと移動する。

「ねえ、士郎。転入生の実力、どう見る？」

移動している最中、学校では滅多に喋らない京が、めずらしく話しかけてきた。

「そうだな・・・実力はワン子よりも上だろうな」

「だよな。私でも素手だとキツイと思う」

京はあらゆる状況に応じて（主に大和を護る為）弓術だけでなく、接近戦の鍛錬もしている。

その京が、キツイというのだから、クリスの腕はそうとなものだろう。

「ワン子大丈夫かな？」

「んゝ最初から全力で行けば、勝ち目はあるけど・・・」

ワン子を見ると、妙に舞い上がっている。
あれでは、クリスに勝つのは難しいだろう。

「少し難しいな」

「うん」

話していたら、あっという間にグラウンドへ到着。

決闘の事が校内放送で流れた為、他のクラスや学年の生徒も集まっていた。

その中にはモモ先輩の姿もある。

「よーお前ら。ワン子と転入生が決闘だって？」

「あ、姉さん。うちの転入生、上玉だよ」

「何!？」

大和の言葉で、モモ先輩はすぐさま輪の中心にいるクリスを見つめる。

「上玉キターーーーー!!・・・っと、時に士郎。あの転入生、どれくらい強い？」

なんという身の変わりの早さ。

「つか、何でみんな俺に聞くんだよ？」

「いや、俺に聞かなくても、モモ先輩ならどれくらいわかるだろ？」

「まあ、美少女の私なら大体はわかるが、洞察力ならお前の方が上だからな」

美少女は関係ないだろ？

にしても、モモ先輩の洞察力も俺と大差ないと思うんだけどなあ。

「そうだなー。風間ファミリーの中でも、結構上の方なんじゃないか？京より若干上って所だな」

「それくらいはわかる」

「じゃあ聞くなよ」

そっけなく言うと、モモ先輩は グイツ と俺を引き寄せた。

「私は、お前とどちらが強いかが聞きたいんだが？」

モモ先輩は、うつすらと闘気を込めていつてきた。

・・・危ういな。

これは戦闘狂の人間が放つ気に似ている。
そうなる前に何とかしないと・・・

「さあ？それは実際にやってみないと」

「・・・はあ、まあいいか」

俺がとぼけると、モモ先輩は諦めたのか、すっかり観戦モードに入った。

「これより川神学院伝統、決闘の儀を行う」

じいさんが告げると、場に真剣な空気が流れ始める。

「2人とも、名乗りを上げるがよい」

2人が一歩前へ出る。

「2年F組 川神一子！」

「今日より2年F組 クリステイアーネ・フリードリヒ」

名乗りを上げると、2人は武器を構える。先ほどのまでの空気が、更に鋭くなった。

「いぞ尋常に……はじめいつ……!!」

「勝負！」

「いっけええええええええ！」

合図と同時に弾ける2人。

ワンス子はレイピアの間合いに入らせない為、薙刀を鋭く振り回す。

⌈
•
•
•
!
⌋

ワンス子の猛攻に、クリスは防戦一方になる・・・が、攻撃が単調すぎる。

「その腕、もらった！」

ワン子は踏み込んで小手を出すが、

「ふっ！」

クリスに軽く避けられる。

「まだまだー！」

ワン子はすかさず薙刀を振るうが、クリスはその金髪を優雅になびかせ、華麗にかわしていく。

一見すればワン子が優勢のように見えるが、クリスはだんだんとワンの薙刀が見えてきている。

最初の頃より、避けるのに無駄な動きが少ない。
多分そろそろ仕掛けてくるだろう。

「そろそろくるな」

「・・・ああ」

俺とモモ先輩が、そう会話を交わした瞬間。
クリスは踏み込んだ。

「やーっ!!」

「!」

速く鋭い突きを、ワン子はギリギリのところ回避する。
仕切り直しに、お互い間合いを取り直した。

「あの突きの速さ、尋常じゃない。次に間合いに入られたら終わるだよ、ワン子」

弓兵であり、目の良い京は、クリスの突きの速さを完全に見切っていた。

「次で仕留める」

「上等よ！」

ワン子は、間合いに入られればまずいという事に気がつき、薙刀をクルクルと高速回転させ始めた。

あれではどこから薙刀が来るかわからず、迂闊に踏み込めない。クリスは迂闊には動かず、隙をうかがっている。

おそらく、お互い次の一撃で決める気だろう。そこで、ワン子の動きが微妙に変わる。

「違う。それじゃダメだ」

「おい違うぞワン子。そうじゃないだろー」

「？」

その動きの変化に気づいた俺とモモ先輩は、2人で駄目出しをする。大和はその意味がわからず、？を浮かべた。

「川神流」

薙刀を大きく振り上げるワン子。

そのまま頭へ強烈な振り下ろしが行くと見せかけて、薙刀の刃は斜めに流れていき、

「山崩し！」

クリスの脚へと振り下ろされた。
フェンシングは基本的に脚への攻撃がない。
だから、ワンの考えは間違っているわけではない。
だが、一つだけ誤算があった。

「ふっ！」

クリスは跳び上がり、薙刀の刃をかわす。
そして・・・

「しまった！よけ・・・」

「セエイ！！」

隙の出来たワンの肩に、強烈な突きが炸裂した。

そう、これがワンの誤算。
一般的にフェンシングに脚への攻撃はないが、フェンシングの種目
には全身有効なものがある。
そして、クリスの専門はソレだったのだ。

吹き飛ばされたワンは、肩を押さえ立ち上がることが出来ない。

「それまで！勝者 クリス！」

ワーワー　ワーワー

見守っていたギャラリーからドツと歓声が沸き上がる。

まあ、負けたのは残念だったが、ワン子にはいい経験になっただろう。

ワン子は、フラフラとこちらへ歩いてきている。

「足りない頭使いすぎなんだよ。もっと本能で闘え」

「うわ、ありや鎖骨イったんじゃねーか？」

我が風間ファミリーは、なんともおき楽なものである。

「とか冷静に言ってる場合じゃない。大丈夫か！？」

大和が慌てて駆け寄るが、まあ大丈夫だろう。

クリスも、本気だったわけじゃなさそうだしな。

「ふむ、骨は大丈夫そうじゃの。暫く後は残るかもしれんが」

「それはよかった」

じいさんの診断を聞き、クリスも安心したようだ。
そして、当のワン子かというと。

「ふ、ふふふふ。面白いわねクリス、本気でやろーじゃない！」

ワン子が着けていたリストバンドを外す。

すると ドスッ と音を立てて地面に落ちた。

どんなベタな展開だよ！？

「さあ！2ラウンドと行きましょ・・・」

「あほっ！既に勝負あつたわ！（ぽかつ）」

ワン子はじいさんに殴られ説教される。
当然だろう。

相手の実力を判断できず、はじめから全力で行かなかったワン子が悪い。
戦場じゃ、一瞬の油断が命取りだ。

「むークリス、これで勝ったと思わないことね！」

「む」

険悪なムードになるかと思いきや、

「ま、それは置いといて。やるわね・・・アタシ達は、あんたを歓迎するわ！」

「！」

ワン子は歓迎の意を示す。

それに伴い、ギャラリーからも大きな拍手が送られた。

「よろしくね！」

「こちらこそ、よろしく頼む！」

お互い握手を交わすワン子とクリス。
青春って感じた。

「じゃあ、早速アンタのあだ名を考えるわね！」

はい？

ワン子さん、何言ってるんですか？

「あだ名・・・クリスで充分だが？」

クリスも困惑している。

「ダチには必要でしょう？ うーんとね、えーと。クリスだから、クリ！」

「く、クリ！？」

ブーーーーー！？

思わず噴出してしまった。

悪気はないんだろうが、どんなあだ名だよそれ。

「やべえ！ 立った！」

何がだヨンパチ！？

「股間の反射神経速すぎだろ・・・まあ、俺様もなんだがな」

お前も何言ってたんだガクト？

「お巡りさん、ここに変態が2人もいます。大和はまさか立たないよね？ ククク」

「お巡りさん3人です。変態の数は3人でした」

お前らも何やってんの？京に大和。

「クリスでいい」

「アタシは親しみを込めて、クリって呼ぶわ」

「・・・確かワン子と呼ばれていたな。ならばお前は犬だ。自分はお前を犬と呼ぶ」

「・・・ワン子もワン子だが、クリスも意外と子供だな。」

「ぬぬぬ」

「むむむ」

にらみ合う2人。

2人は似たもの同士ってことか？

「世界にいる可愛い子は、すべて私へのお供え物」

その時、一陣の風が吹きぬける。

意味不明な言葉と共に走る風・・・もとい、モモ先輩は、クリスの腕を掴み、

「来い。お姫様抱っこしてやろう」

「な、何をする！」

抵抗するクリスの拳を受け流し、あっさりお姫様抱っこしてしまっ

た。

「なっ!?!・・・この強さ。貴女が川神百代ですか?」

「ピアチエーレ!そして、そのワン子の姉でもある」

何やってんだモモ先輩?

それに、ピアチエーレってイタリア語だし。

「噂は聞いておりました。真剣勝負を繰り返す戦士であると」

「ああ。戦ってみるか?柔道の寝技でっ

」

暴走するモモ先輩の頭を、じいさんが後ろからはたいた。

「アホかモモ。ほらほら、早う授業に戻れ戻れ」

「じい・・・気安く頭殴るなっ・・・てのはまあ置いて実は提案があるんだ」

「なんじゃ?」

モモ先輩は、大きく息を吸い、みんなに聞こえるように言った。

「みんなー転入生のクリスト、編入生の土郎の決闘が見たくないか
ーーーー?」

は?

「あーあの噂の編入生か」

「クリスの実力は今見たけど、衛宮の実力は見た事ないな・・・」

「ちょっと見てみたいよな」

がやがやと、周りはすっかりその気だ。

「ふむ。それはワシもちよっと気になるのう」

じいさんアンタもかよ!?

「で、どうじゃ士郎?」

「いや、どうだって、クリスもさっきの戦いで疲れてるだろうし・・・」

「自分はまだ戦えます」

クリス、やる気満々だし（泣）。

「シロウ、父様やマルさんが評価している貴方と、自分も戦ってみたい。もしよければ、相手をしてくれないだろうか?」

クリスは頭を下げる。

む、そこまでされて断つたら、なんか俺が悪者みたいじゃないか。
ちくしょう、モモ先輩め。
最初からその気だったな。

・・・しかたない。

「・・・はあ、わかった決闘を受けるよ」

「ありがとう、シロウ」

「おおーーーー！！」

こうして、衛宮士郎VSクリスティーアネ・フリードリヒの決闘が行われる事になった。

リユーベックからの転入生（後書き）

今回は、最初と最後以外は殆ど原作通りですね。

次回は、士郎とクリスの決闘です。（まあ、更新は不定期ですが）

それではまた次回！！

士郎VSクリス

川神学園校庭の人だかりの中心に、2つの人影。
士郎とクリスである。

「はいはい。士郎VSクリス トトカルチョ締め切るよー」

例の如く、キャップ達は金儲けをしている。

まったく、何をしているのやら。
戦うこっちの身にもなってほしい。

「これより、衛宮士郎対クリスティアーネ・フリードリヒの決闘を始める。2人とも、準備はいいかの？」

「自分は構わないが・・・シロウ。武器はどうするんだ？何なら教室に取りに行くまで待つが？」

士郎が素手なのをみて、クリスが提案してくる。
わざわざ武器を取りに行く時間をくれるとは、さすが騎士。

「そうだなあ・・・」

しかし困ったな。

一番使い慣れている武器は干将・莫耶だが、当然の事ながら教室には干将・莫耶のレプリカはない。
かといって、今ここで投影するわけにもいかない。

「ん？」

その時、先ほどワン子が使っていた薙刀が目に入る。
まあ、これでいいか。

「俺はこれを使わせてもらっよ」

「？ いいのか？それは犬の得意な武器だろう？もし適当な気持ちでやるのならば、それは自分に対する侮辱だぞ」

何を勘違いしたのか、クリスの機嫌が悪くなる。

「なんだ、マルギツテから聞いていないのか？俺の戦い方は、あまり武器を選ばないんだ。確かに使い慣れた武器はあるけど、そのレプリカは教室にはないからな。決してクリスを侮辱しているわけではないんだ。勘違いさせてしまったのなら謝る。ごめん」

俺は素直に頭を下げる。

確かに、騎士道精神を持つクリスには、失礼だったかもしれない。

「い、いや。自分の方こそすまない。早とちりだったようだ」

俺が頭を下げた事に驚いたのか、クリスは慌てて言ってきた。

「・・・2人とも、始めてよいかの？」

ああ、すっかりじいさんのことを忘れてたよ。
じゃ、思考を切り替えるとするか。

「俺はいいぞ」

「自分もだ」

「それでは、いざ尋常に・・・はじめいつ！！！！」

じいさんの開始の音が、学園中に響く。

「・・・」

「・・・」

しかし、士郎とクリスは構えたまま、微動だにしない。

「なんだ？全然動かないぞ？」

「おい。睨み合っていないで動けよー」

「そうだそうだー」

先ほどの激しい戦いとは裏腹に、まったく動きのない2人に、観客から野次が飛び始めるが、

「お前ら、少し黙れ」

「！！？」

モモ先輩が一言呟くと、野次を飛ばしていたも者達が静かになった。そう。2人の戦いは、もう始まっていたのだ。

士郎はクリスがどんな行動をしてきても対処できるような、隙のない構え。

それを前に、クリスは迂闊に攻め込めずにいる。

「・・・」

「・・・！！　そこおっ！」

静止状態をクリスが破る。

士郎に生まれた一瞬の隙を見逃さず、一撃を放った。
しかし、

「（ニヤリ）」

「！！！」

その隙は、クリスを飛び込ませる為の士郎の罠だったのだ。
突き出されたレイピアは、薙刀の柄の部分で払われ。

その反動を利用して、刃の部分がクリスの脇腹へと向かう。

「くっ！」

しかし、クリスは後ろに下がりながら体を捻り、ギリギリの所で刃を回避した。

ザッ

お互いの距離が元の位置に戻る。
士郎に追撃の気配はない。

あくまで後の先に徹するようだ。

「はぁぁあ！！！」

それから数回。

クリスの突きを士郎がいなし、士郎のカウンターをクリスが避けるという光景が繰り返される。

「参ったな。こうも避けられるとは、やるなクリス」

「いや。士郎の方こそ、攻防が一体となった返し技、恐れ入った。だが・・・これならどうだ！」

先ほどよりも速いクリスの突き。

いや、連続突き。

これでは、いなすのが精一杯で反撃が出来ない。

一撃

二撃

三撃

一撃ごとに鋭く、重くなっていくクリスの突き。

その突きは、聖杯戦争でのランサーの猛攻を思い出させる。

エミヤならば、この突きの嵐を全ていなす事が出来るだろう。

しかし、今の俺は、まだその域に達してはいない。

いなしきれず、薙刀でクリスの突きを受けなければならなくなる。

ガイイン！

「くっ！？」

ピシィ

薙刀には、僅かだがヒビが入る。

「！！ 隙ありっ！！」

一瞬できた士郎の隙。

それは、最初のように自ら作り出したものではなく、クリスの猛攻で出来てしまった隙だ。

（まずい！強化、開始トレース オン）

俺は薙刀に魔力を流し、硬度を増す。

「セエイイ！！」

放たれた一閃。

レイピアの先と体の間に、間一髪で薙刀を割り込ませる。
が、

バキィ！！

「な！？」

先ほどのヒビが禍したのか、薙刀は中ほどから砕け、レイピアが士郎の腹部を襲う。

直撃を受けた士郎は吹き飛ばされた。

士郎はクリスの突きをいなし続けているが、そろそろいなすのも限界だろう。

「ったく、士郎のヤツ使い慣れない薙刀なんか使つて。これじゃあ何の為にクリスと戦わせたのかわからないじゃないか」

百代は、試合を見ながらつまらなそうに言う。

いや、試合自体はそうつまらないものではない。

ただ、士郎が実力を全て出してない事に、つまらなさを感じているのだ。

「ああ。姉さんやっぱり最初からその気だったんだ」

流石は大和。

百代が士郎とクリスを戦わせようとしていた事に、気づいていたようだ。

「前から思ってたんだけど。何で姉さんは、そんなに士郎の強さが知りたいの？」

「アイツは今まで生きてきて、私が勝利をイメージできない2人のうちの1人だからな」

姉さんは戦う士郎を見つめながら、楽しそうに言う。

「ちなみに、もう1人はじじいだ」

「まあ、姉さんのおじいさんだしね」

姉さんはそう言うが、前にルー先生が言っていた。
短期決戦ならば学園長の勝ちだが、長期戦になると姉さんの勝ちになるらしい。

ざわ ざわ ざわ

その時、辺りがざわめき始める。

どうやら、戦闘に変化があったらしい。

先ほどまで突きをいなししていた土郎が、いなしきれずに突きを受け止め始めていた。

「あーもう！大和、土郎に何とかして武器を投影する機会を与えろ。
このままじゃ負けるぞあいつ」

「いや、でも真剣勝負だし・・・」

方法がないわけじゃないが、真剣勝負に割って入るような真似はできねばしたくない。

「なあ、頼むよ弟」

「！！！」

甘い声で抱きついてくる姉さん。

そして、この背中に当たる柔らかな感触は・・・

「姉さん、胸が当たってる」

冷静に言っではみたものの、内心はドキドキである。

「嬉しいだろう？」

「う・・・まあ」

意地の悪い笑みを浮かべながら背中に胸を押し付けてくる姉さん。そんな時、色々な意味で熱い視線を感じた。

「めら　めら」

「・・・京さん？その音は何ですか？」

「私の中で燃え上がる嫉妬の炎を、音で表現してみました。めらめら　めら　めら」

まずい。

これは非常にまずい。

「めら」の数が増えてきている。

「ほら大和！早く私を放さないと、今晚寝られないぞ」（ニヤリ）

くっ、そういうことかっ！！

まさか、軍師であるこの俺が嵌められるとは。恐るべきモモバスト。

「わかったよ姉さん。何とかするから手を放してくれ」

「よしよし、流石弟」

姉さんは俺から手を離し、離れていく。

少し背中感触が名残惜しいが、このままでは今夜本気で京に既成事実を作られかねない。

「じゃ、ちよつと行ってくる」

そう言つて、大和は校舎の中へと入っていった。

「ぐっ……」

吹き飛ばされた土郎は、ゆっくりと起き上がる。

今のはギリギリだったな。

ヒビが入っていたとはいえ、まさか強化した薙刀が破壊されるとは。

とはいえ土郎にダメージはない。

薙刀が破壊され、レイピアノ先端が当たる寸前のところで、土郎は自身の服と体に強化をかけた。

そのおかげで、吹き飛ばされたものの、ダメージは抑えることが出来た。

「武器は破壊した。このまま続けるといふのなら構わないが、自分は手を抜く気はない」

クリスは追撃はせず、仁王立ちのままレイピアの先端をこちらに向ける。

「そうだな。武器なしでどこまでやれるかはわからないが・・・このまま負けたんじゃ、ちよつとかつこ悪い」

士郎は拳に強化を掛けて構える。

正直、武器なしでは士郎に勝ち目はない。

とはいえ、士郎も男の子なのだ。

あまり乗り気ではなかったが、こつも簡単に女の子にやられるわけにはいかない。

「ちよつとまつた！」

その時、第三者の声によって決闘が止められた。

「なんだ？決闘を邪魔するとは感心しないな」

「大和？」

決闘に割って入ったのは、直江大和だった。

「あー・・・やっぱりこうなるか」

クリスからの厳しい視線と、士郎からの「何やってんだ？」という視線に、大和はバツが悪そうな顔をする。

「えーと、クリス？俺は士郎の友人の直江大和だ」

「シロウの友人か。友を助けようと割って入ってくるその気持ちは立派だが、決闘を邪魔するのは感心しないな」

決闘を邪魔されたクリスは、見るからに怒っている。

先ほどまでこちらに向けていたレイピアを、大和に向けるくらいだ。

「勘違いしないでくれ。別に、決闘を邪魔しに来たわけじゃない。ただ、士郎に渡すモノがあつてな」

「渡すモノ？それはなんだ、直江大和」

クリスの疑問に対し、大和は手に持っていた袋を見せる。

「なんだそれは？」

「士郎の使い慣れた武器のレプリカだ。これでお互い得意な武器同士、正々堂々決着がつけられるけど、渡してもいいか？」

「！！いいだろう。自分としても、シロウとはお互い全力で戦いたい」

義を重んじるクリスは、正々堂々と言う言葉を聞いて、力強く了承した。

いや、最初から正々堂々と戦ってたんだけどな？

「ほらよ、士郎。姉さんじゃないけど、俺も士郎が真剣勝負をするところを見てみたいからな。がんばってくれ」

そういえば、風間ファミリーの皆の前でまともに戦ったことはなかったな。

モモ先輩や大和の言葉は抜きにしても、久々に真剣に戦ってみるのもいいのかもしれない。

もちろん、今までふざけていたわけではないが、どこか乗り気ではなかった。

「了解。じゃあ頑張るか」

大和がギャラリーへと戻ったのを見計らって袋を開ける。

「！！」

なるほど、どうやって干将・莫耶の変わりなんて用意するのかわかったが。

まさか、何も入っていない袋を渡してくるとはな。

士郎の武器が全て投影によるものだと知っている大和は、こう考えたのだ。

大和が武器を用意する事が出来ないのなら、士郎が武器を用意できる環境を整えてやればいいのだと。

「トレース、投影、開始」

俺は袋に手を入れると、小さな声で呟いた。

「おおー！！！！」

士郎が袋の中から出した白と黒の剣を見て、ギャラリーにざわめきが走る。

対を成す白と黒の夫婦剣は、それほどまでに魅力的だったのだ。

士郎が投影したのは、陰陽剣 干将・莫耶（もちろん、骨子を改造

して刃は潰してある）。

武器を選ばないなんてクリスに言ったが・・・やはり、こいつの方が手に馴染む。

「さあ、続けようか。クリス」

「ああ。行くぞ！」

掛け声と共に放たれたのは、額、首、鳩尾を狙う三連突き。

先ほどまでの士郎ならば、受け止めねばならなかったであろう突き。しかし、武器が変わればこうも変わるものなのか。

それとも、士郎が真剣^{マジン}になったからなのか。

士郎は二刀を巧みに振るい、全ての突きを逸らして、最小限の動きで薄皮一枚のところで避ける。

「ふっ！」

「くっ!!」

今まで攻めに転じていたクリスが、初めて防御に回る。

接近された事により、不利と判断したクリスは、レイピアを振るって士郎から距離を取った。

本来レイピアの基本的な攻撃手段は突き。

クリス自身も得意なのは突きによる攻撃である。

しかし、それを止めてまで、士郎との距離が取りたかった。

それほどまでに、追い詰められていたのだ。

「武器を選ばないと言っていたわりに、その剣に変えた途端動きが明らかに変わったぞ、シロウ」

「別に武器を選ばないというのは嘘ではないさ。ただ、干将・莫耶コイツは俺が一番使っている武器だからな。練度で言えば、薙刀の比ではないだろう」

いつの間にか、士郎の口調が変わっている。

どうやら、完全に思考が戦闘時のものに切り替わったらしい。

「・・・」

「・・・」

決闘が始まった時と同じ。

2人は見詰め合ったまま動かない。

否、クリスは動けない。

そんな状態を、今度は士郎が破った。

「そろそろ授業の始まる時間だ。不本意だが、次で終わらせてもらう」

「いいだろう。自分も、次の一撃で終わらせる」

士郎は両手をだらりと下げ、クリスはレイピアを顔の前に構える。先に動いたのは士郎だった。

「はあっ！」

「なあ！？」

クリスは驚いた。

なんと、士郎は双剣のうちの1つをこちらに向かって投げてきたのだ。

それと同時に、士郎は一直線にクリスに向かって走る。

「くう！」

飛んできた干将を、クリスはレイピアで弾く。

その間に懷にもぐりこんだ俺は、クリスの脇腹めがけて莫耶を振るう。

「甘い！」

しかし、避けられないと判断したクリスが、莫耶を狙って突きを出してきた。

ギン

「ちっ！」

鋭く重い突きに、腕ごと莫耶は弾かれる。

莫耶を持った腕が上にあがり、無防備になった胸へとクリスの突きが迫る。

しかし・・・

「背中がから空きだ」

「！！！」

士郎の忠告と同時に背後から聞こえる風切音。
振り向いたクリスは、驚くべき反射神経で体を捻りながら飛び退き、

飛んできた何かをかわす。

「なんだと!？」

驚くのも無理はない。

背後から飛んできたのは、士郎が最初に投擲し、クリスが弾いた干将だったのだ。

これぞ、干将・莫耶の特性。

干将・莫耶は夫婦剣。お互いが磁石のように引き合う。

故に、この手に莫耶がある限り、干将は必ず戻ってくる。

戻ってきた干将を掴んだ士郎は、間髪入れずにクリスへ剣を振るう。着地したばかりのクリスは避ける事が出来ない。

止む終えず、レイピアの腹で干将・莫耶を受け止める事になる。

「む？」

士郎はそれでレイピアを破壊できると踏んでいた。

ところが、レイピアは大きくしなりはしたが、折れることはなかった。

クリスは、干将・莫耶をレイピアで受けるタイミングに合わせ自らの肘を曲げ、僅かに後ろに飛ぶ事によって衝撃を最小限に抑えたのだ。

再び士郎はクリスに接近する。

突きを溜める暇を与えない為だ。

ところが、クリスの口には笑みが浮かんでいる。

「次に接近してくる、この機会を待っていたぞ！」

「！！（まずい！）」

士郎の心眼^めには、クリスが全身の筋肉をバネの様にして、腕に力を伝えようとしてるのがわかった。

「零距离・刺突！！！」

放たれるのは、零距离とは思えないほどのパワーとスピードのある突き。

「うおおおおお！！！」

士郎は大砲のような一撃を前に、避けるという選択肢を捨て、交差するように干将・莫耶を振り下ろした。

「ど、どうなったんだ？」

「大丈夫かしら、2人とも動かないわよ？」

静止する2人に、ギャラリィからは心配の声が始める。

カランッ

その時、校庭に響いた金属音。

その正体は、中ほどで真つ二つに折られた、クリスのレイピアだった。

クリスが干将・莫耶を受け止めた時、既にレイピアの強度は限界を迎えていた。

その状態で零距离・刺突を放ち、更には心眼でクリスの攻撃を一瞬早く予測した士郎に干将・莫耶を振り下ろされ、レイピアは士郎に届くことなく破壊されてしまったのだ。

「さつきと立場が逆だな。で、どうする？まだ続けるといふのなら、こちらの手は抜かないが？」

嫌味っぽく口に笑みを浮かべて言う士郎に、クリスは微笑で返す。

「いや。素手では自分はシロウには勝てない。この勝負、自分の負けだ」

ということとは。

ギャラリーの生徒達が、ざわざわとした。

「勝者 衛宮士郎！」

ワアアアアアアアアア！！

じいさんの宣言で、ざわめきだったものが、大歓声へと変わる。

むう。今まで、戦って歓声を浴びる事なんてなかったから妙な感じだ。

「ありがとうシロウ。今日はとても勉強になった。また、いつか自分と決闘をしてくれないだろうか？」

そう言って手を差し伸べてくるクリスに、

「ああ、俺でよければ」

そう答えて、しっかりと握手する。
こうして、編入生 衛宮士郎VS転校生 クリスティアーネ・フリ
ードリヒの戦いは幕を閉じた。

その頃、他の面々は・・・

「・・・やっぱり強いな」士郎は。いつか戦ってみたい」

闘気を溢れだしながら、不適に笑う百代。

「よっしゃー！士郎のおかげで大儲けだぜ！」

「ククク、ナイス士郎」

「ま、最初の試合で、クリスの実力を皆が見てたのが良かったな」

最初に行われたワン子とクリスの決闘のおかげで、トトカルチョで
は大多数がクリスに賭けていた。

そのおかげで、士郎に賭けたキャップ、京、大和の3人は大儲けだ
ったのである。

「いや、強い女の子が多い川神学園だけど、士郎みたいに男の子が

頑張ってくれと、肩身が狭い思いをしなくてすむから助かるよね」

「おいモロ！それは、いつもモモ先輩や京、たまにワン子にやられてる俺にケンカ売ってんのか？」

いつも通り仲のいい、モロとガクト。

「ちょっと！？僕達だけ説明酷くない！？」

「そうだぜ！これじゃあ、俺様とモロがおホモ達みたいじゃねえかよ！」

やっぱり2人は仲がいい。

「おいっ！」

ギャラリーの中、刀を背に、馬のストラップを持つ少女。

「朝の鍛錬でも思いましたけど、やっぱり士郎さんは強いですねー」

「そだなー、まゆっち」

「しかも、あんなに目立って・・・お友達まで出来ていますよ松風」

「まゆっちも、決闘とかした方がいんじゃない？そうすりゃ宿敵ともとかできんじゃない？」

などと、熱い少年漫画のような展開を夢見るまゆっちと松風。
そして、クリスの一撃で怪我をして保健室に向かったワン子はい
うと・・・

「ええ！？士郎とクリが決闘！？」

「ウン。いい試合だったヨ。見れなくて残念だったネ、一子」

「うわーん」

ルー先生から士郎とクリスの決闘内容を聞き、涙するのであった。

士郎VSクリス（後書き）

というわけで、士郎とクリスの戦いは、士郎の勝利という形で幕を閉じました。

干将・莫耶で士郎が使った技は、鶴翼三連の劣化版ですね。本来ならば、三対の干将・莫耶、6本の剣で行う技ですが、生徒達の前で投影を使うわけにもいかないので、こんな感じになりました。

次回は「正義の味方とやさしい少女」の方を更新する予定なので、しばらく間が空くと思います。

それではまた次回！！

京の怒り（前書き）

すいません。だいぶ更新が遅れました。

さて、皆さんはご存知でしょうか？なんと、「真剣で私に恋しなさい！」がアニメ化するらしいですよ！しかも、マジこいSの制作も着々と進んでいる模様。

もしかすると、嬉しさのあまりテンションが上がり、更新速度が上がる……かも？

それでは本編をどうぞ。

京の怒り

クリスとの決闘の後、梅先生からの説明でクリスが島津寮へ住むことが告げられる。

島津寮に殆どのメンバーが暮らす風間ファミリーは、クリスの面倒を見ることになった。

そして放課後……

「ちょっといいだろうか？」

キャップと大和の2人と雑談していた所へ、クリスがやってきた。

「どうしたんだ？」

「部屋が隣という事もあって、椎名殿に寮へ案内してもらおうと思ったのだが、部活があるからと断られてしまった」

残念そうに言うクリス。

士郎と大和は同時に思った。

「（……京、逃げやがったな）」

「そりゃごめん。アイツ根暗だけどいいやつだから」

すかさずフォローを入れるキャップ。流石だ。

でも、「根暗だけど」という台詞はいらないと思うぞ。

「でも、俺これからバイトだから……ってな訳で、軍師大和」

「いや。俺も今日はヤドカリの餌買いに行かなきゃいけないから……
……ってな訳で、ブラウニー士郎」

「誰がブラウニーだ！……まあいいけどさ」

まさか、回りまわって俺まで来るか。

一応俺も編入したばかりなんだけどなあ。

「というわけだから、俺が案内するよクリス」

「ありがとう」

柔らかに微笑むクリス。

その柔らかな笑みは、

ああ、本当にセイバーに似ているな。

その後、クリスにまず学校内を案内し、寮への帰り道川神院や商店街のほうもざっと案内する事にした。

「士郎は自分が来る数日前に編入してきたと聞いたのだが、ずいぶん学校内やこの町に詳しいんだな」

「ああ、言っただけだったか？俺はもともと川神院で世話になってたんだ。世界を旅してた時だって、たまにここに帰ってきてたしなあ」

地元なのだから、詳しいのはあたりまえだ。

何故学校内が詳しいのか。それは、つい昔の癖で建物の中に入るとトラップ等がないか、逃走経路はどうするか等、無意識に構造を解析してしまうからだ。

だから、実際に校内を隅々まで回るのは今日が始めてだったりする。風間ファミリーの皆は俺の魔術のことを知ってるから、案内なんてしてくれなかったもんな。

「川神院で世話になってた？シロウの両親は川神院で働いているのか？」

「いや、小さい時に事故にあってさ。俺、両親はいないんだ」

親の事を聞かれた時は、とりあえず事故という事になっている。事故というのは、あながち間違いでもないしな。

「……すまない」

すまなそうに頭を下げるクリス。

しまった。

風間ファミリーの皆は複雑な事情とかあまり気にしない連中だから、ついいつもの調子で話しちゃったけど、普通の反応はこうだよな。

「き、気にしないでいいぞ？事故のせいで記憶がないから、悲しいとかそういうことはないし……！？」

「うう~~~~」

泣・か・せ・て・し・ま・っ・た。

（やばい！ど、どうすればいいんだ！？）

「わ、悪いクリス！泣かせるつもりはなかったんだが」

「いや、違うんだ。すまない。もし父様が死んでしまったらと想像したらつい」

どうやらクリスは自分が俺のようだったら、と言っ事を想像してしまったらしい。

なんか悪い事をしたな。

「だ、大丈夫だつて。中将殿は強いし、マルギツテも傍にいるじゃないか！」

「グスツ……うん。そうだな」

必死の説得の甲斐あつてか、なんとかクリスは泣き止んでくれた。

「ありがとう。士郎は強いな」

「……そんな事はないさ。もし俺が強く見えるなら、それは、今まで出会った多くの人達のおかげだ」

遠くを見つめる士郎の眼。

その横顔を、クリスはとても尊いものに感じた。そして、同時に寂しさを。

「さ、それじゃあそろそろ寮へ帰るか」

「ああ、そうだな」

多馬の河原を寮へ向けて歩く2人。

先程の会話の内容が原因か、2人はお互いに喋らない。

「……」

「……」

気まずい。

正直何を話せばいいのかわからない。

元々士郎は戦地を転々としていたため、同年代の人と話すことが少ない。

高校時代でさえ、友人と呼べる一般人は男子である一成くらいなものだ。

そんな士郎が、年頃の女の子に振れる話題などあるわけもなく、結果お互い無言で歩く事になってしまった。

ピピピ　ピピピ

「ん？」

その時、士郎の携帯がなった。
どうやらメールらしい。

クリスマスと寮の変わった一年生を連れて集会に来い！

by みんなのキャップ

「……何考えてるんだ？」

届いたキャップからのメールには、クリスマスとまゆつちを連れて金曜集会に参加しろとのことだった。

金曜集会。それは、中学の時京が親の都合で引っ越すことになり、

週末にいつも遊びに来たことから「金曜日はみんなが集まろう」という理由で始まった集会だ。

今では九鬼財閥の所有している土地の警備という名目で、廃ビル内を集会場所として使っている。

（何が目的かわからないが……まあ、キャンプのことだ何か考えがあるんだろう……たぶん）

「どうしたんだシロウ？」

立ち止まり携帯の画面を見ていた俺を不審に思ったのか、クリスが怪訝そうに話しかけてきた。

「クリス。一度寮へ戻った後、もう少し付き合ってもらってもいいか？」

「？ 自分は別にかまわないが？」

「悪いな。じゃあ、とりあえず寮へ行こう」

キャンプからのメールに疑問を残しつつも、士郎はまゆつちを連れて行くために寮へ向かうのだった。

士郎にメールが届く数十分前。

秘密基地には、各々の用事を終えた、士郎を除く風間ファミリーのメンバーが集められていた。

「どうしたんだよキャップ？急に集合だなんて？宅配寿司のバイトはどうしたんだ？」

わざわざ召集をかけなくても今日は金曜日。自然と皆が秘密基地に集まる日だ。

それなのにわざわざ召集をかけたキャップの行動を疑問に思い、大和が問いかけた。

「ああ。今日は宅配件数が少ないから早めにあがっていいって言われた。もちろん、土産はちゃんともらってきた」

ドンツ とテーブルに寿司を置くキャップ。

うん。バイトのことは分かった。けど、なんで緊急召集をかけたのかは未だわからない。

「おほんっ！ 今日お前達を呼んだのは他でもない。新メンバー加入についてだ」

「……えっ？」

さも当然のように言い放つキャップに、皆唖然だ。だるそうにしていた百代でさえ、目をぱちくりとさせている。

「あれっ？言ってなかったっけ？」

「言っていないよ！今聞いたよ！？」

キャップのおとぼけっぷりに、モロが鋭くツツコみを入れた。

「じゃあ、今話す。よく聞けみんな」

どうやらキャップは、転入生のクリスと島津寮に入った新入生の1年生が気になっているらしい（もちろん、恋愛感情ではない）。それで、面白いことになりそうだから、2人を新メンバーに加えたいそうだ。

「……」

今のメンバーを大切に思っている京は、当然不穏な雰囲気醸し出す。

「つーわけで、一人ずつ意見を言ってくれ」

そんな京に気づいてか、キャップはみんなの意見を聞くことにした。こういう気配りができるところは、流石リーダーといったところだ。結果、言い出しっぺのキャップ、そして、百代と岳人の3人は賛成。京とモロは反対。大和とワン子は様子見という意見を出した。多数決では賛成派が多い為、話し合いの結果、とりあえず一度クリス達をここへ招くことになった。

「そうと決まれば善は急げだ！士郎にメールするぜ！！」

「いやいやいや！いくらなんでも早すぎだろっ！！」

「大和、風ってのは自由気まま、気まぐれなもんだ。てなわけ送信」

止める大和の声も聞かず、キャップはメールを送信するのだった……。

「で、この棚には囲碁とか将棋が置いてあって、あっちはみんなで持ちよった漫画とか」

「凄いな。なんでもあるんだなここは」

「わあ、なんかいいですね、こうゆうの」

現在、クリスとまゆっちは、モロやほかのメンバーから基地内を案内されている。

クリス達がモロの説明に夢中になっている間に大和から事情を聞いたので、大体の事情は理解した。まあ、呼んだ当の本人であるキャップが福引をやりに出かけたというのは納得いかないが……。

それはさておき、クリスとまゆっちを風間ファミリーに入れるという案は個人的には賛成だ。

2人ともまだ学園にきたばかりだし、仲間が増えるのは喜ばしいことだ。

ただ一つ。問題があるとすれば、それは……急すぎる。

現在の風間ファミリーを気に入っている京との間で問題が起きなければいいが……。

「うーん……で？」

「え？」

（ん？）

「この場所は、どういう意味があるんだ？ 遊びたければ家でもい

「いだろう？」

クリスは心底わからないといった様子で尋ねる。
……この状況は、不味いんじゃないか？

「わざわざこんな場所に集まる意味が分からないぞ」

「クリス、その辺で……」

「少なくとも、建設的な行為ではない」

「やめておけ、クリス」

俺が止めようとしたのを無視して続けるクリスに、流石の大和も不味いと感じたのか、少し強めの口調で制する。

「率直な意見だ、直江大和」

自分の言葉を止められたのが気に入らなかったのか、クリスも少し口調が強くなる。

チラリと京に視線を向けると、拳が握られ、僅かに震えている。
クリスの次の言葉によつては、京が動きかねない。

そう感じた土郎は、さりげなく京とクリスの間にずれ、いつでも動けるように意識を集中させた。

「こんな廃ビルは、さっさと取り壊すべきだな」

「お前、死ねよ」

「！――」

クリスの言葉と、京が動くのはほぼ同時だった。飛び掛かるうとした京を、俺は間一髪のところでは止める。

「ちっ！ やっぱりこうなるのかよっ……！！」

危なかった。クリスと京の間にいなければ、たぶん止めるのが間に合わなかっただろう。

女の子が強いというのも考え物だな。

「よくも……よくも好き放題言ってくれたなああああ！！！！」

俺が抑えてるにもかかわらず、京はクリスを睨み殺さんと言わんばかりの形相で睨みつけ、声を張り上げる。

「京！ やめろ！」

大和の言葉と同時に、モモ先輩も京の体を押さえる。正直助かった。今の京を無傷のまま抑えるのは俺には難しかったから。

「分からないだろ、お前には！！ この場所が！ この空間が！
どれだけっ……どれだけ大切なのか！！」

「え……え？」

クリスは、普段冷静な京の豹変ぶりに驚いた。意図して京の逆鱗に触れてしまったわけではない。いや、むしろ無意識に、本心で言ってしまったからこそ、それを京も理解しているからこそ、京はクリスを許すことができないのだ。

「だからこんな新参者を入れるの嫌だったんだ！！ 壊すべき？
よくもそんな事この場所で言ってくれたな！ 何様だと思ってやが
る！」

「み、京。待て、話を……」

「さっさと帰れ！！！ お前なんか仲間でもな……」

「ダメだ、京！」

それは言っではいけない。

確かに、京の気持ちはわかる。俺たちにとって、かけがえのないこ
の場所を「壊した方がいい」なんて言われたんだ。俺だって正直怒
ってる。

だけど、「仲間そのいじはじゃない」を言ってしまうば、もう二度とクリスと
仲間になることはできない。

その決断をするには、まだ早すぎる。

「京！ 落ち着け！」

大和は京を落ち着かせる為に、力強く抱きしめる。

「大和……だって、こいつ！ この場所を侮辱した！ 否定したん
だ！！ ゆ、許せないよ……！！！」

「もっと強く抱いてやれ」

「うん。……京、もういいから」

「う……う……う……う……う……」

モモ先輩の言葉で大和が京をさらに強く抱きしめた瞬間、京は大粒の涙を流し泣きだした。

場は静まり返り、京のうめく声だけが響いている。

「な……何だ。何が気に障った。自分は正しいことを言ったはずだが」

正しい？

この状況で、クリスはまだ自分が正しいと思っているのか？

「クリス、やっぱりそれが正しいとまだ思うんだ」

俺と同じ疑問を感じたのか、モロがクリスに問いかける。

「あ、ああ」

肯定の言葉。

その一言で、今度はモロの何かが切れた。

「じゃあ、本当にさよならだね」

「え？」

「仲間にはなれなかったね、残念。でも、学校ではまた普通に話そうよ！ 気をつけて帰ってね」

あからさまに不機嫌な雰囲気を出して、笑ってクリスに言うモロ。その笑顔が逆に怖い。

「え……あ、あう……え？ あ、あの」

突然の展開に、まゆっちは状況がつかめずオロオロしている。

「理由を言ってくれ！ 納得できない！」

「……」

クリスは周りを見渡すが、だれも答えない。
そこで、モモ先輩が一步前に出た。

「私が言ってやろうか、クリ。お前うざいぞ」

「え……」

「意味がないってのも、建設的じゃないってのも、全部お前の物差しだろうが。私たちは理屈じゃなく、好きでここに集まってるんだ。誰に指図されようが、やめる気はないぞ」

「自分は、ただ……」

「もうよせクリス。ここではお前が悪い」

「ワル……自分が、悪だと!？」

皆を敵に回し、縮こまっていたクリスだが、大和の「悪い」という言葉。「悪」という言葉に反応して、頭に血を登らせる。

「ああ。この空気、分らないか？」

「悪などでは断じてない！！ 確かに自分の物差しではあるが、じぶんいがいも普通この意見のはずだ！ そうだろう、シロウ！」

興奮して顔を赤くしながらも、すぐる様な目で俺を見るクリス。まるで、自分が間違っていないと認めてもらいたいかのように。だけど

「クリス。今のはどう考えてもお前が悪い」

「違う！ 自分は悪などでは断じてない！ シロウ、なぜそんなことを言うんだ。自分はマルさんや父様から、シロウは正義を貫く男だと聞いているぞ！ それが何故……」

まったく、クリスも固い奴だな。

何で「悪い」「悪」と捉えてしまうのか……。

「見損なったぞシロウ。ふつ、よく考えればわかることだったな。日本人のくせに肌を焼き、髪を染めているようなチャラチャラした奴が、正義を語るなど」

いや、それは偏見だろう。肌を焼いたり髪を染めたりしている人だつて、いい人はたくさんいる。

と、まあ、それは置いておいてだ。

今まで気にしたことはなかったけど、そんな風に言われたのは初めてだな。

確かに、俺の風貌は普通の人から見れば異質な……

「！-」

「……おい、クリ」

部屋の温度が急激に下がる。いや、実際に下がったわけではない。正確には、殺気にも似たモモ先輩の怒気がこの部屋を埋め尽くしているからだ。

「お前、士郎のことをよく知りもしないで何ふざけたことをぬかしてる」

モモ先輩はさつきより怒っている。
何故急に？

「よく知らない？ 自分はシロウのことを父様達から聞いてよく知っている。そして、自分の目で見た感想を言っただけだ」

「モモ先輩……」

「士郎！」

今にもクリスに殴り掛かるんじゃないかという雰囲気を出すモモ先輩を止めようとした所、ワン子にそれを阻止された。

「お姉さまは、士郎の為に怒ってるのよ。ううん、お姉さまだけじゃない、私たちも」

モモ先輩の怒気に紛れて気づかなかったが、よく見れば他のみんなもモモ先輩ほどじゃないにしろ、明らかに怒っている。

「だから、止めないであげて」

む……。そんなこと言われたら止められないじゃないか。

「わかった。でも、危ないと思ったたら力づくで止めるぞ」

「うん」

「いいか、クリ。事情があって詳しくは話せないけどな、士郎の肌と髪は好きであんな色になったんじゃない。多くの人を救い続けた代償でああなってしまったんだ」

「え……？ それは、どういう」

意味不明なことを言われ、クリスは疑問符を浮かべる。

そのおかげで、クリスもひとまず冷静さを取り戻したようだ。

「それをお前はっ！！」

「トレース 投影、オン 開始」

モモ先輩が飛び出そうと足に力を入れた瞬間、俺は剣を投影。剣の檻でモモ先輩を囲む。

それでモモ先輩を止められるとは思っていない。だけど、冷静さを取り戻させるには十分だろう。

「士郎……ちつ、悪かったよ」

予想通り冷静さを取り戻したモモ先輩は、舌打ちしながらも拳を収めた。

それを見て、俺も投影した剣を破棄する。

「な、なんだ、今のは……？」

「え……あれ？」

初めて俺の投影を見たクリスとまゆっちは驚き、啞然としている。
風間ファミリーの皆ですら、まさかモモ先輩を止めるのに魔術を使うとは思ってなかったのか驚いている。

皆が驚きで冷静さを取り戻してる今がチャンスだな。

「話が逸れてきてる。俺の事は一先ず置いておいて、クリス。お前は どうして自分が悪いのかわからない、そうだな？」

「あ、ああ」

「いいかクリス。人にはそれぞれ大切なものがある。それは、人であつたり、物であつたり、居場所であつたり。クリスにもあるだろう？」

「自分の大切なもの……父様やマルさん、それに父様からもらったぬいぐるみとかかな」

クリスは自分にとって大切なものを次々と述べていく。

「それを侮辱されたらどう思う」

「当然、許すことなどできないな」

「つまり、そういうことだよ」

「……？ ……！！」

俺の言葉に何か気づいたのか、クリスは はっ とした後、表情を暗くさせる。

「そうか……それだけ、大事な場所だったんだな」

そう言うと、クリスは数歩下がりふかぶかと頭を下げる。

「椎名京。皆。謝罪する。すまなかった。……自分は、もう二度と今のような発言はしないと誓う。だから、ここにいさせてほしい」

頭を下げるクリスを見て、今までクリスを睨み続けていた京もようやく目の力を緩めた。

溜息を吐きながらも、俺はオロオロしていたもう一人の新メンバーまゆっちの方へ向かう。

「びつくりさせて悪かったな」

「いえ。いろいろと勉強になりました。……寮で土郎さんが言っていた“家族”という意味。わかった気がします。風間ファミリーの皆さんは“家族”でここは“家”そんな感じでしょうか？」

「そうだな。そんな感じた。そして、今日からクリスとまゆっちも“家族”だ」

「！！ はいつ！」

これでようやく一段落だな。

まったく、俺達を呼びだしたキャップはいつ帰ってくるのやら……。

その時、外から聞こえてきたバイクのエンジン音。

このエンジン音……ようやく我らがキャップのお出ましか。
まったく遅いぞ。

京の怒り（後書き）

原作部分がだいぶはしょられました。

まあ、その冬馬とか2・Sメンバーは絡ませていきますが、現時点で原作通りに進めると、大和とクリスが衝突することになってしまふので、やむを得ず端折りました。できれば士郎とクリスを衝突させたいと考えていますので。
それではまた次回！！

クリスとの亀裂（前書き）

ようやく……ようやくバイトの方が落ち着いてきた。

仕事量は増えたが、週休二日の状態に戻った。これで勝つる、いや、書ける！

あ、それはそうとこの間体調を崩し病院に行った時の事なんですけどね。会計の人が「緑川光様、緑川光様。会計の準備ができましたのでお越しく下さい」って言ったんですよ。そりゃもう全力で周りを見渡しますよね？

結局トイレか何かに行ってたみたいで誰も会計へと向かいませんでした。が、キヨロキヨロしてたら隣のおばちゃんにもの凄く睨まれたので「フツ、なんだ気のせいかな」と言って誤魔化しました（誤魔化せたのか！？）。

では、本編をどうぞ。

クリスとの亀裂

「おー！すー！いやいやいや聞け聞けお前達！俺の運たるや、まさに豪運と言っていい領域だぜ？ ガラガラ回しまくって、豪華景品GETだぜ！」

そこへ、場の空気を読まず、陽気なキャップがやってきた。

「しかも、帰りにバイト先から余った寿司をもらってきた。皆、寿司を食いつつ俺の偉大さを祝ってくれ！ ま、ネタは卵ばかりだな！」

そう言っただけでテーブルに置かれた皿は、見事に黄色。本当に卵だらけだった。

「……って、あれ？ 何だこの空気？」

そこでようやく、キャップは部屋の空気がおかしいことに気付く。いや、遅すぎるだろ。

「ずるいぞう、大和！ 俺のいない間に、何青春っぽい気まずい雰囲気になってるんだよ！」

と、そんなことで動じるキャップではなかった。

流石というかなんというか……とりあえず、本気で悔しがるキャップに、大和が先ほどの経緯を説明した。

「……ふーん。ってか、もう全部解決してんじゃん。クリスが謝ったんなら終わりじゃね？」

「まあ、な」

「ま、一回くらいこういうのは仕方ねえわな」

キャップはとても寛大だった。

だからこそ、俺達のリーダー足りえてるんだろうけどな。

「とりあえず皆。今ちよつと気まずい思いをした関係を修復する意味で、いかねーか？」

そう。キャップが当てたのは、2泊3日の箱根旅行団体招待券だったのだ。

事前に連休に予定を入れないようキャップに言われていた風間ファミリーのメンバーは当然のこと、転入&新入してきたクリスとまゆっちにも予定はない。

こうして、新メンバーのクリスとまゆっちを含む俺達風間ファミリーは、連休を箱根で過ごすこととなった。

「……あれ？ この写真、皆さんの小さい頃ですか？」

場もだいぶ落ち着き、皆で卵寿司を食べていると、まゆっちが部屋に置いてあった写真を手に取り呟いた。

「おー。8人そろってるだろ」

「皆、面影があるな」

写真に興味を持ったのか、クリスもまゆっちと一緒に写真を見始め

た。

「背の高い花ですねえ」

「ふふーん。その花、リュウゼツランって言うのよ」

「犬が知っているとは。よほど大事な話でもあるのか、この花には……」

特に花の名前に詳しいわけでもないワン子が自慢げに言うので、クリスは興味が沸いたらしい。

教えてくれと言わんばかりの目で、こちらを見ている。

「ああ、それはね……」

クリスの疑問に対し、大和が昔の事語りだす。

皆で空き地で遊び始め、そこで竜舌蘭を見つけたこと。

竜舌蘭を護る為、嵐の中空き地まで行ったこと。

そして、そこで

「そこで、初めて俺達は士郎と会ったんだ」

「そうそう、あの時は凄かったよなー！ 剣がいつぱい振ってきて、木材を地面に縫い付けたんだぜ？」

あ、キャップめ、余計なことを。

「そうだ、シロウ！ さっきの剣。あれはいつたいたんだったんだ！？」

「あ、私も気になります」

くそ。せっかく話が逸れていたというのに、キャップのせいでクリスとまゆっちが投影の事を気にし始めたじゃないか。
まあ、ファミリーに入るんだったら、どうせいつかは説明する羽目になるんだろうけど……。

「はあ……じゃあ説明するけど、キャップ。あまり迂闊に俺の魔術の事は言わないでくれ。一応魔術は隠匿するものとされてるから」

「悪い。気を付ける」

俺はクリスとまゆっちに、魔術の事を説明した。

魔術に関する全てを説明するのも面倒なので、今回は俺の使える投影、変化、強化の3つのみ。

この世界へ移動した経緯も、大まかな部分を濁し説明した。

「本当に魔術なんてものが……！？」

「でもクリスさん。私達は、実際に土郎さんが何も無いところから剣を出すのを見ていますから」

困惑しつつも、実際に俺の投影を見た為2人は何とか信じてくれたようだ。

「ま、俺の話は置いておいてだ。それで、俺達は50年後もまた皆でこの花と写真を撮ろうと決めたんだ」

「その空地、埋め立てられちゃったけどな」

「でも、アタシ達できつちりこの花の子供を移したのよね！ このビルの下の草地にさ」

そう。空き地が埋め立てられると知った俺達は、リュウゼツランの苗を掘り起こしたのだ。

しつかりと根が張っていて取るのが大変だったが、まだ小さいながらもリュウゼツランは無事に成長を続けている。

「あ、あの！ もしよろしければ……！」

「ああ。次はまゆつちとクリスマスも一緒にな」

まゆつちの言わんとしたことを察したキャップは、まゆつちが言い切る前に了承する。

というか、サラッとまゆつちをあだ名で呼んでいるキャップ。

「はいっ、今から楽しみですよ！」

「……ありがとう」

クリスマスも穏やかにほほ笑む。

うん、これでほんとに一件落着だな。

「ふう、外の空気を吸ってきてリフレッシュ……」

その時、いつの間になくなったのか、ガクトが戻ってきた。
……ほんとにいつ出て行ったんだ？

「ガクトの為に、沢山残しておいたぜ」

「友達の余計な気遣いが泣けるぜ」

そんなガクトに、大和は笑顔で残った卵寿司を全て押し付けるのであった。

こうして、一波乱あった金曜集会は終わりを告げる。

……ちなみに、余った寿司はワン子がおいしく頂きました。

秘密基地からの帰宅中。

「む？ 皆すまない。先に行つててくれ」

クリスが一人道をそれる。

「なんだ？」

「どうした？」

疑問に思い、クリスの行く先を見ると、小さな人ばかりができ何やら揉め事が起きてるようだった。
なるほど。義を重んじるクリスには見逃せないわけだ。

「クリスは俺が見とくから、みんな先に行つてくれていいぞ」

「ん、じゃあ任せた。後でな」

「ああ」

俺もみんなと別れ、クリスの後を追う。

クリスがそこの不良に負けるとは思えないが、KYなクリスが介入することで場がさらに悪くなる可能性がある。それは防がねば。

「お前達、今その人からお金を奪っただろう。返すんだ」

「ああ！？ 何だデメエは？」

「俺達は奪ったんじゃないよ、こいつに借りたんだよ。なあ？」

「……は、はい」

もめ事を起こしていたチンピラ……もとい不良たちは、どうやら力ツアゲをしていたらしい。

だが、カツアゲをされていた少年は、不良にビビりその事実を認めることができない。

「あくまで認めない気が、この悪党め」

「悪党？ 俺達は友達から金を借りただけだぜ？ 言いがかりはよしてくれよ、正義の味方気取りの外人さん」

クリスの実力を知らない不良達は、小馬鹿にしたようにクリスを挑発する。

だが、それがクリスを怒らせた。特にクリスは、自分の行動を「正義の味方気取り」と言われるのが許せなかった。

「お前達……！」

クリスの手刀が不良達へ伸びる。

その手刀が不良達の首をとらえようとした瞬間、

「そこまでだ、クリス」

士郎に腕を掴まれ、止められた。

「何故止めるんだ、シロウ！」

「っ！？ お、おい。白い髪に黒い肌……こいつ、まさか」

「ああ、間違いねエ……！」

手刀を止められたクリスは憤慨し、士郎の姿を見た不良達はあからさまに狼狽えた。

不良達には見覚えがある。確か前にも似たようなことをしていて、俺が注意したはずだ。

……まあ、その後止むを得なくこちらも手を出したわけだが。

「事情は見てたから大体わかってる。お前達、金をその人に返せ。本当に金を借りたいほど困ってるなら、俺が貸してやるが？」

不良達が嘘をついているのが分かっている士郎は、軽口を叩いてはいるが、鋭い目つきで相手を睨む。

「……っく！？ 衛宮士郎相手じゃ分が悪い、帰るぞ！」

「ちっ！」

不良達は金を少年に投げ返し、その場を去って行った……。少年のを見送った後、俺とクリスも寮への帰路に着く。

「……シロウ。なぜ自分の邪魔をした」

時間も経ち多少冷静さを取り戻したようだが、不機嫌にクリスは言ってきた。

「邪魔をしたつもりはないけど、手を出すのはよくない」

「そんなことはない！　アイツらはカツアゲをして、更には自分を侮辱した悪だぞ！　悪は成敗しなくてはいけない」

「……確かに、悪いことをしたなら罪を償わなければならない。けど、それを力によって行うのは違うんじゃないか？」

クリスの考え自体は間違いじゃない。

けれど、力で押さえつけ傷つければ、そこから負の連鎖は始まってしまう。

「なら言わせてもらうが、お前のやったことは力づくではないというのか？　不良達に睨みを利かせ下がらせた。方法はどうかあれ、力でねじ伏せたようなものではないか」

「ああ、それ自体は否定しないし、俺が正しかったというつもりはないよ。けど、過程はどうあれ結果は違う」

「結果……だと？」

クリスは理解ができず、疑問符を浮かべる。

「あのままクリスが暴力によって鎮圧しても、彼らは確かに少年に金を返し去って行ったと思う。けど、それではいつかあいつらは不

満が溜まってやり返しに来るだろう」

「それは、シロウのやり方でも……」

「いや、俺の場合は確かによくは思われないうが、怪我をさせたわけでもないからな。奴らが俺に因縁をつける理由がない」

ま、不良なんて奴らは理由がなくても因縁をつけてくるもんだけど、そこは黙っておこう。

「俺が風間ファミリーの二員なのは川神市では結構有名だし、最悪モモ先輩の名前を出せば無駄な争いは起きないさ」

「それは、ずるくないか？ モモ先輩を利用してみたいで」

お堅いクリスの事だ、そう言うだろうとは思ってたけど……。

「無駄な争いが起きることに比べれば、この程度のずるさは問題じゃないさ。それに、利用すると言ってるけど、モモ先輩に了解は取ってあるし、良い言い方をすれば仲間を頼ってるんだ」

昔は士郎も自分だけの力で何とかしようとしていた。

けれど、そんな士郎にキャップや仲間達は言ったのだ、

《利用するとかしないとか、難しい考え方すんな。仲間なんだから頼って当然だろ？ もっと気楽に考えようぜ》

と。

そのおかげで、俺は仲間達とは何も遠慮せず共にいることができる。

「詭弁だな」

「そうかもな」

すぐに理解してもらえないとは思わない。
けど、いつかクリスにもわかってほしい。

「俺は俺の信じる正義を目指すだけだ」

「……ふん、自分はお前が正義を目指しているとは思えないけどな」

それから、終始無言で寮まで帰る二人であった。

「ただいま」

「……ただいま」

「おう。おかえり」

大和に出迎えられるが、クリスはスタスタと自分の部屋に行ってしまった。

「……なんかあったのか？」

「いや、ちよつとな」

大和に事情を説明する。

「ああー……クリスが相手じゃしょうがない。俺は士郎の護るモノ

の為なら何でも使っつていうのはいいと思うけどな」

「む、間違っちゃいないが、なんかやな言い方だな」

「でもさ、小さい頃よく特撮ものとか見てて思ったんだけどさ。正義の味方がだから正々堂々と戦うのはいいけど、もうちょっとズルい手を使えばもっと被害が防げるんじゃないかと思うことがあった」

「まあ、それは確かに」

子供の頃ならいざ知らず、今の俺が特撮ヒーローの立場であつたなら効率のいい方法を選ぶだろう。

大抵の特撮ものでは、人間大の怪人を倒した後はその怪人を巨大化させる能力もしくは方法を持つ怪人が現れ巨大化させ、最終的に口ポットで倒すというのがセオリーだ。

だけど俺から言わせてもらえば、巨大化させられるのは分かっているのだから、あらかじめそのことも視野に入れ、怪人を巨大化させるに來た怪人の方を優先して撃退する。

そうすれば、それで降敵は怪人を巨大化させることはできなくなり、その後の被害も減る。

「それに、本当に悪質な手は士郎は使わないだろ？」

「当たり前だ。卑怯な手もあくまで手段として身に着けてはおくだろうが、実際に使うかと言われればできるだけ他の方法を考えるさ」

「だから俺は士郎が好きなんだよ」

大和は冗談を混ぜて言う。

だったら俺も、冗談で返そう。

「ありがとう。京に殺されたくないから、お友達で」

「ちっ、フラれた。まあいいや、クリスの事は早めになんとかしとけよ」

「ん、頑張る。この連休の旅行中には何とかするさ。その時は力を貸してくれ軍師」

「了解、正義の味方」

お互い軽口をたたき部屋へ戻った。

翌日、やはりクリスの機嫌は悪かった。昨日の今日では無理もない。今クリスに話しかけても機嫌は治りそうもないので、今日はおとなしく旅行の準備に徹するとしてしよう。

朝から半日かけて必要な物を買そろえる。

長い間旅をしていたからそんなにかからないと思ったが、思いのほか時間を食ってしまった。

寮への帰り、河原を走るモモ先輩とワン子を見つける。

「各地を転戦し名を広め見識を広め、何も無い荒野をお姉様と走っていく。ロマンよね」

「化粧っ気のかけらもないな」

「いやーじゃない。内面を磨く時期だと思えば。それに、人生経験高い方がいい女になると思うし」

どうやら卒業後の事を話しているらしい。

それにしても、ワン子からあんな言葉が出ようとは。知らぬ間に成長したんだな……。

子供はいないけど、娘の成長を喜ぶ父親の心境が分かる気がする。

「おー、ワン子の口からそんな言葉が出るか。誰か気になる奴でもいるか？」

「ええ、いるわ！」

なん……だとっ！？
父さん許さんぞー！

「何っ！！どこのどいつだ！？」

流石のモモ先輩もびっくりしている。
気持ちわかるぞ、モモ先輩。

「お姉様よー！」

「！？ つ、い、妹に告白された……」

マジかよ！？

「姉と妹では我慢できないか？」

「ええ。次の段階に進みたいわね」

さらに、真剣^{マシ}かよっ！？

「禁断の果实か。食べてみるのもありかもしれん。受けは性に合いそうにないから、攻めでいいか？」

いやいや。そこは止めようよモモ先輩。姉として。

鍛錬の邪魔はしないつもりだったが、このままワン子を百合の花が咲く乙女の花園へ行かせるわけにもいかないと思い、2人を止めようとした瞬間。

「アタシになりたい関係はね……せい!!」

突如ワン子の鋭い正拳がモモ先輩を襲う。

だが、モモ先輩はワン子の拳を視認してから、驚異的な反射神経でガードした。

「強敵と書いて、とも。前に言っただよね、アタシがお姉様のライバルになるって。……アレ、本気だからね！　じゃ、先に帰って川神院の人と組手してる！」

自分の言葉に照れたのか、ワン子は言うだけ言って走って行った。

モモ先輩は、一人河原に残される。ま、俺がいるけどね。

「本気、か……」

む？　様子がおかしいな？

「そろそろアレを言う時期が来たな……」

アレって一体なんだろうか？

「ところで、美少女の会話を盗み聞きとはいいいご身分だな士郎」

「気付いてたのか」

ばれてしまったのなら仕方ない（まあ、もともと隠れていたわけではないが）。

俺はモモ先輩に近づく。

「アレって一体なんだ？ モモ先輩」

「お前には関係のない話だ」

「関係なくはないだろう。モモ先輩もワン子も、俺の大切な仲間だ」

おそらくは結構深刻な話だろう。

だけど、いや、だからこそ力になれるのならなりたい。

「……悪かった。でもな、こればかりは川神院とワン子の問題だ。いずれ……話せる時が来るまで待ってくれ」

「……分かった」

「じゃあな」

「ああ」

河原を歩くモモ先輩の背中を見送る。

この時俺は、モモ先輩の言っていたアレであんなことになるとは、
思いもしなかった……。

クリスとの亀裂（後書き）

原作を知ってる方は、物足りなさがあるかもしれません。が！原作通りに進めていくと、終わりが見えないんですよ！省けるところは省かないと！

とまあ、こんな感じでクリスと士郎を衝突させ、ワン子のアレがアレになるよう伏線を入れ、とりあえず今回の話は終了。

次話なるべく早く更新できるよう頑張ります！

とりあえず来週中には……！！

それでは、また次回！！

箱根旅行1日目 く覗きは男の浪漫く（前書き）

眠いです。

箱根旅行1日目 く覗きは男の浪漫く

ピピピピピピ、ピ！

時刻は四時。目覚ましを止め、布団から出る。

今日は仲間達との箱根旅行。家を出るまでに鍛錬と準備を終わらせなければ。

「……よし、こんなところか」

手際よく昼ごはんの仕込みをする。

これだけ下ごしらえをしておけば、後は起きてきたまゆっちと京に任せて大丈夫だろう。

俺は日課の走り込みの為、河原を目指す。

「おはよー！」

「おう、おはようワン子」

今日も新聞配達をしていたワン子と出会う。

「今日は楽しみね」

「そうだな。遅刻するなよ？」

「大丈夫よ！ 昨日のうちに準備してあるから」

「ん、なら安心だな」

ワン子は生活面ではしっかりしてるから、心配は杞憂だな。
ま、モモ先輩はどうか知らんけど。

「じゃ、後でな」

「んー、じゃーねー」

新聞を抱え、3つのタイヤを引き走っていくワン子。
あれだけ頑張ってるんだ。きっとワン子は川神院の師範代になると
いう夢を叶えることができるだろう。

「……頑張れよ、ワン子」

川神から箱根湯本までは電車で1時間30分。

川神駅から“特急踊り漢”に乗れば一本だ。

風間ファミリー全員、10人で騒がしいながらも無事箱根湯本に到着。

本来なら、ここからバスで山の上にある旅館まで行く予定だったの
だが……。

「アタシは山の中を走って旅館まで行きまーす」

1時間30分も電車で大人しくしてたのが我慢できなかったのか、
ワン子が山を走って旅館まで行くと言い出した。

「つか、何でわざわざ公道じゃなくて山道を行こうとするかな。

「今日のノルマは私達十分こなしたろ？」

モモ先輩がそう言うということは、朝俺と別れた後、しっかり鍛錬をしてきたという事だろう。

「まだまだ。駆けて駆けて駆けまくるのよ！ 勝負よクリ、どっちが先に旅館までたどり着けるか」

「いいだろう。自分もノルマはこなしたが、そこまで言うなら相手になろう」

ワンスの挑発に乗り、クリスまで山道を走ろうとする始末……なん
で。

そうこうしているうちにバスが来る。

「荷物は持っていったいやる。ほらお前ら、バスに乗り込めー」

ワンスとクリスの荷物を持ってモモ先輩がバスに乗り、皆もその後
に続く。

ワンスは言わずもがな、クリスもどこか抜けているところがある。
心配だ。俺は……

「悪い大和、荷物頼む」

「了解。これ旅館までの地図、お前も大変だな」

こうなることも予想していたのか、大和は俺に地図を渡し、バスへ
と乗り込んでいった。

「はあ……強化、開始」
トレース オン

さて、山を駆ける武士娘と騎士娘を追うとしますか。

体に強化の魔術をかけ、ほぼ獣道と言っても過言ではない道を駆け抜ける。

走り続けること5分ほど、ようやく二人の後姿をとらえる。

「……どんだけ早いペースで走ってるんだよ」

強化している状態で、追いつくまでに5分もかかるとは。

俺はさらにスピードを上げ、2人に並ぶように走る。

「あ、士郎も来たのね！ やっぱり持つべきものは修行仲間だわ！」

「む……シロウも来たのか」

俺の登場で喜ぶワン子と、一昨日ほどではないにしろ、多少の居づらさを見せるクリス。

ま、しょうがないか。

「一応な。道に迷われても困るし」

「平気よ！ そこまで馬鹿じゃないわ！」

意気揚々と言って先頭に飛び出すワン子。

「もうその時点で違うから！ そっちじゃないから！」

「フツ、やはり所詮は犬だな。自分についてこい！」

ワン子とは違う方向へ行こうとするクリス。
自信满满に行くのはいいんだけど……。

「いや、お前も間違ってるからなクリス」

「むむむ……」

口を一字にしてこちらを睨むクリス。
俺は悪くないだろ。

「とりあえず俺が先に走るから、2人はついてきてくれ。結構本気でとばすから、2人の勝負にも影響はないだろ？」

「なんか、アタシたちが士郎より遅いつて言われてるみたいだけど……まあいいわ！ 勝負再開よクリ！」

「いいだろう。自分も異論はない」

ワン子は多少文句を言いたそうではあるが了承。
クリスもシロウが自分の馬に合わせて学園まで走り続け、決闘でも自分が敗北したことでその実力は認めているので了承した。

「そうだ、シロウ。さっきの事だが、自分は道を間違えたわけではない。あえて遠回りをしようと思ったんだ」

ああ、さっき道間違えたこと気にしてたのか。
頬を膨らますクリスが面白くて、俺はつつい笑ってしまう。

「むー…… 本当だぞ」

「わかった。それじゃあ行くぞ」

「ええ！」

「むー、ああ」

それから走ることに1時間。ようやく旅館が見えてくる。
旅館の前には、大和が待っていてくれた。

俺は両手の干将・莫耶を消し滅速。大和の前で止まる。

「遅かったな」

「ああ、意外に險しかったからな」

「2人は？」

「もう来るだろ」

振り返り2人の姿を確認する。

「そらああああ！ ラストスパートオオオッ！！！」

「絶対に負けん！！！」

白熱した様子で走る2人。まったく減速する気配はない。
ちよつと待て。このままだと俺達にぶつからないか？

「大和……」

「だが策はある！」

おお、流石は軍師。この状況を打破する策があるとは。

「悪いな士郎。この策が使えるのは俺だけだ」

「え？」

言葉と同時に大和の姿が視界から消える。

同時に体にはワン子とクリスが突っ込んできた衝撃が走る。

吹き飛びながら俺が見たのは、京に抱えられている大和の姿だった。
ブルータスお前もか……

「じゃねえ！！」

体を空中で反転。態勢と整えて着地する。

「同時とはやるわね、クリ！」

「お前もな、犬」

お互い称えあう2人だが。

「まずはごめんなさいだろおが！」

スパーンと、小気味良い音を立てて俺の投影したハリセンが2人の頭を打ちぬく。

「何を……！？」

「あわわわわ!？」

鷹の様な鋭い目つきで睨む俺にクリスはたじろぎ、ワンス子は震える。まったく。競争心はいいことだが、もっと周りを見て行動してもらいたい。

「まあまあ、士郎落ち着いて」

「てゆうか、士郎だけなんでそんな草塗れ？」

大和と京は俺をなだめる為、仲裁に入る。

まあ、俺も本気で怒っているわけではないからもういいや。

「む、それは……俺が先頭を走ってたからだ。ほら、もういいからワンス子もクリスも風呂でも行ってこい。大和と京しかここにいないってことは、どうせ今自由行動なんだろう？」

「正解」

「はい、じゃ2人とも汗かいたからお風呂行こうね」

「はい」

「あ、いや、自分は……」

「いいから（ズルズル）」

抵抗するも、ワンス子共々クリスは京に引きずられていった。うむうむ。京とクリスも仲直りしたようで何より。

「……なんだよ？」

こちらをにやにや笑いながら見ていた大和に問いかける。

「いや、士郎はカッコつけだなと思ってな」

「は？」

「先頭を走ってきたから草塗れってウソだろ？ お前ここに来た時、干将・莫耶持ってたじゃん。大方2人の為に枝やら草やら斬り進んで道を造ってたんだろ？」

まさか、草塗れの体と干将・莫耶を持っただけで見抜かれるとは思わなかった。

流石の洞察力。伊達にせこい手を使っているわけではないな。

「まあな。でも真剣勝負をしてる2人が知ったら怒るだろ？ このことは黙っててくれ」

「了解。それよりお前も風呂入ってこいよ。待ってるから、あがったらゲンさん達の土産選ぼうぜ」

「ああ。じゃ、行くってくる」

風呂に入ってさっぱりした俺は、大和と共に川神の皆の土産を買い漁る。

その後、皆が帰ってきたので夕食を取り、再び今度はみんなで風呂へ。

俺今日土産買って風呂入っただけじゃん！？

「ふ〜いい湯だね」

「ああ、偶にはこういうのもいいな」

モロの感想に同意する大和。

ま、2度目だけど皆と入るとまた違う感じがするからいいか。

「見る貴様ら！ 俺の筋肉美！！」

「少しは隠してよ！ グロいんだよガクトのは！」

惜しげもなく肉体を晒し、あまつさえポーズまでとるガクトにモロは突っ込まずにはいられない。

確かによく鍛えられた体だとは思う。けど、俺も男だ。そんなもの見てもなんも嬉しくない。

「士郎にちなんで、伝説の武器で言うところのエクスカリバーだな、俺様のジュニアは！」

「俺にちなんでって何さ！？ つーか、『エクスカリバー約束された勝利の剣』なめんな！ お前のは破山剣だろ。一撃の威力はでかいが、使用できるのは一度きり。ま、お前の場合はその一度すら使えるかわからないけどな」

「んだと士郎テメー。刀剣オタクが俺の知らない剣の名前出しやがつて。じゃあ、他の奴らはどうなんだよ？」

「そうだな……キャップは切れ味が鋭く衰えない剣『デュランダル絶世の名剣』。大和のは一撃で狙い穿つ魔の槍『ゲイ・ボルク刺し穿つ死棘の槍』。モロは……暗殺された時、坂本竜馬が抜かなかったとされる刀『むつのかみよしゆき陸奥守吉行』

かな？」

って、何で俺は伝説の武器に例えてチ　コ談義してるんだ？

「デュランダルか。くゝ、カッコいいぜ！！」

「クー・フリーンの持つ魔槍か、悪くない」

「陸奥守吉行って……ねえ、抜かなかった刀」鞘に収まってるって事で、間接的に僕の包　のこと示唆してるの！？　ねえ！？」

3者3様ではあるが、喜んで？　くれたんならまあいいか。

「そー言う士郎はどうなんだよ？」

「俺か？」

そう聞かれるとどう答えたらいいものか？

つか、今さらながら自分の息子を伝説の武器に例えるとか……うわ、恥ずかし！？

「俺は……『勝利すべき黄金の剣』かな？」

「カリバーンとは、やっぱり士郎はカッコつけたな。カリバーンは選ばれし王しか抜けない剣。つまり、自分の好きな女にしか使わないってか、抜けないってか？」

「いやいやいや、大和下品。その表現は下品だから」

大和は勝利すべき黄金の剣の知識もあるのか。普通はエクスカリバ

「とカリバーンは混同しがちで、知ってる人は少ないんだが。にしても、モロの言う通り下品だ。だから言いたくなかったのに……」

「もういいだろ？ この話は終わりだ」

「そうだな、男共ヤローの局部の話なんてしてもつまらねえ。もっと健全な話をしようぜ。つーわけで、俺様は明日覗きをしたいぞ！」

頬を緩ませそんなことをのたまうガクト。

何故いきなりそんな話に？ いやま、確かに男性器の話をしてるよりは健全だけでもさ。

「そんなんではしゃぐのはお子様だぜ……なんて言うのは素人だ！
覗きたいなら覗け！」

「お前のその柔軟な考え方、俺様好きだぜ」

大和も乗り気なようだ。

まあ、俺も男だ。吝かではない。

「覗くって言っても、姉さん達じゃないだろ？」

「無理無理。モモ先輩に察知されて終わる。それよりも、俺様調べて分かったのよ。山の下の方にも旅館があって、頑張ればその女湯覗けるかもしれん」

この旅館よりも低い位置の旅館……確か山を駆けてくる途中に見かけたな。確かに、地形的にもあそこなら……。

「ネットで調べたらその旅館、明日から女子高生のラクロスチームが泊りにいくみたい」

さっきまでご機嫌斜めだったモロまで入ってきた。
というかネットでって、そんな情報どうやって調べた？

「ちなみに僕は参加しないから、頑張って行ってきてね」

「ちっ！ この白状者め。だからムツツリって言われるんだよ」

「言ってるのは主にガクトでしょーが！！」

そんな2人を横に大和は手を顎に当て、思案する。

キャップはおそらく参加しないだろうから、現状では大和とガクトのみ。

「士郎、お前はどつする？ ガクトだけじゃ成功率は50%……俺の策があつても精々65%がいいとこだ。だけど、お前がいれば成功率はもつと上がる」

「……」

俺は湯船から上がり、出口へと向かう。そして、2人に背を向けた状態で立ち止まる。

後ろからは、ゴクリと唾をのむ音。

「ところで大和、一つ確認していいかな？」

「……なんだ？」

「ああ、成功率を上げるのはいいが 別に、確実に覗いてしまっても構わんのだろう？」

いつもよりも芝居がかった口調。一見すれば、馬鹿な会話に見えるだろう。

しかし、大和とガクトは違った。

「もちろんだ！」

「絶対に天国へ^{パラダイス}とたどり着こうぜ！」

鍛え上げられたその屈強な背中と、力強い言葉に。

「では、期待に応えましょう」

一騎当千の力を得た気分になった。

こうして、邪念たっぷりの旅行1日目は幕を閉じた。

箱根旅行1日目　く覗きは男の浪漫く（後書き）

今回の話はチ　コです（　おい、こら！）。冗談です、いや、冗談でもないですけど。今回は基本ギャグでした。

ま、シリアス部分はルートが決まってからになるんじゃないですかね？

とりあえず、次回の更新はちょっと遅くなる可能性があります。詳細は活動報告で明日にでも報告したいと思います。

それではまた次回！！

箱根旅行2日目　く釣りっ！？　軍人だらけの覗き大会！！　裏切りもあるよ

お待たせしました、やっと更新です！

……ほんとにもっと早く更新したいんですけどね。
忙しくて忙しくて。

ま、なるべく早く更新できるよう頑張ります！

箱根旅行2日目　く釣りっ！？　軍人だらけの覗き大会！！　裏切りもあるよ

旅行二日目。

空は快晴。爽やかな天気だ。

女性陣が着替えている間、男性陣は釣りの手続きをして竿やバケツ等を借りてくる。

「男衆お待たせー。さあ、行きまっしょい！」

元気のいいワン子の声。

その後に続き、そろそろ女性陣がやって来た。

「ナイスタイミング。ちょうど釣竿とか借り終えたところだ」

「本当だ、立派な竿だね。触っていい？」

「この、俺が手に持つてる釣竿なら触っていい」

「チッ、大和のいけず」

いつも通り、京と大和の夫婦漫才も絶好調だ。

「夫婦とはわかってるね土郎。特別にこの天帝ハバネロカイザードリンクをあげよう」

「いらねえよ！」

つーか、また人の心読みやがったな。

恐るべし恋する乙女。あ、いや、恋する乙女じゃなくて、京曰く「愛を知る乙女」だったか？

「一応確認しておくけど、釣るのって魚？ 女？」

「女って何さ！？ 魚だよ！」

女を釣るって、それもはや女の発想じゃないよねモモ先輩？でも、実際それができるからこの人は恐ろしい。

「はいはい。遊ぶ前に士郎がツツコミ疲れちゃうからそろそろ行く」

大和のおかげで何とかその場は収まり、ようやく川へと出発できた。

そして、河原へ到着。

皆思い思いの場所で釣りを始める。

まあ、モモ先輩とワン子、そして京の3人は格闘修行をしに森の中へ行ってしまったが……。

「悪いなまゆっち」

「い、いえいえ。お、お任せください！」

「……ん？」

そろそろ俺も釣りを始めようかと思っていると、まゆっちが微妙に震えながら虫を針に着けようとしていた。なぜか自分の釣竿ではなく、クリスの釣竿に。

クリスは にこにこ しているが、まゆっちの震え様……どう考えても虫が苦手なのに無理してるよなあ。

「トレース 投影、開始。オン クリス、まゆっち、生きてる虫は針に着けずらいだろ？ よければこれ使ってくれ」

士郎が差し出したのは、数種類のルアー（もちろん士郎の投影品）。

「ああ……ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます！」

それを見たクリスは少し遠慮がちに、まゆっちはほっとした様に受け取る。

クリスの反応……まあ、だいぶ落ち着いてきたか。でも、まだぎこちなさがある。

早く仲直りしないとなあ。

「釣れてるか？ 愛しい仲間達よ」

と、しばらくしてモモ先輩が戻ってきた。

「あれ？ ワン子ともえもえ京たんは？」

「いない時だけ京をいじってやるとか、サドだな大和」

「まったくだ、このサド軍師」

ガクトの言葉に俺も頷いて同意する。

「あの二人は組み手に入った。後は好きにやらせるさ」

「京がどんどん素手で強くなっていく」

……確かに。

大和の言う通り、京は素手でもかなり強い。

その理由が大和を護る為、というのがまあ残念といえば残念だが、修行をしている京は真剣そのもの。

呆れを通り越して、もはや感嘆すら覚える。

「ははは、無理矢理襲われる覚悟はしておけ。そして、ボロボロになって泣いてる大和を、私がより激しく襲うとかどうだ？ ……なんかソソられるな？」

「返り討ちにして姉さんを泣かせてやるよ」

やめておけばいいのに、大和は言うだけ言ってその場から全力で逃げ出した。

逃げるくらいなら言うなよ。

「んーそういう負けず嫌いなところ好きだぞ。30秒待つてやる！ 逃げる逃げるー！」

「ま、大和もモモ先輩も楽しんでやってるみたいだしいいか……ん？」

その時、俺達の周囲の林の中から複数の人の気配を感じた。

見れば、全力で逃げていた大和も立ち止り、大人しくモモ先輩にかまっている。

「士郎ー！ 場所ー！ あと、どれくらいだー？」

モモ先輩も気づいたらしく、大声で俺に聞いてきた。

おそらく周りに隠れてるやつらの場所と人数だろうけど、そんな大声出したら意味ないだろ。

ま、といいつつ既に場所と人数は確認済みである。迷彩服を着てはいるが、魔力で強化したこの目はしっかりとその姿を捉えている。

「川の向こう岸に分散して18人、こっち側の森に12人。ワン子と京が修行してる方におそらく1人……あと、上空2？先からヘリが一機来てるな」

「士郎、お前ワン子と京の方へ行け。私は川の向こう側の奴らを狩る。こっち側のはクリとまゆまゆで充分だろ」

「了解 トレース
投影、開始」

言うや否や、モモ先輩は川の向こうへ文字通り飛んで行った。

俺は投影したレイピアと刀を釣りをしてるクリスとまゆつちに投げる。

「む？」

「！！」

クリスは？ を浮かべ地面に刺さったレイピアを見ているが、流石まゆつちは周囲の気配に気づいていたのか、刀を受け取り即座に

周囲を警戒し始めた。

「任せた！」

「お任せを！」

「む？ 何だいったい？」

返事をするまゆつちと、未だ状況がつかめないアホの子クリスを後に、俺は森へと急ぐ。

一方その頃、森の中で組み手していた一子と京の下に、突如長身赤髪に片目に眼帯をした軍人が現れ、組み手に乱入してきた。

「京……この外国人！ 相当鍛錬を積んでる！」

「うん。強い……展開の速さに戸惑ってられないね。迷ったらやられる」

一子も京も気を引き締め臨む。一子は天真爛漫に、京は冷静に鋭く。しかし、赤髪の軍人はその全てをあえて紙一重で回避し、力量の差を見せつける。

「中々やりますが……やはり、所詮野ウサギレベル。さあ、反撃されなさい！」

軍人は軽く跳び、必殺の蹴りを繰り出す。

「それはさすがに食らわない」

必殺の一撃を何とか避け、一子と京は軍人から距離を取った。

「京、ここからは真剣^{マジ}で行くわよ！」

「ん。本気だす」

「そうだ！ 可能性を捨てちゃいけない」

怯むことなく向かってくる一子達に、軍人も嬉々として応える。

「川神流・蛇屠り！」

一子は体制を低くし、相手の足を刈り取るかのような一撃を放つ。

「おっと危ない、このまま踏み潰して……」

足元への一撃を跳ねて回避した軍人は、そのまま空中からしゃがみ状態の一子に蹴りをくらわせようとするが、

「鳥落とし！」

その刹那、しゃがんだ“タメ”を利用した一子のサマーソルトキックが炸裂する。

「対空！？ あの体勢から馬鹿なっ……がぁ！？」

蹴るというよりも、斬ると形容するに相応しい鋭い蹴りが、軍人の体を蹴り飛ばし、

「次は私！」

京が着地の瞬間を狙って襲い掛かる。

「チィ！」

接近しようとした京を軍人は突きで迎え撃つが、京は弧を描くように軍人の腕を弾き上げ、

「せやつ！」

綺麗な背負い投げが決まる。

地面にたたきつけられる軍人。

だが、その一撃が軍人を本気にさせてしまった。

「……H a s e n （野ウサギ達め）」

軍人は静かに立ち上がり、鋭い目つきで一子と京を捉える。

「J a g d （狩ってやる）」

「「！！」」

軍人の雰囲気が変わったのに気付いた2人は、同時に攻撃を仕掛ける……しかし。

「この手応え……木？」

「トンファーか！」

どこから出したのか、軍人はトンファーを巧みに操り2人の攻撃を止めたところか京に狙いを定め、ガードごと吹き飛ばした。

「っ……！！！」

「京！」

「……まずは1人」

京の動きを止めた軍人は、狙いを一子へと変える。

「H a s e n J a g g d ! ! !」

「くっ……！！ このトンファーの乱撃、隙が無……」

「トンファーキック！！！」

「しまっ！？」

トンファーばかりに気を取られ、軍人の蹴りに反応が遅れた。今までで一番鋭い蹴りが、一子の無防備な脇腹を襲う。

「……？」

次に来る痛みを想像しギョツと目を閉じた一子だが、一向に蹴りはやってこない。

そつと目を開けてみるとそこには 頼りになる仲間の背中があった。

士郎は森を駆ける中、多少の疑問を抱いていた。

何故、これほどの人数に俺達風間ファミリーが狙われているのか。今までも、モモ先輩が狙われることはあった。（もちろん決闘という形式だし、モモ先輩は全て返り討ちにしていた）

だが、俺達全員を囲むようなやり方は初めてだ。

それともう一つ。奴らの来ていた迷彩服と、先ほど飛んでいたヘリには見覚えがある。

あれは確か、ドイツ軍の……

「……見つけた！」

そこまで考えたところで、森の中にワン子と京の姿を見つける。

それと同時に、赤い髪に眼帯をつけた軍人に京が吹き飛ばされた。

「なっ！？ なんでアイツがあんなこと！」

考えている暇はない。

京がやられ、今度はワン子に攻撃が集中している。

「トレース
強化、開始！」

士郎は自分の体に負荷が掛かるのも構わず、大量の魔力を身体に流し急加速。

腕や頬を木の枝で傷つけながらも走り続け、ワン子へと迫る軍人の蹴りの間に滑り込む。

「ぐっ！」

ミシリ と、骨の軋む嫌な音がした。

「なっ！？ お前は！？」

何とかワン子を護ることは成功したようだ。

俺の登場に驚く軍人を一睨みしてから、顔だけ後ろに向ける。

「無事かワン子？」

「し、士郎！？ ってあわわわ、士郎なんか怖い顔よ」

む、助けに来たのに怖がるとは失敬な。

まあ、確かに怒っているのは事実だからしょうがない。

「勝負の途中で悪いが、ここからは譲ってもらふ。こいつはちょっとした知り合いなんだ」

「わ、わかった。京と少し離れた場所で見てるわ」

ダメージを負った京を抱え、ワン子は距離を取る。

それを確認してから、俺は構えているマルギツテに向き直った。

「エミヤですか。勝負の邪魔をするのは感心しません、下がりなさい」

「真剣勝負なら邪魔はしないが、なら何故30人も軍の人間を連れてきた」

「それは……」

「それは私が説明しよう」

会話の途中で入ってきた男。

その男は、ある程度予想していた通り、ドイツ軍中将フランク・フリードリヒだった。

「おーい無事かー？ ワン子に京」

そこへ、ちょうどモモ先輩と大和もやって来た。

どうでもいいが、何故無事の確認に俺の名前がない？

「いや、お前は頑丈だし大丈夫だろ？ てゆーかワン子と京に怪我させてたら私がお前をボコボコにする」

「なんでさっ！？」

「……あー、話を続けてもいいだろうか？」

「あ、すいませ「父様！」ん？ クリス」

「おおクリス、我が娘。今日も美しい……」

モモ先輩達やクリスの登場で話は脱線し、数十分後にキャップ達も合流してからようやく話を再開することができた。

どうやら中将殿は、クリスから俺達風間ファミリーと旅行に行くと

いうメールを受け、心配で様子を見に来たとのことだ。

俺は子供がいらないから分らないが、娘が旅行に行くだけで30人もの兵と少尉まで連れてくるのは、親バカとしか思えない。当のクリスは喜んでるし……。

しかも、マルギツテも2・Sに転入させるそうだ。そんなことでドイツ軍は大丈夫なのだろうか？

「では、そろそろ帰るとしようか」

「おい。森の中にいたお前の部下30人、私とまゆまゆで軽く撫でといた。ちゃんと回収しとけよ」

「何だと。私の誇る精鋭部隊を？ マルギツテ、直ぐに確認を」

モモ先輩の言葉に、中將殿は慌ててマルギツテに確認させる。

にしてもモモ先輩。よくドイツ軍の中將相手にそこまで偉そうに話せるな。

俺はいつも敬語なのに……キレた時以外は。

「……連絡不能。制圧されてますね」

「そうか……本来なら、部下をやられて引き下がるわけにはいかんが、今回はこちらもマルギツテが襲いかかったようだ。互いに遺憾なしとしよう」

遺憾なしだと？

ワン子と京に軽傷とはいえ怪我をさせておいて？

俺の仲間達を軍人で囲んでおいて？

「ま、こちららもバカンス中だしいいか」

モモ先輩は気にしていないようだが、冗談じゃない。

「では、帰るとしよう」

「待て」

帰ろうとする中将殿を、俺は止める。

「何だね、エミヤ？」

「今回の事は、モモ先輩もワン子達もあまり気にしてないようだから、俺は堪えよう。だけど、忘れるなフランク・フリードリヒ。次に奇襲のような真似をしたら、俺の仲間を傷つけたらその時はそれなりの報いを受けてもらう」

空気が凍る。

普段の俺とのあまりの違い様に、風間ファミリーの面々は息をのみ、俺の実力を知る中将殿とマルギツテは僅かに汗を掻く。
しかし、そんな空気も一人のKYによって打ち消された。

「こらシロウ！ 父様を呼び捨てにすることはどういう事だ！ 偉そうに！」

クリスは怒っているが、こればかりは譲るわけにはいかない。

「いや、いいんだクリス。私が悪かったようだ。すまなかったねエミヤ、そしてサムライガールズよ」

「謝罪します。すみませんでした」

中将殿は頭を下げ、マルギツテもそれに倣った。

「では、今度こそ帰るとしよう。エミヤ、君のその相手の立場に怯むことなく、自らの正義を貫く姿を私は尊敬するよ。できれば、君の正義とはぶつかりたくないものだ」

「俺も、仲間の親と戦うのは御免です」

「ありがとう」と笑って中将殿は上機嫌で帰って行った。

その後、気を取り直して釣り再開。

修行をしていた京とワン子も釣りに加わり、キャップは釣った魚を川下の釣り人に売りに行った。

そして、クリスは……………

「……………（キツ）」

先ほどの一件のせいで、俺はずっと睨まれっぱなし。

仲直りどころか、さらに仲が悪くなってしまった。

そんな状況を察してか、河原でバーベキュー（食材は元から用意していたものと、キャップが川下の人達に魚を売る代わりに物々交換してきたものを使用）をしている最中、キャップが盛大に切り出した。

「お前ら、楽しい旅行中に喧嘩なんかしてんじゃねーよ。お互い溜まってるもんがあるなら、勝負でもしてスッキリさせりゃいいじゃないか」

「お、それいいな。何をやるかは、平等に私とキャップで考えてやる。まあ、準備もあるし決闘は明日だな」

つてな感じで、キャップとモモ先輩の提案で、俺とクリスは決闘をすることになってしまった。

「はあ……了解」

「わかりました」

まあ、いい考えも浮かばなかったし、難しく考えずに時にはぶつかり合うことも必要か。
ちよつと心配なことはあるが、一度の決闘ぐらいなら耐えられるだろう。これも川神魂だ。

明日に決闘を控えた、2日目の夜。

「フッフッフ。俺様出現、右良し左良し」

「安心しろ。周囲に人はいない」

旅館の一室。そこに、ガクト 大和 そして俺は集まっていた。
あの計画を実行するために。

「覗きポイントは分かってるんだな？」

「1日目に調べ済みだぜ、俺様つてば」

ガクトと大和はやる気満々である。

「……………」

「どうした士郎、脇腹なんて押さえて？　心なしか顔色も悪いぞ？」

「いや、何でもない。大丈夫だ」

心配する大和に手を振って答える。
そつだ、大丈夫だ。こんなのいつもの事じゃないか。

「そうか？　なら兵は神速を尊ぶ。早速行こう」

「では冒険に出発だ！　財宝を求めて！」

俺達は大いなる一步を踏み出す。男の理想郷アヴァロンに向かって。
だが、その一步はあまりにも過去な一步だった。

「くくく。キイタゾキイタゾー」

川神百代が現れた！

「大変だ大和に士郎！　いきなりラスボスだ！　一番いい装備を頼む！」

ガクトは怯んだ！

「これはまずい！ 気配殺してたな姉さん！」

大和は逃げ出した……しかし、逃げ切れなかった！

「マジかよ！？ 命を懸けてメンテ使っても、ダメージを与えるどころか無傷で立ってそんな相手だぞ！？」

士郎は混乱した！

「私も行こう」

「……はい？」

いきなりの発言に、俺達3人はアホみたいな声を出してしまった。

モモ先輩はなんて言った？ 「私も行こう」？
それはあれですか？ よくある、世界の半分のあるから仲間になれるな感じの逆バージョンですか？

「私もねーちゃん達の裸を見る」

川神百代が仲間になりたそうにこちらを見ている。

「ラスボスが仲間になりたいって言ってるぞ？」

「もし本当なら凄い戦力だぞ？」

「ふむ……」

もう一度モモ先輩の方を見る。……その目は輝いていた。
川神百代を仲間にしますか？

はい
いいえ

テテテッテッテッテ

川神百代が仲間になった！

「で、どっちだ？ どこで覗ける？」

「頼もしい味方がついたぜ！ こっちだ！」

俺達は暗い山の中を進む。

しばらく進むと、明かりと共に夜空へと立ち昇る湯気が見えてきて、女性の声が聞こえてきた。

「ポイント到着。ターゲットはラクロス部女子学生」

「ぷりぷりのピーチやメロンが並ぶ八百屋を堪能だ」

俺と大和は顔を合わせる。おそらく思ってることは同じだろう。

（（こいつら、頭おかしいんじゃないか？））

「さあ、この茂みを抜けるとエルドラドが……」

ガクトが茂みへ入ろうとした瞬間、

「え………？」

首筋に冷たい感触。

「残念だけど、そこまでだガクト」

そう。ガクトの首筋に剣を当て動きを止めたのは、何を隠そうこの俺、衛宮士郎だ。

もちろん、もう片方の手でモモ先輩の方にも剣を向け牽制している。

「士郎、テメエ……どういっつもりだよ」

「どういっつもり？ 長年の付き合いでわからないかガクト。俺は衛宮士郎だぞ？ 覗きを阻止することはあっても、覗きをする事はない」

全てはガクトを止める為、一緒に覗くフリをしていたのだ。

「大和！ 何とかしてくれ！」

ガクトは大和に策を求めるが……

「……はい、ええ。すぐお願いします。っと、悪いなガクト士郎が止める為についてきたのは分かってたからな、俺は士郎側に着かせてもらった」

「なっ！？」

そう。大和は俺の意図に気づき、早めに協力を申し出ていたのだ。

「モモ先輩！ モモ先輩は俺様の味方だよな？」

「あつたりまえだ！ 士郎、弟……よくも邪魔をしてくれたな……！！ これは、6人ほどの人間がこつちにくる！？ 大和、お前か！」

「悪いね、姉さん」

さつき大和が電話をしていた所。それはこの旅館だ。

大和は俺が動くと同時に、女風呂の外に不審者がいると連絡していたのだ。

「ちつ、もう覗く暇はないな。なら、面倒が起きる前に！」

「「「え……？」「」」

一瞬の油断。

気付いた時には俺 大和 ガクトの3人は、5月の冷たい川の下流へと投げ捨てられた。

「しまった~~~~~！？」

「マジかよ~~~~~！？」

「何で俺様まで~~~~~！！！？？」

「無事帰ってこいよ~~~~~！！」

こつして、旅行2日目は冷たく幕を閉じた。

箱根旅行2日目　く釣りっ！？　軍人だらけの覗き大会！！　裏切りもあるよ

はい、前回のノリノリ士郎君とは一変、やっぱり士郎は士郎なのでした。

騙されただろう？　……え？　そんなことない？　ああそうですか。にしても、クリスと士郎の関係がさらに悪化したね大変だ！……。何にしても、次回の決闘で2人の仲は改善されるでしょう！

それではまた次回！！

万物、悉く切り刻め（前書き）

忙しすぎて中々更新ができないものですね！。

今年の仕事の休みは後2回のみか……。

今年中にもう一度更新できるだろうか？

更新できるかわからないので先に言っておきます。

読んで下さっている方々、良いお年を！

万物、悉く切り刻め

旅行三日目。

旅館の朝食はバイキング形式で、女子メンバーはすでに食事を始めていた。

「にしても、男子メンバーの皆さんはまだ寝てるんですかね？」

いつまでたっても現れない士郎達に、まゆっちは心配そうに言った。

「どうせ、キャップやガクト辺りが起きないんだろ？ ちゃんと士郎達が起こしてくるさ」

「私、ちょっと様子を見てきますね」

百代は大して気にした風ではないが、まゆっちはやっぱり心配だったのか、自分の食事を終えてから様子を見に席を立った。

その頃、男子の部屋では……

「はい、旅館の人に救急セット借りてきたよ。ついでに氷ももらっ

てきた」

百代の予想とは違い、全員が起きて忙しく動いていた。ただ一人、士郎を除いて。

「悪いなモロ……痛てて」

「ほら士郎動くなつて。今応急処置するから……ガクト、モロがもらつてきた氷をもう少し小さく砕いてくれ」

「任せろ、オラァ！」

大和の指示に従い、己の握力で氷を砕くガクト。

武士娘たちの存在で隠れがちだが、ガクトのパワーは半端ないのである。

その力は、握力計の針が振り切るほどだ。

「とりあえず、士郎は氷で脇腹冷やしとけよ」

「ああ」

何故士郎がこんなことになっているのか。

それは昨日、ワン子を庇いマルギツテの蹴りを受けたのが原因だ。

無茶な強化で加速した為、士郎は防御が間に合わず無防備な脇腹で攻撃を受けてしまった。

おそらく、それで骨に痺が入っていたのだろう。それなのに、昨夜川に投げられた時に大和とガクトを庇うように川に落下し、更に悪化してしまった。

「よし、氷でだいぶ腫れも引いたな。湿布を張って……大和、包帯

取ってくれ」

キャップは妙に手慣れた手つきで、士郎に包帯を巻いていく。

「にしても凄いなキャップ。いつ怪我の処置の仕方なんて覚えたんだ？」

「前に出前のバイトで行ったえーと、じ、じ、じん……なんとか堂とかいう病院の先生と仲良くなつてよ。冒険家目指してるって言ったら、「応急処置ぐらい出来ないといけない」って教えてくれたんだよ。そっぴゃああの先生、自分は坂本竜馬と友達だとか言ってたな。その話真実味があつて面白かつたし」

坂本竜馬と友達？　なんか変な先生だけど……おそらく相当腕の立つ医師なのだろう。

しっかりと固定されるおかげで、痛みもかなり和らいだ。この分なら、無茶な動きでもしない限り大丈夫……な筈。

「にしても、本当にそんな傷でクリスと決闘するつもりか？　何なら日をずらすよう俺が策を弄してもいいけど？」

大和は心配そうに言ってくれるが……それはできない。

「いや、一度決めたことだ。それに、昨日キャップが言った通りいつまでも喧嘩しているわけにはいかないからな。策を弄するなら、クリスが俺に遠慮せず戦えるように誘導してくれ」

「……わかつた」

「かーっ！　なんかいいなそっぴゃあ。燃える展開だぜ！」

「“男”だな士郎。俺様そいつの好きだぜ」

「うん。本当は止めた方がいいのかもしれないけど、僕も応援するよ頑張て！」

長年の付き合いあつてか、皆止めるようなことは言わなかった。寧ろ応援してくれている。

後は、もう一人にも口止めしておくか。

「と、言うわけだ。まゆっちも手は出さないでくれよ」

「はあうっ！？ き、気づかれてましたか」

入り口で隠れていたもう一人の人物。まゆっちに声をかけると、驚いた様子でおずおずと出てきた。

まあ、気づいたのはホントについさっきなんだけどな。

俺が怪我をしたままクリスと決闘すると言った瞬間、まゆっちは動揺したのか気配が僅かに漏れた。

それがなければ気付かなかったかもしれない。

「で、ですが怪我をなされてるのでしたら無茶はしない方が……」

「分かっている無茶はしないさ。けど、聞いてたと思うけどこのままってわけにもいかない。本当にマズイ時は止めるから、それまでは怪我の事は黙っていてくれ」

「で、でも……」

「頼む」

「……」

優しいまゆっちの事だ、俺を止めようとするのは分かっていた。だが、俺は大和の様に上手く相手を言いくるめることなんかできない。俺にできるのは真剣に頼むことだけだ。

「わ、わかりました。でも、無理だと思ったら絶対にやめてくださいね」

俺の真剣さが通じたのか、まゆっちは真剣な顔で了承してくれた。

「ああ、ありがとう」

その後、何事もなかったかのように朝食を済ませ昨日釣りをした河原へと移動した。

現在午前九時。俺とクリスは河原で対峙している。

「これより、クリス対士郎のタイマンを行っぜ」

キャップの言葉に、俺とクリスは同時に頷く。

「ジャッジ兼司会進行は私とキャップだ。四露死苦」

ヤンキーっぱくふるまうモモ先輩は放っておこう。

「怪我をしてると聞いたが？」

「問題ない。激しく動くとちょっと痛むだけだ。一日中戦い続けたりでもない限り大丈夫だ」

「そうか」

クリスは心配そうに聞いてきたが、大和からも説明が入っていた為か割とすんなり引いた。

助かったよ大和。戦いに遺恨は残したくないからな。

決闘方法はキャップとモモ先輩が“川神戦役”の縮小版をすることに決めた。

“川神戦役”とはくじを引き出た種目で勝敗を決め、先に5勝した方が勝ちとなる。

くじの内容は武力が必要なものから知力が必要なものなど様々なジャンルのモノが入れられているので、あまりにもくじ運が悪くない限り、公平に勝負ができる。

本来は出た種目に対し強い奴が出る団体戦だが、今回はタイマン勝負。個人の総合力が試される。

じゃんけんの結果、俺が勝ったので先にくじを引かせてもらうことになった。

引いた紙をモモ先輩に渡す。

「おっ！ 士郎、お前面白いのを引いたな」

「？」

「内容は……じゃん！ Chain Death Match！」

「……はあ！？」

チェーデスマッチってあれか？ 鎖で互いを繋いだ状態で戦うあのチェーデスマッチか？

「ふふつ、Chain Death Matchか。腕が鳴るな」

クリスはやる気満々といった感じだ。

やだ、何この娘。こわい。

「」

何かモモ先輩は嬉々として地面に円を描き、鎖の準備を始めている。

「モモ先輩」

「ん？なんだ？」

「この勝負は棄権する」

「「はあ！？」」

いきなりのギブアップ宣言に、モモ先輩とクリスは同時に反応した。大和たち男メンバーは「やっぱりな」といった感じだ。

「見損なったぞシロウ！ 勝てない勝負と分かった途端棄権するなんて！」

「いや、勝てないと分かっただけであえて勝負するのは馬鹿だろう。一度きりの勝負で負けられない理由があるならともかく、五本先取制なら勝ち目のない勝負は即座に切り捨てるべきだ」

ガチンコの肉弾戦なら俺が勝てないのは目に見えている。耐久力にはそれなりに自信があるが、怪我した今の状態でクリスの

攻撃を耐えきれぬ自信はない。

もし耐えられたとしても、相手が悪党でもなければ、殴るにたる理由がない女の子を殴るなんて俺にはできない。

「それでもやりたいつてんならいいけど、俺は何もしないぞ。無抵抗の相手をリンチするのは騎士道に反するんじゃないのか？」

「むむむ……いいだろう、今回だけは見逃してやる。だが、もしまた戦わずして負けを認めるようなことがあれば、自分はシロウを許さないぞ！」

「……了解」

やれやれ。今回は何とかなったが、次は棄権させてくれそうにないな。

そんなことをすれば仲直りどころじゃなくなる。これは、そういうくじが出ないよう祈るしかなさそうだ。

俺、運悪いんだけどな……。

「気を取り直して、さあ引けクリス！ この俺が作ったくじを！」

「ああ、わかった」

キャップの持つくじ箱に手を入れるクリス。にしてもこの2人、テンションが真逆だな。

「引いたぞキャップ。読み上げてくれ」

「よっしゃー！ 第二回戦は……料理対決！」

よかった料理対決か。それなら傷を心配することもないし、棄権する理由もないな。

でも、材料はどうするんだ？

「ちなみに材料は今日も今日とて、川下で釣りしてたおっちゃん達にもらってきた」

並べられる野菜や肉類と釣ったばかりであろう魚。

確かにこれだけ材料があればそれなりの物が作れるだろう。

「ちなみに審査をするのはこの3人だ。まずは偏食代表島津ガクト」

「好きな食べ物は肉、飲み物は肉汁です、よろしく！」

いや、体に悪すぎるだろ。

「続いて食事はバランス第一。川神一子」

「バランスのとれた食事は力の源。おいしくてバランスのいい料理を期待するわ」

うん。ワン子は健康的だ。

「最後は普通代表師岡卓也」

「普通代表って何！？ もうちょっとマシなのあったでしょ！？」

普通代表とは哀れな……。でも、モロだけ好みを聞けなかったのは痛いかな。

クリスの料理の腕がどのくらいかは分からないけど、それぞれの好

みがわかってれば料理も決めやすいんだが……。

「んじゃ、制限時間は30分、作っていい料理は一品のみ。料理対決はじめ！」

キャンプの掛け声と同時に士郎とクリスは料理をはじめ。

2人とも食材を選び持ち場へ戻る。ちなみに用意されているのは食器類と調理器具のみ。

必然的に地面にまな板を置いて食材を斬らなければならないわけだが……。

「トレース
投影、開始」

士郎は投影でテーブルを造り、流れるような動作で料理を進めていった。

「おおい！ あれはズルくないのか！？」

「そんなことないだろ？」

講義をするクリスを大和が止める。

「士郎は自分の能力を生かしたただだ。もしあれがズル^{チカラ}って言うんなら、例えば次のくじでレイピアでの戦闘とかいうお題が出た場合お前がずるいことになっちまうぞ？」

「む、むむむ……た、確かにそう、か？」

クリスがそんなやり取りをしている間に、士郎の下準備は終了。後は飯盒で米が炊けるのを待つ。

……それから数十分。

「出来た」

俺とクリスの料理が同時に完成。審査をしてもらう為、審査員の前へと並べられた。(もちろん審査員が座ってるイスも、料理を載せたテーブル、食器類に至るまで士郎の投影品だ)

「それじゃあまずは士郎の料理からにするか。やっぱりしめは美少女の手料理がいいからな」

何やらガクトが失礼なことを言いながら、蓋をされた俺の料理を開ける。

それに倣い、ワン子とモロも蓋をあけた。

「おおーっと！ 士郎の料理は炒飯。無難に炒飯だー！」

うるさいぞモモ先輩。別に無難だっていいじゃないか。一品しか作れず審査員の好みに対応するには無難なものの方がいい。まあ、一工夫はあるけど……。

「美味めー！ この滴る肉汁が何ともいえねエ！」

「何言ってるのよガクト。野菜も豊富であっさりしてて美味しいじゃない！」

「うん！ 濃すぎず薄すぎず、絶妙な味加減！ 量もちょうどいい美味しいよ！」

3人ともに好評のようだ。

ただ、同じ料理なのにどうしてこつも感想が違つのか？

「おつと、士郎の料理は好評の様だが何故三者三様の味の感想なのか。どういふことだもう一人の審判のモモ先輩？」

「うん。これは私も食べてみないと分からないなっ（ひゅん）」

言うが早いのか、モモ先輩はそれぞれの皿から一口ずつ炒飯を食べていった。

「早っ！？ で、モモ先輩どうだっ たんだよ？」

「うん。美味しかった」

「味の感想じゃねー！ バッキャロウ！」

いやいやいや。落ち着けよキャップ。

なんか口調がバイト先の店長みたいになつてゐるぞ？

「もういいや。じゃー解説のまゆっち、説明を頼む」

「ふえっ！？ わ、わわわ私が解説ですか！？」

「大丈夫だまゆっち。まゆっちならやれるつて。自分が信じられないなら、まゆっちを信じるオラを信じろ」

「わ、わかりました松風。黛由紀江参ります！」

急な振りに慌てるまゆっちだが、腹話術……もとい、付喪神の松風が喋っているという事は意外に余裕があるのか？

「えとえと、おそらく士郎さんが作った炒飯は全て一子さんが今食べている炒飯と同じものだったと。しかし士郎さんはその後肉だけを炒め盛り付け、炒めた時に出た肉汁をモロさんの少量、ガクトさんの残り全てをかけたのだと思われます。その為、味の濃さから油っぽさまで三者三様の味になったのではないかと……いなかでしょうか？」

「正解、さすがだなまゆっち。結構ばれないように作ったつもりだったけど、見破られるとは思わなかった。でも工夫はもう一つあってさ、実は量もそれぞれ違う量で出してるんだ。次にクリスの料理を食べなきゃいけないからな。それぞれ満腹にならず、かといって足りなくもない量になる様に」

ま、これはよく知る仲間同士だからこそできる芸当だけど「運も実力の内」だからな。

「おい。そろそろ自分の料理も食べてほしいのだが……」

「おっと忘れてた」

おい、司会進行。

「んじゃ、次はクリスの料理だ」

キャップの合図でガクト、ワン子、モロの3人は再び自分の前に並べられた皿の蓋を開ける。

「「「……っ!?!?」」」

だが、その瞬間3人は凍りついた。

「ふふつ、どうやら自分の料理に声も出ないようだ。料理ははじめ
てだった、意外に簡単だったなあ」

「「「士郎の勝ちで」「」」

「なんでだあああああ!!」

笑顔から一転、3人のジャッジでクリスは仰天する。

なんで？ そりゃそうだろう。何故ならクリスの料理は
ガクトの前の皿。

油揚げの中に牛、豚、鳥の肉がぎっしり詰め込まれている……生で？
ワンの皿。

油揚げの中に様々な野菜がぎっしり詰め込まれている……生で。
モロの皿。

油揚げの中に米が入っている……生で!?

「一応聞くけど……クリスの作った料理は？」

「おいなりさんだ」

「「「ふざけんな!!」「」」

静かな河原に風間ファミリー全員の声が木霊した……。

二回戦、料理対決は当然の如く士郎が勝利。
続く三回戦目、士郎が引いたお題とは

「大事な物なら護ってみせろ！ 撃墜対決!!」

「撃墜対決？」

撃墜対決。それは旅館に置いてあった古いインベーダーゲームを見てキヤップとモモ先輩が考えたらしい。

モモ先輩が次々と投げてるそこら辺の石を撃墜する勝負。

そして「大事な物なら護ってみせろ」の言葉通り、俺とクリスの後ろには人質もとい、ゲームでいえば残機ともいうべき存在（ファミリーの中からランダムで1人）が一人立っていて、モモ先輩の投げる石を落とせなければ自分の後ろにいる仲間に石が当たるというシステム。当然人質はその場を離れてはいけない。

残機は1なので、当然一度でも仲間に石が当たってしまえばその時点で負けとなる。飛んでくるのは石なので、今回の勝負は武器の仕様が可。

「クリス、武器は？」

「大丈夫だ。今日は部屋からちゃんとレイピアを持ってきた」

部屋から持ってきたってことは、この旅行に持ってきたのかよ……。

まあ、まゆっちは常に刀を携帯してるから何も言わんけどさ。

「あ、ちなみに士郎。魔術を使うのはいいけど、伝説の武器を使うのは禁止な」

「了解。（宝具の仕様は禁止か……）」

「じゃあ、私が石を集めてきたら始めるから準備しとけ（ひゅん……… だいま）」

「はええ！ 準備も何もねえよ！」

そんなこんなで、「大事な物なら護ってみせろ！ 撃墜対決！」開始。

ちなみに、俺が護るのはガクト。クリスが護るのはワン子になった。……別に不公平だなんて思っていないぞ。

「行くぞ2人とも！ そらそらそらあ！！！」

「せいせいせいせえええええい！！！」

「ふっ！！！」

降り注ぐ石飛礫。

クリスはその全てをレイピアで突き落とし、俺は黒鍵を投影して撃ち落とす。

「（結構な数と速さなのに全て突きで落とすか……これは長期戦になるか）」

士郎は無数の石飛礫を一度に両手で投げられる限界量である6本の黒鍵をうまく使って撃ち落としているが、クリスは一本のレイピアで突き落としている。そのことに、士郎は純粹に感心していた。

「けど、長期戦になったら不味い……かな」

さつきから黒鍵を投げる度に脇腹に軽い痛みが走る。

キャップの処置で気にならなかったが、結構酷い怪我だったようだ。

「2人ともやるな！。そろそろレベルを上げるぞ」

「「レベル？」」

俺とクリスが疑問符を浮かべるとほぼ同時に、モモ先輩の投げてる石の大きさが一回り大きくなる。

「なっ！」

「む！」

それを何とか迎撃する2人。
だが、先ほどよりもキツイ。

「（大きさが一回り違うだけで、ここまで変わるか）」

それから数十分。

俺もクリスも未だに石飛礫を……いや最早モモ先輩の投げているモノは石などではなく、岩と呼ぶのが相応しい大きさのものになっていた。

その飛んでくる岩を、俺もクリスも全て迎撃している。
しかし、それもそろそろ限界が近い。

石の大きさが変わる度、撃墜し落ちる石の位置が近くなっている。
今では俺の足元に迫るまでに。

「いたっ、いたっ！ 痛いわよクリ！ ちゃんと全部防いでよ！」

「黙っている犬！ 迎撃するのが精一杯で、砕けた岩の破片まで気を使ってる余裕はない！」

「……………」

ワン子を見ると、重傷というような傷はないが所々が赤くなっている。

今のサイズの岩ならまだいいが、これ以上大きくなるようなら怪我をする可能性がある。

「ほら、またレベルアップだ！ このサイズの岩防げるものなら防いでみる！」

モモ先輩は、更に巨大なありえない大きさの岩を片手で持ち上げる。テンションが上がりすぎて、モモ先輩はおそらくワン子とガクトの事を忘れているし、危なすぎて他のメンバーも近づけない。

俺は複数武器を投影すれば岩を破壊し、砕けた破片からもガクト一人なら護りきる自身がある。

だけど、レイピア一本のクリスでは……。

「……………」

「ふっ……………」

俺がワン子の方を見てからガクトに目を向けると、ガクトは不敵に笑ってポーズをとった。

「安心しろよ士郎。破片の石ころ如きでどうにかなる俺様の肉体じゃねえ」

「お見通しってわけか。……………悪い」

ああ。ほんとお前はガクト

「へっ、気にすんなよ正義の味方」

頼りになる。

迫る巨大な岩。まずは両手の黒鍵6本を投げる。当然のことだが、大岩は黒鍵が突き刺さってもビクともしない。当然だ、6本の黒鍵は楔なのだから。

「
トレス オン
投影、開始」

呪文と共に現れるのは、一振りの刀。
ルール上宝具ではないが、侮るなかれ。

この刀は代々大切なモノを護る為に振るわれ続けた守護の象徴。

「万物、悉く切り刻め」

」

その名は。

「
地獄蝶々！！！」

気合一閃。巨大な岩は二つに割れる。
だが、まだ終わりではない
！

「はあああああああ！！！」

本来の俺なら無理だが、俺が投影したのは刀だけではない。その刀の所有者の技術、経験までも投影し、己に憑依させている。そして、今回投影した人物は今から約2年前にこの刀を所有していた人。とある学園の風紀と生徒の身を護り続けた『鉄の風紀委員』

くろがね おとめ
“鉄 乙女”。

その剛剣は岩を切り裂き、黒鍵による楔もあり巨大な岩を粉碎した。

「ぐっ……トレース 投影、開始」

岩を粉碎した後、俺は地獄蝶々を手放しすぐさま次の投影へ。

投影したのは黒塗りの弓と無数の棘が特徴的な歪な黒い矢。

クリスはレイピアで岩を砕きはしたが、レイピアは折れ岩の残骸も大きさが大きい。あれでは、クリスもワン子も巻き込まれる。

「駆ける、緋の獵犬」 フルンディング
「赤原獵犬」！！」

走る赤い閃光。赤き獵犬はあり得ない速度で、ありえない軌跡を描き飛来する岩の破片を打ち砕いた。

「くっ……！？」

士郎はその場にうずくまる。自分の技量を越えた動きをしたため、完全に骨が折れてしまったのだ。

そんな士郎に、無情にも地獄蝶々で砕いた岩の破片が降り注ぐ。

士郎もここまで酷いダメージを受けると思ってたのか、回避行動が遅れ間に合わない。

その時

「（ぼそっ）」

「……！」

一陣の風が吹き、飛来する岩の破片はさらに細かく分かれた。

「今は……」

「そろそろ！ 次行くぞー！」

つて、アンタはまだ続けるつもりか！？

その後、勝負を続行しようとしたモモ先輩を大和が止める。

勝敗に関しては、仕方ないとはいえ宝具を使った俺の反則負け……となるはずだったのだが、クリスが異を唱えた為、この勝負はドロとなった。

「……」

現状は一勝一敗一分け。

引き分けの状態の今、次の勝負の勝敗で勢いが決まる。

「ねえ大和…… 士郎、キツそうじゃない？」

「だな…… 珍しく額に汗かいてるし、いつもより表情が硬い」

モロと大和は士郎の異変に気づいていた。

いや、2人だけではなく、口に出してはいないがキャップとガクトも真剣な表情で士郎を見つめている。

「士郎、なんかおかしくない？」

「ああ。さつきも変だと思ったが……土郎ちよつと怪我見せてみる」

「いや。大丈夫だ……っ！」

京やモモ先輩。女性陣に気づかれはじめても強がる土郎。
そんな姿を見て、

「……！！」

由紀江はついに動いた。

「も、もうだめです。松風、私は行きます！」

「行けまゆっち！ まゆっちなら出来る！ 止まれば倒れる自転車
がまゆっちが選んだ生き方だ。坂道を上るんだ！ ペダルをこげー
！」

「ど、どうしたのいきなりまゆっち！」

由紀江の豹変に驚く一子だが、由紀江はそんなことは気にならなかった。

言わないでくれと頼まれた。けれど、自分に優しく声をかけてくれた先輩が、友達が苦しんでいるのだ。

ここは引くべきではないと。

「あのっ！ 土郎さんの怪我は本当は軽いものではなかったんです
！ 本当は骨に痺が入っているほど重症で、それでもクリスさんの
間に遺恨を残したくないからと無理して戦っていたんです！」

静かな河原に清廉な声が響き渡る。

それは、初めてできた共の為に……。

万物、悉く切り刻め（後書き）

はい、出てきましたね地獄蝶々。知ってる方はいるんでしょうか？地獄蝶々を知らない方は、この更新日のすぐ後に発売される「つきす」のリメイク買えばいいと思いますよ。では、更新できた場合はまた会いましょう。出来なければ、年明けに再開しましょう。

それではまた次回！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7404/>

正義の味方と武士娘

2011年12月21日14時51分発行